
悪魔来

銀翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔来

【Nコード】

N1487B

【作者名】

銀翠

【あらすじ】

15歳にしてひきこもり学生の主人公十夜、夜に散歩をするのが趣味の彼だが、ある日たまたま見つけた卵により、彼の人生は大きく変わる…かもしれない

その1〜来襲〜

「十夜^{じゆちや}、仕事に行ってくるからね。冷蔵庫にご飯あるからチンして食べてね」ドアの向こう側から、母の声がある。「さっさと行けよ…」僕は小さく呟く。

僕の家は母子家庭で、母が仕事に出ている。父は僕が10歳の時に死んでしまった。片親しかいなくても、人間は育つもんだけど、まともに育つとは思わない。実際、僕は15歳にして引きこもり学生だ。高校に入ってから、まあいろいろあつて、一ヶ月ほど通つてそれから行つてない。もう三ヶ月ぐらいは学校に行つてない。僕は学校やめてもいいんだけど、母がそれだけは許さなかった。引きこもりの事には、特には口出ししないでくせにね。

「さて、何すつかない」やる事なんて、パソコンかゲーム、たまに読書するぐらいしかない。てきとーにパソコンをいじつて、時間をつぶす。

「さて、と」時計を見ると、もう深夜12時。母はまだ帰ってきていない。「また泊まりかよ、やれやれ…」仕事人間なのはご苦労なことだけど、少しは…。まあいいか。

部屋を出てキッチンに行き、ご飯を食べる。食べ終わる頃には、時間は12時半。僕は玄関で靴をはき、外へ出る。もちろん戸締りはオケーだ。

僕が住んでいるのは田舎のほうなので、夜は人が全くいなく、散歩するにはうつつつだけだ。時期は夏、人はいなくても虫たちはうるさく鳴いている。夜空には星がいくつも輝いている。そんな中を、散歩するのは僕が一番の楽しみだ。別に引きこもってるのが好きなわけじゃない、人間が嫌いなだけだ。

歩いていると、道路脇の草むらに、何か光っているものを見つけた。「なんだ？」僕はそれを手に取る。「卵…かな？」手のひら大ぐら

いの卵で、微かに光っている。「でかいなあ…なんの卵だろう」僕はそれを持って家に帰った。母はやっぱり、いない。

自分の部屋に行き、拾った卵を机の上に起き、まじまじと見る。「ダチヨウの卵かな？さすがにそんなわけないか」なんの模様もなく、白くてただでかい卵。何が生まれるか気になった僕は、それをタオルでくるんで暖める。

30分ぐらいだったが、卵は何の変化もなかった。ただ、淡い光を放っているだけだ。

「んー、寝るか」気になるが、時間はもう2時をまわっている。いつもは散歩の後すぐ寝ているので、眠い。「明日でいいや」タオルで二重にくるみ、僕は電気を消した。少しだけタオルから光が漏れていた。

「あー…」起きると朝になっていた。まあ当たり前だ。たまに昼になってるのはしょうがないことだけど。時間は9時、今日も一日暇だろう。

「ああ、そっぴや」卵のことをすっかり忘れてた。机の上にある卵をくるんでるタオルをとると、小さくひびが入っていた。「お、生まれるかな？」10分ほど様子を見る、でも変化はない。「飯だな」僕は卵をタオルでくるみ、ご飯を食べにキッチンに行く。

冷蔵庫に入ってる昨日の残りをチンして食べる、まずい…。

部屋に戻り、卵の様子を見る。ひびが少しだけ大きくなっていった。

「少しずつか…これなら後2時間ぐらいかな」またタオルでくるみ、ゲームをやる。

大体30分置きぐらいに、一回確認。少しずつひびが大きくなる。2時間ほどたった辺りで、もう割れそうだった。「さーて、何が出てくるかな」ゲームはもう消し、卵に見入る。ドキドキしながら、少しずつ動く卵を見つめる。

「うわっ！」いきなり強い光が僕を襲う。視界は真っ白で、何も見えない。真っ白な部屋で僕は混乱した。

「一体何が…」光がひくと、部屋に女の子が立っていた。身長が80センチぐらいの小さい女の子だ。黒のシャツと黒のスカートを着ている。髪に毛も黒で、肩につかないぐらいの長さ。顔はおっとりしてそうだけど、かわいい系だ…って冷静に分析してる場合ではない。

「き、君は？」なんとかそう搾り出す。女の子はこちらを見て言う。「あなたは誰ですか？」いやむしろお前が誰だよ…。混乱の中、机の上にあつた卵がない事に気づく。まさか…!?

女の子はもう一度口を開く。「あなたは誰ですか?」「えーっと…僕は霧崎十夜、君は?」「こちらが名乗らないときりがなさそうなので、とりあえず名乗る。

「で、君は?」「私は…なんでしたっけ?」「いや、僕に聞かれてもなあ…」なんなんだろうかこの子は…。女の子は頭に右手をあてて考える。そしてポンと手を打つ。「そうでした、私は悪魔のライア、よろしくお願いします」そう言って頭をペコリと下げる。悪魔?この子は何を言っているんだ。「悪魔だって?まあよろしく」頭を下げられたので下げ返す僕。変なところで律儀だと自分で思う。

「はい、悪魔です。だからあなたには死んでもらわないといけません」「はっ?」「いきなり何を言うかこの子は…。いきなりは今更だろと思うけどね。「迷わず死んでくださいね」女の子は背中から小さい鉛筆っぽい物を取り出す。「ああ!?これじゃない、間違えましたー」そう言いながら、背中から色々なものを取り出しては、色々なものをしまつてゆく。鉛筆やら消しゴムやらノートやら、下敷きまで!?!…どうやって収納してるんだろうなあ…。

5分ぐらいたってから、ようやくお目当ての物が見つかったらしい。それは小さい鎌だった。「やっと見つかりました…。あ、いつもはもつと整頓してあるんですよ!本当ですよ!」必死に言い訳をする女の子。そんな女の子を見て思った。なんだろうか…ちょっと可愛いな。

女の子は鎌を振り上げる。「じゃあさっそく死んでくださいね」笑

顔で言う。「えっ？ちよつと待つ…」「だめですよ」女の子は鎌を振り下ろす。「うつひゃあ！」なんとか避ける。「避けちゃだめですよー」おいおいおいおい冗談じゃねえ。「避けなきゃ死ぬって！」女の子は鎌をもう一度振り上げる。「待った待った！殺す理由は？」お、今度は止まってくれた。振り上げたまま、「なんでしたっけ？ええい、この天然娘め！」「あれー？理由…理由…」「鎌を下ろし、左手に持ち替えて頭に右手を当てて考えている女の子から、すかさず鎌を奪い取る。「あつ、何を」「何をじゃない！殺されてたまるか！」僕は鎌を振り上げる。女の子はそれを普通に見ていた。

だけど、僕はその鎌を振り下ろせなかつた。悪魔とは言うけれど、外見は小さい女の子、しかもかわいい。僕には殺すことができなかった。女の子は振り上げて止まっている僕を、不思議そうに見る。「やらないんですか？」「馬鹿言うな、人なんか…殺せない」僕は振り上げた鎌を下ろす。「悪魔なんですけどね。死ぬのもやだ、殺すのもやだ、じゃあ私にどうしろって言うんですか！？」「そりゃこちのセリフじゃー！！」

「と…というかなんで君がキレル！？」もう訳わかめとか、本当に訳が分からないことを言いたくなる。「だってー、殺さないと…えーん」なぜか泣き始める女の子。もう何が何やら…しかし喜怒哀楽の激しい子だなあ。「わーわー！分かつたから泣くな！」正直女の子の涙は苦手なんだ…。「だってー、ぐすっ」なんとか泣き止む。「で、理由があるんだろ？泣かなきゃいけないような理由がさ」僕は少しずつ落ちてきてきた。女の子の面白い性格のせいもあるし、引きこもりの僕なんて死んだほうがいいな、とか思ってきたからだ。女の子は口を開く。「理由はですね。あなたを殺さないと私魔界に帰れないし、卒業もできないんです」魔界？卒業？「何それ？」「だからですね、私は悪魔の落ちこぼれなんです。だから卒業するために学校から課題を出されたんですよ」「その課題が僕を殺すって事？」落ちこぼれか、僕も似たようなもんだしな。「卵を拾って孵化させた人を殺すので、たまたまあなたになっただけですね。卵で

たまたま、なんてあはは「ああ、なんかすごく笑顔だ。つまらないよ、とか言えない…。だから軽く笑つといた。「たまたまね、あはは」誰かこの子をなんとかしてくれ…。

「だから、鎌を返してくださいー」僕はとっさに、鎌を持った腕を上にあげる。女の子はピョンピョンと、ジャンプする。が、全く届かない。「うー…泣いちゃいますよ?」「まあまあ、ちよつと落ち着いて…じゃあこうしよう」女の子は首をかしげる。「覚悟を決める時間をくれよ」まあ実際死んでもいいやとか思ってたんだけど、やっぱり怖いものは怖い。時間あれば女の子の考えも変わるかもしれないし、僕も決心がつくかもしれない。どちらかの気持ちが変われば、ハッピーエンドだろう。「殺さないといけない期間みたいなのないの?何日まで、とかさ」女の子は右手を頭に当てて考える。今気づいたけど、この子考えるとき頭に右手あてる癖があるんだな。女の子はそうでした、と口を開く。「二ヶ月以内ならいいんですよー」「なるほどねえ…」魔界とやらの時間の流れについて考えた。なんだかなー…。

「じゃあ、二ヶ月以内に覚悟を決めてくださいね」女の子は笑顔で言う。「まあ、それでも嫌だったら逃げるけどね」「逃げちゃダメですよー」まあなんだかんだで、この場は丸く治められたかな?「まあいいや、はいこれ」僕は女の子に鎌を返す。「ありがとうございます」その鎌を背中にしまう。「それ、どうやって入ってるの?」僕は純粹な疑問をぶつける。女の子は首をかしげ、「どうやって入ってるんでしょうね?」と言う。ああ、天然娘は強いよ父さん…。なんとなく死んだ父に話しかける。全然意味はないんだけどね。

「じゃあどうなってるのか見せてよ」僕は興味津々に聞く。「だめですよ!恥ずかしいー」顔を赤くして否定する女の子。はあ…もういいや。

女の子は気を取り直し、言う。「じゃあそれまでの間、よろしくお願ひしますね」「まさか、泊まるの?」女の子はうなずく。「はい、逃げられたら困りますから」そんな屈託のない笑顔で言われてもな

あ…。「まあいいかな、よろしくライアちゃん」「はい！」

なんか分からないけど、悪魔が一人(?) 僕の家に住み着いた。少しは暇が減りそうで、いいかもしれない。別に死んだってかまいやしない人生なのだから…。

その1〜来襲〜（後書き）

なんというか、書き始めた時に比べると大分考えてた内容と違う感じになりました。この先どうなるのか、作者にも予想つきません。

その2〜日常〜

「うーん…もう朝か」朝になったからといっても、別にすることもないのでもう一度寝ようとした。「ん？布団の中に何かいる…？」足の辺りで何かかもぞもぞ動いた。僕は布団をそーつと持ち上げて中を覗く。そこには女の子が寝ていた。「……………あれ？」まさか無意識の内に女の子をさらってきたのでは？なんて思ったけど、昨日のことを思い出した。「そーいや、そーだった」これでなんの気兼ねなく寝れる…「つておい！」僕は布団を剥ぎ取る。「むー」とかうなりながら、女の子…ライアはもぞもぞと動く。「後5分ー」「後5分じゃない！」というか僕は低血压なんだ、朝から叫ばせるんじゃない…。

少しの間をおいて、ライアちゃんは起き上がる。「むー…」キョロキョロと首を動かし、辺りを見回す。そして僕の位置で止まる。「あ、おはようございます」「はいはいおはよう、で、なんで君は僕の布団で寝てるかな？」確か彼女は隣の部屋、死んだ父が使っていた部屋で寝るように言っただけだ。多少物置っぽくなってるが、部屋としては十分に使える。

「だってー…一人じゃ怖くて寝れないですよ！お化けが出たらどうするんですか!？」おいおい悪魔が何言ってるか…。「だからって、男の布団の中に来るのはまずいだろ?」「大丈夫ですよ、よくパパと一緒に寝てましたから」にこやかに彼女は言う。「とにかく！だめなものはだめ、肉親と他人と一緒にしちゃだめ!」何かあったら、僕が完全にロリコンになってしまうじゃないか…。「むー…わかりました」彼女はしぶしぶうなずく。「でもせめて、同じ部屋にしてくださいね」うるうると眼を輝かせて懇願してくる。こ、これが悪魔の力なのか!?さすがに嫌とは言えなかった。「しようがないなあ…絶対に僕の布団に入ってきてちゃだめだよ?」「はい!」彼女は精一杯肯定する。なんだかなあ…。

朝からこんなに賑やかなのは、久しぶりだった。少しだけ上機嫌で、僕は冷蔵庫の中から取り出したご飯をチンする。相変わらず母はいない。早朝の内に帰ってきて、ご飯だけ作ってまた仕事先に行ってしまった様だ。いつ寝てるんだろうなあ…、少し心配だ。そんなことを考えてる間に、ご飯はできる。

「ライアちゃんは、ご飯食べるの？」僕の後ろについて、キッチンに来ていた彼女に聞く。「もちろん食べますよー、朝はちゃんと食べないと、元気出ませんから！」十分元気なんじゃないかなあ…とか思いつつ、僕のを半分あげる。僕は元々少食なので、あんまり食べなくても平気なのだ。…ていうか動かないしな。そんな自分に少し肩を落とす。

「ライアちゃん、おいしい？」小さい体の割に、彼女はばくばくと食べる。「ほいひいですよー」「口に入れたまま喋るなって…」「しかしよく食べる。どこに入ってたんだかなあ…。結局半分どころか、4分の3ぐらい食べられてしまった。まあ、いいか。いつも通り後片付けも済ませ、部屋に戻る。

机の前の椅子に座り、「さてと、何するかな」と考える。ライアちゃんも机の上に座り、「十夜は学校行かないんですか？」と聞いてくる。呼び捨てかよ…。「僕はちよつと、ね」特に言い訳も思いつかばず、流そうとしてみる。「若いんだから、ちゃんと学校行かないとだめですよー」流れなかった…。「留年しそうな落ちこぼれに言われたくないな」僕は言い返す。

彼女は凹む、「だって…しょうがないじゃないですかあ」しかも少し涙ぐんで。「わかったわかった、僕が悪かったよ」「この子には一生勝てそうにないな…」。

彼女は顔を上げて強く言う、「でも、行ってダメなのと、最初から行かないのと同じや全然違いますよ！」「うつ…」耳に痛い言葉だ。

まあ一応、僕も行ってダメだった立場ではあるんだけど。…僕は逃げたからなあ。まっすぐな彼女を見ると、少しうらやましい。

「まあ人間色々あるのさ」なんか場を流そうとしてみる。「悪魔にだって色々ありますよー」「そうだ、悪魔とか魔界とか、色々ライアちゃんの話聞かせてくれない?」「こんな機会はまずないし、場も流せる。彼女は照れながら、「そんなに私のことを聞きたいんですね」と言う。いや、一言もそんな事言っていないんだけど…まあいいや。

「ライアちゃんは、歳いくつなの?」どう見ても僕より年下っぽいというか悪魔って年齢あるのか?ライアちゃんは、薄い胸を張って答える。「こっ見えても、18歳なんですよ」「えっ?」「あつやば、つい声がもれた。案の定、彼女は怒る。「えっ?ってなんですか、えっ?って!確かに私は小さい方:小さいですけど、気にしてるんですよ!」体の事だけじゃないんだけどなあ:なんて言ったらさらに怒りそうだから、ここは謝る。「ごめんごめん、少し意外だったから:」それでも内心驚きは隠せない。

「僕はてつきり、悪魔ってみんな小さいんだと思ってたよ」「人間と同じで、個人個人ですよ。ちょっと個性が強すぎますけど」ああ、納得。「ふーん:人間となんら変わらないねえ」「そうですねー、学校とかもありますし、大人になれば社会人ですし。ちなみに私は悪魔高等学校3年生ですよ」「高等学校とか、全く一緒だねえ」なんか悪魔が身近に感じられた瞬間だった。「そっいや課題って、ライアちゃんみたいに人間無差別なのばっかなの?」彼女は首を振る。「成績が悪ければ悪いほど、難易度が上がるんですよ。一番簡単でしたら程度、一番むずかしくて事故に見せかけた大量虐殺とかですな」さらりとなんて事を言うんだこの子は:やっぱり悪魔とは相容れないってことか。

「っていうか課題について詳しいね、普通そういうのって知らないもんなんじゃない?」ライアちゃんはぎくりっ、なんて言葉が顔に見えるぐらいに焦って言う。「そ、そんなことないですよ。:課題を受ける生魔:生徒の事ですけど、生魔は課題を全部教えてもらうんです。それで自分がどの程度成績が足りないか計算して、その課

題をこなすんですよ」なんか焦ってたけど、まあいいや。「うわー結構厳しいね、ちなみにライアちゃんはどの辺の難しさ?」「私のは中の下くらいですね、人間一人なんて簡単に殺れますし。だから早く決心してくださいね」笑顔がかわいいライアちゃんだが、今回は怖かった。

「まあ、善処するよ…そういうえば、悪魔の羽とはないの?」ライアちゃんは見た感じ、小さい以外は普通の人間だ。「人間の前じゃ普段は出さないですけど、羽は出せますよ。見ます?」「うん」僕はうなずく。「よいしょっ」そんな掛け声と共に、背中から羽が出てくる。ていうかこの羽も、背中にしまつてあるのか…亜空間にでもなつてんのかな?「ふー、やっぱり羽を伸ばすのは気持ちいいですね」「ああ、やっぱりしまつてるのはきついんだ」「少し窮屈なだけですけどね」「羽は漫画に出てくるような悪魔の羽じゃなく、どちらかといえば天使の羽に近い、色が黒いことを除けばだけど。「触ってもいい?」僕は手を伸ばす。「いやですよ」避けられた。「うーむ…まあライアちゃんに合つて、かわいい羽だね」羽は小さめなので、かわいさを演出してるようにしか見えない。「ありがとうです」彼女は赤くなって礼を言う。こういうところは純粹にかわいいんだけどね…。

話しているうちに、気づけば時間はもう1時をまわっていた。「ご飯にしようか」僕は部屋を出て、キッチンに行く。彼女も僕の後ろをちょこちょこことついてくる。

「さて…そっぴや何もなかった様な」僕は冷蔵庫を漁る。レンジでチンして手軽に食べれるものはない。「うわあ…米はあるんだけどなあ、おかずが…」もう一度探すが、やっぱりないものはない。「ないなら作れば良いじゃないですか」ライアちゃんはそんな事を言うが、正直作るのはだるいし、何より僕は料理が下手だ。包丁を持つて指を切らなかつたことがないぐらいだ。「作るって言ってもなあ…」「ちよつと冷蔵庫の中見せてください」僕はどいて、そこに

ライアちゃんが来る。「むー…卵があるなら、目玉焼きぐらいなら作れますよ」おお、それは意外…偉大だ。「じゃあお願いして良いかな？」彼女は胸を張って、「任せてください」と言った。

数分後、卵はスクランブルエッグになっていた。「えーと…うん、味はおいしい」確かに味はおいしい、でもなんで目玉焼きにならなかったのか僕は考えたくなかった。トイレで大きいほうの用を足していたので、調理現場は見えていない。「おいしいならいいじゃないですか！あはは」結構必死な彼女。「決して、焼いてる最中に黄身がつぶれちゃったからしかたなく、とかじゃないんですからね」かなり早口でまくしたてる。なるほど、つぶれちゃったのか…。「まあでも、おいしいよ」米と一緒に口に運ぶ。彼女は嬉しそうにそれを見ていた。「ライアちゃんは食べないの？」「もちろん食べますよ」僕はライアちゃんの米をよそう。僕の分は最初からよそわれていたの、一人で食べてたわけなんだけど…。

誰かと一緒に、ご飯を食べるなんて久しぶりだった。朝はそんなこと考えなかったけど、今思えば決して悪いものではない。

食べ終えて、後片付けをする。作るのは任せていたので、後片付けはもちろん僕がやる。ライアちゃんはそれを後ろから見ていた。

後片付けを終え、僕は部屋に戻る。「さーて、午後は何しようか」実際したいことなんてない。「ゲームでも勝負します？」「ライアちゃんはカセットやCDを漁る。「やったことあるの？」「魔界にもありますからね」ほんつと、世界観の変わらない世界なんだなあ…。

まあそんなわけで、僕はレースゲーで勝負した。ライアちゃんは結構うまく、勝負はなかなか白熱した。「よし、ここで裏道を」
「ああ！それはズルいですよ」

かなり前に、父と一緒にやったゲームを思い出した。あの時のゲームは画像もしょぼくて、内容も単純なものだったけれど、純粹に楽しかった。なんでか分からずにいたけど、なんとなく、今分かった気がした。

「なかなかやるねえ」「十夜こそー」何回もやり、結局勝負は引き分けのまま終わった。その後も、格ゲーやらパズルゲーやら色々やった。気づけば、時間はすごいスピードで流れていた。

「うわ、もう10時じゃん」基本的に、僕の部屋は濃い色のカーテンをつけているので、外が見えないから時間を確認するには時計しかない。だから、熱中していると時間の流れがいまいち分からないのだ。

「ご飯にする？」僕は別にお腹は減ってないけど、ライアちゃんに確認する。彼女はうーんと背伸びをし、「私はいいですよ、お風呂に入ってきますねー。タオルはドアの前においてくださいね」と言っただけで部屋を出て行く。いやいや、自分でタオル持ってきていいじゃん…。しぶしぶながら、タオルを洗面所に持っていく。彼女はもう風呂場に入っていた。ていうかこの状況はまずいよなあ…。「タオル、ここに置いてくから」「はいー」そそくさと洗面所から出る。一応これでも健全な男子なので、まあいろいろと…。いろいろとね。

そう言えば、なんでライアちゃんは風呂場の場所知ってたんだろ、なんて考えながら、部屋で待っていると、ライアちゃんが部屋に来た。「さっぱりしましたー」だけど服は変わってない、いいのかなあ…。「十夜は入らないの？」「あー、僕は二、三日に一回しか入らないから。今日はいいや」風呂あがりのライアちゃんを直視することができず、僕の視線は自然と上を向く。「もー、毎日入らないとだめですよ」「別に、動いてるわけでもないし。さて、散歩行くけど来る？」「誘うために、一応待ってたわけで。時間は10時40分、いつもよりは結構早い。「行きますよー、というか十夜は夜行性なの？」「夜行性っていうか、単なる趣味かな」「夜の散歩が趣味ってのもどうかと…」「反論はできない。「まあ、行こう」僕らは家を出る。

ライアちゃんは僕の横に並ぶが、歩幅が小さいから大変そうだな。だから、僕はペースを落とした。散歩なのだから、ゆっくりでもかまわない。「うわあ、虫うるさいねー」「田舎だからね、夏場はこん

なもんだよ。魔界にも虫はいるの?」「たくさんいますよー、虫は苦手ですよ」「女の子で虫好きな人は、あんまりいないでしょ」「そうですねー」

何気ない会話をしながら、二人で歩く。やっぱり、一人よりも二人のほうが楽しい。「星きれいだねー」「僕は見慣れてるけど、それでもきれいだと思うよ」「虫の音や星が良いと思うから、夜の散歩はやめられない。「良いところだね」住んじゃおうかな」切なそうに、だけど本気っぽく彼女は言う。「移住かあ、それもいいんじゃない?」

「…」ライアちゃんは黙ってしまふ。

「どうしたの?急に黙り込んで」

「んーん、なんでもないよ」ライアちゃんは首を横に振る。その横顔は、やけに寂しそうだった。

「やっぱり、魔界に帰りたい?」

「それはね。でも、死ぬ気のない人を殺してまで、帰りたいとは思わないよ」いつもとは、違った彼女がそこにいた。多分、こちらが彼女の本心なのだろう、なんとなくそんな気がした。「そっか…僕次第か」彼女に悪い気はしたけど、まだ死ぬ覚悟はなかった。むしろ、ライアちゃんという時間が楽しく、それが永遠ならいいと思っただ。「…お互い、がんばらないとね」「うん…」何をがんばればいいのか分からないけど、とりあえず僕はうなずいた。隣りにいる彼女は、やっぱり18歳の女性なんだと、思った。

いつもより長めの散歩を終え、僕らは家に着いた。相変わらず母は家にいない。

「疲れましたー、早く寝ないとお肌に悪いですよ」そこにはいつものライアちゃんがいた。「僕も今日はなんか疲れた、早く寝るかな」部屋に戻る。

「それじゃおやすみー」布団にもぐる。「おやすみですよー」彼女は電気を消し、布団にもぐる。いつもより短く、だけど充実したー

日が終わった。

その3 親子

「朝ですよー」「うーん…後3時間ぐらい」昨日は疲れたから、昼ぐらいまで寝ていたい…。「そんなに寝てたら…私のお腹が減って死んじゃうじゃないですか！」頭を小突かれる。結構、いやかなり痛い。「痛いって！」僕は飛び起きる。「あつ、おはようございませう」「あつ、じゃないよ！もう少し寝ててもいいじゃないか」「だめですよー、寝てばかりだと腐りますよ？」「昨日後5分とか呟いてた女が何を言うか…。時計を見ると、まだ7時過ぎだ。「どう考えても早いって！」普段9時過ぎまで寝てる僕には、7時は早すぎる。「ご飯たべましょーよー」「一人で食べれば良いじゃないか、僕は寝る」布団に戻るうとするが、「寝たら斬りますよー？」なんか背中から鎌出してるし…。しかも結構真顔で言ってるので、なかなか怖い。「分かった分かった…全く」「一人でご飯なんて、寂しいですからねー」まあ確かに、それはある。

いつも通りキッチンに行つて、冷蔵庫を漁る。ライアちゃんも僕の後ろについてくる。「またか…何もない」手軽に食べれそうなのはない、要するに母は昨日も帰ってきてなかったってことだ。「ライアちゃん、また卵頼める？」「いいですよー、さすがに米だけ食べるわけにはいきませんし」今日は調理を見ていたけど、なんていうか手馴れている。それでも出来たのは、スクランブルエッグだった。「失敗は成功の母つて言いますから！」「失敗つて認めてるんだ…」「…なんのことでしょうか？」「誤魔化し、目線を合わせない彼女。なんだかなあ…」。

まあおいしくいただき、後片付けもちやちゃつと済ませて部屋に戻る。

「じゃあ、寝るかな」食べたせいで、眠気は増していた。「学校行かないんですかー？」ライアちゃんは聞いてくる。「あー、行かないよ」今から準備をしても余裕で間に合うけど、元々行く気なんて

全くない。「もー、行かなきゃだめですよー」腰に手を当てて、ぶんぶんとかやっている。「ていうかさ、いきなりどうしたの？母親みたいなこと言って」「うちの母は、そんなことは言わないけどね。「昨日ががんばるって言ってたじゃないですかー」「がんばるって言ったって、学校とは一言も言ってないって」「そーいうのを屁理屈っていうんですよ！」「うーん…なんで彼女は怒ってるだろうか？元々謎な人…悪魔ではあるけど。」

「今気づいたんだけどさ、今8月だよ、夏休みだよ、学校ないよー長い間ひきこもっていると、曜日感覚が全くなくなる。8月何日なのかは知らないけど、8月なのは思い出した。「休みなんですか…それじゃしょうがないですねえ」なぜか肩を落とす彼女、そんなに僕を学校に行かせたいのだろうか？

「まあとにかく、寝ていい？」僕は聞く。「むー…起きたら遊んでくださいね？」「いいよ、じゃあ寝るから」僕は布団にもぐる、とその時部屋のドアを誰かがノックした。「十夜？帰ったわよ、話し声がしたけど誰かいるの？」僕の部屋は鍵がついていないので、開けようと思えば普通に開けられる。しかし今まで母は、内側から開けない限りはいつてくることはなかった。が、ライアちゃんが部屋のドアを開けてしまった。もちろん母とライアちゃんは顔を合わせる。母は、ライアちゃんと布団から顔を出している僕を交互に見る。「…十夜、ちょっと来なさい」最悪の朝になりそうだった…。

というかもう、十分最悪な朝だ。僕はライアちゃんと、母についてリビングに行った。そこには小さめのテーブルと、小さめのソファーが二つある。キッチンとつながっていて、本来はリビングでご飯を食べるのだけど、僕はめんどくさいのでキッチンにあるテーブルで食べている。

母がソファーに腰掛ける、僕とライアちゃんはその反対側に座った。「で？その子は誰？」母は単刀直入に聞いてくる。「えーっとね…」本当の事を言ったところで信じてもらえないだろう。だから僕は、

何か良い言い訳を考えた。「はじめまして、悪魔のライアと言います。よろしくお願いします」そんな考えも、彼女に全て無駄にされた。「悪魔…？あなたは何を言っているの？」母は結構な堅物なので、冗談なんかあんまり通じない人だ。「えーとですね、悪魔って言うのは…」「母さんに言うことなんてない、僕にかまわないでくれ」ライアちゃんを遮って、僕は言う。半分はこの場を流すため、もう半分は…本音だ。「かまうなって…私は…」「うるさい！今更母親面するなよ」気づかない内に、完全な本音が口から出ていた。僕はハツとした。母はうつむいていた。「…僕にかまうなよ」いたたまれなくなつて、僕はその場から逃げ出した。ライアちゃんも後ろからついてきていた。

部屋について、溜め息を吐く。確かにあれも本音だけど…本当はもっと…。「おばさま、泣いてたよ」ライアちゃんは言う。「どうしてあんな事言うの？」「関係ないだろ！ライアちゃんには」「そう…」彼女もまた、悲しそうな顔をしてうつむく。いつから僕は、こうなったんだろうか…。引きこもるようになってから？父が死んでから？自分に聞いても、自分は答えてくれなかった。

少し落ちていてから、僕は口を開く。「ごめん、ライアちゃんに…あたっっちゃって」彼女は顔をあげる。「んーん、別に気にしないよ。カツとなっっちゃうのは仕方ないもんね」落ち着いた彼女の声に、なんとなくだけ癒された気がした。「素直に謝れるなら、まだまだ大丈夫だよ。でも、おばさまには言えないでしょ？」ライアちゃんには心を見透かされているようだった。やっぱり年上なんだな、って実感が湧く。「うん…なんでかな？」僕は元々素直じゃない、でも母の前ではさらに素直じゃなくなる。

ライアちゃんは静かに、諭すように言う。「十夜は、おばさまを信頼しているのね。だから、素直になれないの」「信頼してるから…？」自分では信じられなかった。「うん、十夜ぐらいの子なら、親にはみんなそんな感じだと思っよ」「そうなんだ…」僕は布団の上

に腰をおろす。信頼しているから、その言葉に救われた。自分では、きつと憎んでいるからと思っただけだ。ライアちゃんも、僕の隣りに並んで腰をおろす。「だから、落ち着いたら謝りに行きましょう?おばさま、悲しんでるよ」「うん」ライアちゃんの存在が、すごく助けになった。もし彼女がいなかったら、僕は母から逃げたままだったろう。

20分ぐらいたってから、僕はリビングに行く。ライアちゃんはリビングに入る手前までついてきてくれた。リビングには、さつきと同じでうつむいてる母がいた。僕はなんとか口を開く、「母さん：さつきはその：ごめん」それを言うので精一杯だったけど、母は涙を流しながら微笑み、僕を抱きしめてくれた。「私も、仕事ばかりでごめんね」恥ずかしい気もしたけど、それ以上に心地よかった。

少ししてから、母はソファーに戻り、僕もその反対側に座る。そしてリビングの入り口にいたライアちゃんは、歩いてきて僕の横に座った。「あらためてはじめまして」、ライアと言います「横にいたライアちゃんは、いつもの彼女に戻っていた。「初めまして、霧崎きりさき稲子いなこといます。えーっと：」「母さん、信じてもらえないかもしれないけど、彼女悪魔なんだ」僕は事の顛末を話した。僕を殺すため、ということだけは説明しなかったけど。「正直、信じられないわね：でも、見ていると分かるわ、不思議な子だって事はね」「よく人とは違っていているって言われますけどね」、あはは「不思議っていうか天然だよな、天然ボケ悪魔。「十夜をよろしくね、私も仕事で忙しくて：だからこんな親子になってしまったのだけどね」母は溜め息を吐く。「仕方ないよ、働かないと暮らせないから。僕はもう平気だよ」母は涙を流す。「ありがとね、十夜」「泣くなって、なんか恥ずかしいだろ」僕は照れる。「後直すのは、ひきこもりだけですね」「いや、もっともなんだけどさ、もう少し空気を読んで：まあいいか。

結局、ライアちゃんが家にいるのは良しとなった。同じ部屋についてるのは、さすがに母が口を出したけど、ライアちゃんが泣いてわめ

いてもとの鞆に収まった。「ほんと、不思議な子ね」母は苦笑いして、そう呟いた。

日は沈み、12時頃。母はもう自分の部屋で寝ている。仕事が忙しいので、仕方のないことだ。「一緒に寝なくて良かったの？」ライアちゃんは笑いながら言う。「からかうなって」僕も笑いながら返す。僕らはいつも通り、夜の道を散歩している。

「十夜はいいね、心配してくれる親がいて…」しみりと、ライアちゃんは言う。「ライアちゃんには、いないの？」「んーん、親はいるよ。でも、心配はしてくれてないよ」横を歩く彼女の横顔は、ひどく悲しそうに見える。「そっか…そりゃ辛いね」実際僕だってそう思ってた。心配なんかしてくれてないと思ってた。思い込もうとしてただけなのかもしれないけど…。

「でもさ、子どもの心配をしない親なんていないんじゃない？」今回のことで、それを学んだ気がした。「人それぞれだよ、本当に心配してない親だって、いるよ」「そっかなー…僕はライアちゃんに何かあったら、心配するけど」言ってる、少し恥ずかしい。「そっかー、ありがとうね」ライアちゃんも少し赤くなっていた。それを誤魔化すように、彼女は言う、「ところで、死ぬ覚悟は出来た？」「全然、かな。悪いね」「いつでも殺してあげるからねー、あはは」明るく言う彼女、いつも感じていた恐怖が、今日は全くなかった。「望むところさ」だから僕も明るく言った。

散歩から帰宅して、僕は布団にもぐる。「そういえば…結局今日寝てないじゃん」どつりで眠いはずだ。「だねー、私も眠いや」ライアちゃんも布団にもぐる。「それじゃ、おやすみ」「おやすみなさい」

…眠いはずなのに、僕はなかなか寝付けなかった。そんな時、ライアちゃんの寝言が聞こえてきた。興味本位で、耳を傾けてみる。「ごめん…なさい、ごめん…なさい」悲痛な声だ。ライアちゃん顔を

見ると、涙の流していた。「……」僕は起き上がり、起こさないようにライアちゃんを抱き上げる。そして僕の布団に移し、僕は彼女の手を握って寝た。ライアちゃんは最初震えていたけど、すぐに震えは止んだ。今日ぐらいはいいよな……。

そしてすぐに、僕も夢の中へと誘われていった。

そのころ親子（後書き）

親の心、子知らず。とはよく言ったものですが、その逆もまた然り。

その4〜昼の憂鬱〜

「んー…今何時だ？」起き上がり、時計を見る。針は11時を指し示していた。「久しぶりに長く寝たような…ってあれ？」部屋にはライアちゃんの姿が見えない。いつもなら早く起こしてくれるのになあ…。立ち上がり、一回体を伸ばしてから、僕は部屋を出る。

まずはキッチン、次にリビング、風呂場、トイレ、父の部屋、母の部屋と見て回るが、ライアちゃんがいる様子はない。「あれ？どこ行っただらう…」まさか…魔界に帰ってしまったのでは？なんて考えたが、彼女はまだ課題を終えてないので、帰ることはないと感じた。「散歩でも行ってるのかな」玄関に行くと、ライアちゃんの靴：彼女が来てから次の日に出した、僕の小さいときの靴だ。彼女にはそれでも少し大きめだったが、彼女は気に入っていた。その靴がなかった。「散歩か…」少し前までは、朝起きたときに一人でも平気だった。けど、ライアちゃんが来てからは、朝はいつも二人だった。だから、少し寂しかった。

「ご飯食べるか」玄関から移動し、キッチンへ行く。いつも通り、おかずをチンしてご飯を食べる。なんていうか、味気ない、やっぱり一人で食べてもおいしいとは感じられない。

食べ終えて、後片付けも済ませ、部屋に戻る。

「ふー…暇だ」ライアちゃんが帰ってくるまで、一人でゲームでもやるか。てきとーにカセットを選び、やる。…少しやると、すぐに飽きた。元々、一人でこの部屋で遊ぶこと自体に飽きていたので、何をやっても長続きはしない。

「遅いなあ…」時計を見る。まだ12時30分だ、思ったより時間は進んでいなかった。「仕方ない、ライアちゃんを探しに行くか…」パジャマから外着に着替え、部屋を出る。実際、昼間に外に出るのは久しぶりだった。「あっちー…」玄関から一歩出ただけで、真夏の太陽は僕を照りつける。母はもう仕事に行ってしまったので、し

っかかりと戸締りはする。「あつ、ライアちゃんが先に帰ってきちゃつたらまずいなあ……」うーん、どうするか……。まあ仕方ないか。戸締りだけはしつかりとした。

「しっかし暑いなあ……」太陽がやけにまぶしく感じられる。僕は夜に散歩している道を、歩くことにした。それ以外に、彼女がいそうな場所に見当がつかなかったからである。

「あつちー……」何回目かの言葉を漏らす。家の中でも、夜でも、暑いことには変わりはないけど、さすがにここまで暑いのは堪える。散歩ルートは、大体40分前後かかる。簡単に言えば、家を大回りで一周しているだけなんだけど、僕の家は田舎なので、結構（いやかなりか？）道が広いのだ。その間、熱せられた道路をただただ歩く。

「全然違つて見えるなあ……」毎晩通っている道が、全く別の道に感じられる。路傍には丈の低い草むらがあり、そこから先はたんぼが広がっている。空にはいつもの星たちはいない、鳴く虫の声も違っている。昼にこの道を歩いたのは、いつが最後だったかな？生きてきた15年に比べると、二、三ヶ月なんて短いものだけど、僕にはそれがかなり長く感じられた。二、三ヶ月の間に、僕と言う人間はこんなにも変わってしまったのだから……。

「なんて、何考えてんだろ、らしくないなあ」暑い中、ただ歩くのは暇なので、あまりにも色々な事を考えすぎた。考える事はほとんど、自分を卑下するものばかりだ。ダメ人間な自分に、嫌気がさした。そんな事を考える自分に、嫌気がささない、変えようとしなきゃ、何も変わらない。そんな事は分かっていたけど、僕は自分を蔑む事をやめれなかった。「死ねば……いいのにな」ついそんな事をつぶやいてしまう。太陽は辺りを明るく照らしているけど、僕の心の中は真っ暗だった。

「ライアちゃんに、早く会いたいな……」一人していると、嫌な事ばかり考えてしまう。

歩いてから20分程だろうか、前から仲のよさそうな家族、父・母・

小さい男の子が歩いてきて、僕とすれ違った。みんな手をつないでいて、楽しそうに笑っている。

なんとなく、胸が痛くなつた。僕も小さいときは、あんな風に笑えていたのだろうか？父さんと母さんの間に挟まれ、あんなに笑顔で…。いつかあの男の子も、僕みたいになるのかな？最低のダメ人間に…。

「なんだか…なあ」考えることは全て、ダメな事ばかり。不思議なことに、歩いててすれ違ったのはその家族だけだった。考えながらだったので、見落としてはあつたかもしれないけど、夏休みの昼にしては、人が少ない気がした。

家を出てから30分程たつた、後少し歩いたら、家に着いてしまう。「ライアちゃん、いないなあ…」ただ単に、自分の気持ちを悪くするために、散歩をしたと思うのはさすがにしゃくである。

「あれ？」いつもの散歩ルート終盤で、僕は草原を発見する。その草原は、道路から少し外れたところにあつた。「こんなところに、草原なんてあつたんだ」夜は暗いので、多分気づかなかつたのだろう。むしろ、15年間ここに住んでて気づかなかつた僕って…。まあいいや。

なんとなく、僕は走つてみた。ひざ丈ぐらいまで草がある、草原を。なかなか走りにくい。

草原の真ん中ぐらいに、誰かが倒れているのに気づく。あれはまさか？僕はそれに走りよつた。「ああ、やっぱり」仰向けになつて倒れていたのは、ライアちゃんだった。「おーい、大丈夫か？」顔を覗き込む。これは倒れてるといふよりも…、「ライアちゃん…なんで寝てんだ」すーすーと寝息をたてて、寝ている。「日射病になるって…ライアちゃん朝だよー！」僕は彼女の耳元で叫ぶ。「ひゃあっ！」ビクツとしてライアちゃんは起き上がる。「おはよう」彼女は少しだけ、寝ぼけ眼でぼーっとしてから、「おはようございます」と返してくれた。「って、いきなり何をするんですか！びっくりしたじゃないですかー！」あ、やっぱり怒るか。「ていうかさ、日射

病になるって」「このクソ暑い中、太陽を遮る物が何も無い草原で寝ていたら、間違いなく干からびて死ぬと思う。「たまーには、日光浴も大事ですよー」「限度があるって…」「まあ確かに、気持ちよさそうだ。

僕も草原に仰向けに倒れて、横になる。草がクッション代わりになり、なかなか寝心地は良い。「なるほど、気持ちいいや」まあちょっと、暑すぎるけどね。ライアちゃんも、僕の隣に横になる。「ついうとうとーってしちゃいますよね」「もしかして、散歩に出てからずっと寝てたの?」「はい、多分2時間ぐらいは…」「2時間もここにいたら、僕は確実に干物になるだろうな。「暑くないの?」「暑いのが好きですからー」「そっか、僕は暑いのだめだ」11月の中頃生まれなので、寒いほうが好きなんだ。誕生日は関係ないだろうけどね…。

太陽は、僕らを照らしている。暑いけど、隣にライアちゃんがいるので、嫌な気持ちにはならなかった。

「それにしても…」「ん?」「十夜がお昼に外に出るなんて、珍しいですね」「ああ、僕自身久しぶりだし。ライアちゃんが来てからも、昼間は一回も外に出てないからね」夜に比べれば、ダークな思考に偏りすぎだけど、彼女がいるなら、まあそれも良いか。

「そういえば十夜、なんで私は君の布団の中にいたのかなー?」「僕も彼女も空を見上げているので、ライアちゃんの表情は見えないが、多少からかう様な口調だ。「しかも十夜が、私の手を握ってただけどー?」「…たまには、いいだろ」なんとなく、本当のことは言えなかった。彼女が何に謝り、何に涙し、何に震えていたのかは気になるけど、聞くのをためらうから、僕は誤魔化した。「一人じゃ少し寂しかったただだよ」ライアちゃんは声をあげて笑う。「あっはっはー、十夜もかわいいところあるじゃない」僕は赤くなる。「うつさい」そう呟くことしか出来なかった。

ライアちゃんは顔をこちらに向ける。だから僕も、自然とライアちゃんの方に顔を向けた。「ありがとう、十夜…」「ん、何が?」彼

女は何も言わないで僕を見ている。僕も彼女を見ていた。ライアちゃんの顔は、すごく笑顔だった。太陽に照らされて笑っている彼女には、夜は似合わないと思った。

「十夜はさ、自分自身の事好き？」ライアちゃんは唐突に口を開く、こちらを見たままで。「んー：はつきり言っただ嫌いかな、弱いし、引きこもりだし、取り柄もないし、逃げてばかりだし：」自分で言っで、少し憂鬱になる。「ライアちゃんは、自分自身の事好き？」
「そうだねー：私も自分が嫌いだよ」その返事は意外だった。「でも、自分が好きな人なんていないと思うよ。自己中心的と、自分が好きってのは全然違うしね」「難しい事言うね：」正直僕にはよく分からなかった。自分が好きだから、自己中心的になるんじゃないかなあ、と思う。「それにしても、ライアちゃんは自分自身の事が好きなんだと思ってたよ」彼女はいつだって自信にあふれている。自分を好きじゃなければ、自分に自信を持てるわけがない。「そう見える？」ライアちゃんの顔は、なんだか寂しそうだ。僕は何も言えなかった。

「私だって、結構ひどい人間：悪魔だよ？自分の事は、自分が一番分かっている」「そんなこと：」ないなんて、僕には言えなかった。僕は彼女の全てを知っているわけではないから：彼女の全てを知らない僕が、それを否定しても説得力は全くない。でも：「でも、たとえひどい悪魔でも、僕はライアちゃんに何回も助けられてる。だから、感謝してる」「ん：ありがとう」ライアちゃんは今にも泣きそうな顔をしている。「だから、ライアちゃんも何かあったら、僕に頼ってほしいな」自分を好きになれない自分が、誰かを好きになり、守ることが出来るかなんて分からないけど、僕はライアちゃんを守りたかった。「私は十分、十夜に頼ってるよ」「そう？」「うん：」「そっか、なら良かった」「うん：」それから僕らは、何も話さなかった。話さなかったんじゃないかって、話さなかったんだ。沈黙がなんとなく、心地よかった。
太陽がゆっくりと傾いていく、夕方ぐらいになった頃、ライアちゃん

んは立ち上がった。「お腹空いちやった、帰ろう十夜」「うん」僕も立ち上がる。「やつぱり、ご飯食べないと力でないよー」「帰ったら、いっぱい食べよう」僕は、ライアちゃんの手を握った。彼女も手を握り返してくれた。僕らは手をつないだまま、家に帰った。

「疲れたよー」まあ、いつも通りなライアちゃん。さっきみたいに大人っぽくなる時もあるけど、いつもの彼女のほうが僕は好きだった。

ご飯を食べ、部屋に戻る。ライアちゃんは僕の布団に飛び込み、「疲れたよー、このまま寝ちゃいたいー」と言う。「ていうかさ…ライアちゃん昼寝してたんじゃない？しかもそこは僕の布団…」「疲れたときは寝るんですよ！疲れてなくても、眠かったら寝るんですよー！」「うわっ、すごいダメ人間っぽい！」「寝るんならそっちで…」「たまには、いいんでしょー？」「うっ…だからそれはたまに、の話で…」「私と寝るのがそんなに嫌なんですかー！？」「ちよっと…痛い！」「枕が飛んでくる。」「しかも、そんな勘違いを招きそうなこ」と叫ぶんじゃない！」「枕を投げ返す、顔に命中。」「やりましたねー！」「うらー！」「部屋でドタバタドタバタと、枕投げが始まる。

疲れ果てて終わる頃には、部屋がひどい有様になっていた。「片付けようか…」「そ、そうですね…」「ああ、僕らは何をやってるんだかなあ…」。

まあ仕方なく、というか実際は嬉しいんだけどさ…ライアちゃんが一緒に布団の中にいるわけで…。昨日はそんな雰囲気でもなかったから、変な気は起きなかつたけど、今日はさすがにまずい気がした。「んじゃ、おやすみ」「おやすみですよー」電気を消す。

…やばい、寝付けない。ライアちゃんに手を握られているので、動けない状況だ。彼女はすーすーと寝息をたてているが、こっちはそれどころじゃない。

なんとか色々我慢し、僕の意識がとんだのは大分時間がたってから

だった。
今日も一日が終わる。

その4〜昼の憂鬱〜（後書き）

一人でいると、つい嫌なことを考えしまいませんか？なんて、ここまで自分を卑下するのは、十夜と僕くらいのものだと思いますけどね。

その5〜理由

あれ？ここはどこだ？気がつくど、学校の教室のような場所にいた。休み時間なのか、少年・少女たちはグループを作って話している。その中で目についたのが、窓際の椅子に座っている少年だった。身長は150前後でやせている。髪は黒くて、眉毛に届かないぐらいの長さだ。それなりに整った顔をしているけど、かっこいいというよりもかわいいと言った感じだ。それはきつと、その少年がまだ子どもだからだろう。どことなく、近寄りがたい雰囲気をもし出している。

その少年は、誰とも話さずにただ一人窓の外を眺めている。グループから一人の少年が抜けてきて、窓の外を見ている少年に話しかける。「霧崎、今度の休みにクラスの奴らで遊びに行くんだけど、来るか？」「ん…場所によるけど」「場所はまだ決まってるけど、細かい事が決まったら連絡するよ」その少年はグループに戻っていた。

場面は急に変わり、窓の外を眺めていた少年が廊下を歩いていった。廊下の突き当たりを右に曲がった辺りから、声が聞こえてくる。「えっ？霧崎誘ったの？」別の声も聞こえてくる。こちらの声は、さつき少年を誘った少年の声だ。「ああ、あいつ全然話しかけ混じってこないから、誘ってみたんだけど」「あいつ暗そうじゃね？場が盛り下がりがそうじゃん」「まあ確かに、でも…」そこから先は聞き取ることが出来なかった。その話を聞いていた少年は、反対側に走って行ってしまった。

暗いと思うなら誘うな、別に友達なんかいらん！一人のほうが気が楽だ！走っていった少年の思いが、漠然とそこに残されていた。

「…うや」誰かが何かを言っている。「…十夜」ああ、僕を呼んでいるのか。「十夜！」目を開けると、顔を覗き込んでいるライアチ

やんが、僕に呼びかけていた。「ん…どうしたの?」「どうしたの?じゃないですよー、なんか苦しそうにうなされてたんですよ…大丈夫ですか?」僕は体を起こす。夢だったのか…嫌な夢を見たな。「ちよつと嫌な夢を見てね」実際はちよつとどころじゃないけど。そう言えば、髪伸びたな…うざったいから切らないとなあ。眉毛の下より垂れている髪の毛の先端を、少しつまむ。「夢ですか…なにせよ、心配しましたよー」彼女はほっ、と一息をつく。「ごめんごめん、心配かけちゃって」「で、なんの夢見てたんですか?」「ん…覚えてないや」さっきの光景が、思い出される。嫌な気持ちがばれないように、軽く笑いながら言う。「しょせん、夢だしね」あれは夢じゃなく、実際にあつた事だった。その二日後から僕は学校へ行かなくなった。「えー、気になるなあ」「気にしない気にしない…さて、朝ご飯食べる?」時計を見ると、9時だ。「うん、食べましょー」彼女の目は心なしに輝く。お腹空いてたのか…。

いつも通り、チンして食べて後片付け。相変わらず母はいない。部屋に戻り、布団に横になる。「寝るんですか?」「いや、少し横になるだけ」「太りますよー」なんて言いながら、ライアちゃんも僕の隣に横になる。「少し太ったほうがいいな」僕はやせ型なので、たまにそう思う。「確かに、十夜はやせすぎですよー」「ライアちゃんだつて、やせてるじゃん」やせてるといふか、ただ単に小さい上にもないし横にもない、といった感じだ。「私は小さいだけです…」「まあその内大きくなるんじゃない?いろいろ…」胸とかもとか考えたら、「死にますか?」と言われた、どうやら読まれた様だ…。

「それにしても、暑いー」「そうですか?」「そーいや、暑いのが好きなんだつね」暑いのは、すぐ隣にライアちゃんがいるせいってのもあるんだけどなあ…ていうかなんでくつついてるんだろつか?「その分、寒いのはちよつと苦手ですけどね」「ふーん…やつぱり魔界にも四季はあるの?」「魔界には、月毎に季節がありますよ」「

多いなあ。なんていうか、やっとこつちの世界と違うところ発見って感じた」魔界もこつちの世界も、今までの話ではあんまり変わりがなかったから、少し驚きだ。「月毎って言っても、こつちの世界で言う二十四節季みたいなものですよ」「ああ、立春とかそういうのね」そう考えると、あんまり違いはなさそうだ。「細かいほうがいいのかなあ……」「そんな事はないですよ、それぞれですよ」「まあ、確かにそうだな。「暑いなら、プールいきましょーよー」「却下だー、あんな人が多いとこ行きたくねー」ライアちゃんはぶーぶー文句を言う。「ぶーぶー」ってそのままかよ！」「それに、ライアちゃん水着とかないでしょ？」「背中に入ってますけど？」「もう何も言うまい……。」「プールプール」ライアちゃんは駄々をこねる。なんていうか、まるつきり小学生みたいだ。「却下だー、何よりお金がない」近くにあるプールは、大人（高校生から）1000円、子ども（3歳から中学生まで）500円、と地味に高い。しかも泳いだら、飲み物や食べ物も買うだろうから、大変なことになる。だって、彼女はかなり食べるだろうから……。それでもライアちゃんは駄々をこねる。「プール」もはや泣き出しそうだった。「分かった分かった……ちょっと待ってて」起き上がり、部屋を出る。「むー？」待っててと言ったのに、ライアちゃんはついてきた。家を出て、外にある物置を漁る。「あー、と確かここらに……」彼女は後ろから顔を覗かせている。「何探してるんですか？」「大きいプールは無理だけど、子ども用の小さいプールがあつたはず……お」発見した。ビニールのミニプール、確か小学生ぐらいの時に買ってもらったやつだ。今だに残ってるなんてなあ……。「これじゃだめ？」「しょうがないですねえ……」なーんで偉そうなんだろうかこの子は……。「ふくらませるから、その間に水着に着替えてくれば？」「はい」彼女は一旦家の中へと戻っていった。「あちー……」太陽にさんさんと照らされながら、プールに空気を入れる。空気を入れる道具がないので、口でいれなければならぬ。酸欠になりそうながらも、ふくらませ、水を入れる。玄関の前の水

道から、ホースで水を取ってきているのだ。「じゃーん」とライアちゃんが戻ってきた。「似合いますか？」なんていうかクマだった。クマの絵が描いてあるスク水だった。「うん、似合うよ」すっごく子どもっぽく見えるため、やたらクマがマッチしていた。

「とおー」と、彼女はミニプールに飛び込む。ばしゃっ、とためていた水が飛び散る。「冷たい、でも気持ちいいですねー」ライアちゃんのはしゃいでる。直径1メートル半ぐらいのミニプールだけど、ライアちゃんは楽しそうに遊んでいる。こんなことなら、無理しても近くのプールに連れてってあげれば良かったかな？「てやー」ライアちゃんは僕に水をかける。「ちよっ…服が、ぶっ」顔に思いっきりかけられた。「ふふふふふ、油断大敵ですよ」彼女はなおも水をかけてくる。いいじゃないか…受けてたとう。僕は靴を脱いでミニプールに飛び込み、ホースを持ってライアちゃんに向ける。「きやあー！卑怯で、ごぼっ」顔に狙いを定め、どばどばと水を出す。「むー！」彼女は下を向いて水を防ぎながら、水をかけてくる。「うらー！」「このー！」周りから見たら変な二人に見えたかもしれないけど、僕は最高に楽しかった。

「いやー、まいったまいった…」結局、あれから4時間ほど遊び、気がつくとも結構寒くなっていた。「はつくしゅん！」濡れた体のまま、ミニプールを片付ける。ライアちゃんは一足先に、お風呂に入っている。「一緒に入りますか？」とか冗談っぽく残していった言葉が、頭から離れない。そんな言葉に、つい赤くなつて反応してしまった僕も僕だが…。しかし夏とは言え、夕方近くなると結構寒くなるものだ。日が照っている時はいいけど、日が弱くなり、少しずつ風が吹いて来るようになるともうだめだ。「風邪ひかなきゃいいけど…」ミニプールの水を流し、空気を抜く。そしてまた、物置に戻す。「明日、またプールに行きたがるようなら連れて行ってあげるか…」正直、ミニプールは僕には狭かった。だから、普通のプールでライアちゃんと遊びたいと思った。まあさすがに、水のかけっ

こつてのはどうかと思うけどね…。

「しまった…僕どうすればいいんだ…？」片付け終わってから気づく。服は濡れたままだし、玄関にタオルはない。ライアちゃんは自分の分は持つてきてたらしく、拭いてお風呂に行ってしまった。ライアちゃんが出るまで、あと20分はあるだろう。「へっぷし！」ライアちゃんが来るまで、外で待つか…。

「十夜！？まだ外にいたの？」30分後ぐらいに、ライアちゃんが来た。「さすがに…寒い」体が震えた。「何やってるの…全く！」ライアちゃんは急いでタオルを持つてきてくれた。「濡れた服脱いで、早くタオルで拭いて」「いや、でも…」僕は濡れた服を脱ぐ、もちろん下半身はタオルで隠す。「やつぱり一緒に入っとけば良かった…」ライアちゃんはそう言いながら、濡れた服を洗濯機にいれに行く。「ほら、早くお風呂はいらないと！」僕も彼女について、お風呂に行った。洗濯機はもちろん洗面所があり、もちろんお風呂場とつながっている。

お風呂場に入り、シャワーを出す。「ちゃんと暖まらないと、風邪ひくよ！」ドア越しから、ライアちゃんの声がする。「うん、ごめん」なんとなく、僕は謝った。「私、部屋に行ってるね。新しい洋服は洗面所に置いとくから」「待った！服は自分で出たらやるから…」「だめ！体冷やしちゃだめだからね！」「いや…そうなんだけど」タンスの中には色々入ってる。そりゃ思春期男子だから仕方のない事んだけど…見られるのはなあ…。なんて考えてる内に、ライアちゃんは洗面所を出て行ってしまった。「…これはまずいなあ」まあ今更焦っても間に合わないので、ゆっくりとシャワーを浴びる事にした。

「洋服、ここおいとくからねー」数分後、ライアちゃんの声が聞こえる。「あーうん、ありがとう」見られなかったのか？いやそれはないな、だって結構浅い位置に置いてあるんだから…。母さんは部屋に入ってこなかったし、迂闊だったなあ…。「部屋行くねー」

特にライアちゃんの声に変化はなかった。「まあいいか…って僕は
何回自分を納得させてるんだかなあ」体をよく流し、湯船に浸かる。
「あ…癒される」年寄りみたいな事を言いながら、僕はゆったり
とする。

十数分程浸かり、僕はお風呂場から出た。そこにはしつかりと、新
しいタオルと着替えが用意されていた。「うーむ…」パンツも用意
されてるのは、少し複雑な気分だ。

着替えて、ドキドキしながら部屋に戻る。「いやー、さっぱりした」
ライアちゃんは僕の布団の上に横になっていた。僕は平静を装い、
ライアちゃんの隣に横になる。「風邪ひいたらさすがにまいるなあ」

「全くー、あれじゃ風邪ひかせてください、って言ってる様なもの
ですよ!」「だねー、ごめんごめん。…ところで、タンス開けたよ
ね?」「さりげなく…でもないけど聞いてみる。「開けましたよー、
衣服の他にエツ…」「わーわー!…やっぱり見た?」顔が赤くなる
と同時に、引きつる。「見ましたけど、十夜ぐらいの男の子なら普
通じゃないですか?そんなに焦らなくてもー」あははー、とライア
ちゃんは笑う。なんていうか、こういう時は彼女が大人に見える。

「まあそうなんだけど…やっぱり見られるのは恥ずかしいというか
…」「興味を持つのは、悪いことじゃないですよ。しかし十夜も
結構マニアックですね、コスプ…」「わーわーわー!言わなくてい
いから!…っていうか読んだの?」「…少しだけ」少し顔を赤くし
て目をそらす彼女。死のう…というか死ぬ…。「気にしたらだめで
すよー」「ううー…」恥ずかしすぎる。「まあそれはおいといて、
ご飯にしましょー」「…だね、遊んだらお腹減ったし」何か釈然と
しないものをかかえ、部屋を出た。

そして相変わらずいつも通りおかずをチンしてご飯を食べて、後片
付け。今ではライアちゃんと一緒にご飯を食べるのが当たり前にな
っていた。でもたまに、不安になるんだ。ライアちゃんは期間が終
わったら、魔界に帰ってしまうだろう。まだ先は長い、でもすぐに
終わってしまうだろう。いつかは来る別れが、すごく寂しかった。

僕はご飯を食べ終えた後、食後の散歩に出た。いつもの散歩コースである。空にはきれいな星が輝き、虫たちは合唱するかの様に鳴いている。

歩きながら、僕はライアちゃんに聞く。「ライアちゃんは、二ヶ月以内に僕を殺せなかったら、どうするの?」「その時は諦めて、魔界に帰りますよ。卒業できないのは、ちょっと辛いですけどね」あはは、と笑う彼女。どうせ別れてしまうなら、彼女に殺されたほうが僕も彼女も良いと思った。だから、僕は言った。「ライアちゃんになら、殺されてもかまわないよ」もしかしたら、今すぐ殺されるかもしれないけど、僕は本心でそう思った。覚悟もそれなりであった。「…どうしてそう思うの?」「心なしか、ライアちゃんは悲しそうに言った。「ライアちゃんといるのが、すごく楽しいから、別れるぐらいなら、死んだほうがましだと思った。ライアちゃんも卒業できるしね」少しの間、彼女は黙っていた。「…ねえ、ちよつとしゃがんで」「ん?こつ?」「僕は立ち止まってしゃがんだ、彼女の顔が横に並ぶ。バシツツ、と良い音が響いた。少しの間、何が起きたか分からなかった。気づいた時には、左の頬が痛かった。「えつ?」僕はそう呟くことしか出来なかった。やがて、ライアちゃんが口を開く。「十夜が死んだら、おばさまが悲しむよ!?!おばさまだけじゃない、みんなが悲しむ!」「母さんは分かるけど、みんなつて?」「ライアちゃんは泣きながら言う。「友達が悲しむ、私も…悲しむよ」彼女は何を言っているのだろうか?彼女は僕を殺してきたはずなのに。「悲しむ友達なんていない!ライアちゃん、なんで君は僕を殺したら悲しむの?それが望みなんじゃないの?」「…」彼女は答えない。ああ、夏なのになんでこんなに寒いんだろうか?彼女にたたかれた頬は、こんなにも熱いのに。「理由は…言えない。でも私は、十夜を殺したら泣くよ、だから殺さない。だって、本当は…」ライアちゃんは続きを言わなかった。理由はやっぱり言えないのだろう。胸が熱くなった。肌寒い中、胸は異常に熱を持つ

た。ライアちゃんが、僕が死んだら悲しむと言ってくれた。その言葉だけで、僕が死ぬ理由なんて消し飛んでしまった。母さんには悪いけど、僕には彼女が一番なんだ…。いつの間に、こんなにライアちゃんを好きになったのだろうか？「…ごめん、殺されてもいいなんて、もう言わない。だから…だから泣かないでほしい」僕はしゃがんだ状態からひざ立ちになり、彼女をきつく抱きしめた。「…」彼女は何も言わない。だから僕も何も言わずに、ただ抱きしめていた。

永遠に思える様な時間は、それでも永遠ではなく、時という魔力により押し流されていった。「散歩の続き、しようか」ライアちゃんのその一言で、僕は動き出した。「うん」彼女の手をとり、ゆつくりと夜の道を歩いていく。なぜなのかは分からない、でもなんとなく、二人なら大丈夫だ、という気持ちがあった。

まあなんだかんだで、家に着く。「今日も疲れましたよー、はやくねましょー」いつも通りのライアちゃんが、いつも通りそこにいた。それにしても、僕もだけど、ライアちゃんもかなり気持ちの切り替えはやいよなあ…。「うん、じゃあおやすみ」「おやすみなさい」僕は布団にもぐる。彼女は電気を消して、彼女の布団にもぐる。今日も一日が終わる。

その5 理由 (後書き)

さてさて、ライアの理由とはなんの事なのでしょうね。当分出てきませんけどね…

その6〜ラブコメ?〜

「んー?」もう朝かな?なんだろうか、すごく体がだるい、それに息苦しい。時計を見ると、7時30分だった。ライアちゃんはまだ寝ている。僕ももう一眠りしよう…。ずっと垂れてくる鼻水をすすり、僕は布団をかぶってもぐる。だけど、なかなか寝付けない。鼻はつまってるし、咳とくしゃみが頻繁にでるので、いまいち意識がとんでくれない。「風邪か…」やっぱりなあ…ひくんじやないかと思つてたけど。昨日の事を思い出す。濡れた服、下がる体温、その中で待つ自分。あれで風邪をひかなかつたら、超馬鹿か超健康児のどちらかだろう…残念ながら、僕はどちらでもなかつたようだ。だるい体を起こし、ふらふらと机の引き出しを漁る。「体温計どこだつたかな…」引き出しの奥から、体温計を見つける。机の前のいすに座り、体温計のスイッチを入れて右のわきに挟む。…1分たたないぐらいだろうか、体温計からピーツと音が鳴る。僕は右のわきから体温計を取り出し、デジタル表記の数字を見る。「まじか…」39度4分、はつきり言つてやばいレベルの熱だ。僕は平熱が低いので、37度を少し過ぎただけでくらくらする。39度を超えた事なんて、インフルエンザぐらいの時しかない。「やば…」明確な数字を見てしまった事で、より体はふらふらする。布団に戻らないと…。戻ろうとしたら、ついふらつとしてライアちゃんが寝ている布団の上に倒れこむ。ライアちゃんは、僕の布団と机の間に寝ているのである。もちろん彼女は、びっくりして起きあがる。「いたーい!いきなり何をするんですか!」「ごめん…」それを言うので精一杯だった。頭はもうろうとして、体は言うことをきかない。これは…まじ…やば…。「十夜?ちょっと大丈夫!」「心配そうに覗き込んでくる彼女の顔が、最後にうつすらと僕の目に映り、僕の意識はとんでいった。

「んー…？」気がつくくと、布団の上で寝ていた。おでこの上には、濡れたタオルが置いてある。「あつちに僕の布団があるって事は…ここはライアちゃんの布団か」軽く首を動かして、周りを見回す。ライアちゃんは部屋の中にいなかった。「だりい…」だるい体を起こし、なんとか立ち上がる。一応立てるぐらいには回復したようだ。服は汗でかなり湿っていて、気持ち悪かった。「まずはトイレだな…」部屋のドアノブに手をかけようとしたら、ドアノブが回った。今更だけど、僕の部屋のドアは内側に引くタイプだ。まあ要するに何が言いたいかというと、部屋側でドアの前に立っていると、勢いよく開けられたら吹っ飛ぶって事だ。そして僕は吹っ飛ばされた。「がふっ」ただでさえまだふらふらしているので、軽く押されるだけでも倒れそうだ。「十夜ー、おかゆ持ってきましたよー」僕を吹っ飛ばしたライアちゃんが、ドアの向こうから現れる。「って！ちゃんと布団の中に入れておかないとだめじゃないですか！」仰向けに倒れている僕に、彼女はそう言う。「…」何か言う体力は、僕にはなかった。起き上がって、「…トイレ」となんとか小さく呟いて、心配そうに僕を見ているライアちゃんを部屋に残して、僕は部屋を出た。「ライアちゃん、力強いなあ…」ふらふらしているとは言え、あんなコントみたいなのをやるはめになるとは…。

トイレから部屋に戻ると、ライアちゃんがおかゆを持って僕を待っていた。「風邪の時は、ちゃんと栄養を取らないとダメですよー」まあごもつともだけど、彼女は僕を吹っ飛ばした事には気づかなかったのだろうか？「あんまり食べる気が出ないなあ」ライアちゃんの布団に戻り、僕は座る。「だめですよー。はい、あーん」おかゆをのせたスプーンを、僕の口元を持ってくる。「一人で食べられるって…」さすがに恥ずかしい。「病人はなすがままにされてればいいですよー」なんか違くないか？まあしょうがないので、スプーンを口に入れる。軽く噛み、おかゆを飲み込む。ていうか噛む必要なさそうだよなあ、まあいいか。「どうですか？」とライアちゃん

は聞いてくる。「うん…おいしいよ」鼻がつまっていたので、正直味はしなかったけど、その一言で彼女が喜んでくれるので僕は何のためらいもなくそう言った。「そう言ってもらえると、うれしいですよ」。はい、あーん」まあそのせいで、全部これで食べる事になったわけなんだけど…悪い気はしない。むしろ嬉しい。恥ずかしいけどね…。

全部食べて、彼女が持ってきてくれた薬を水で飲むと、また眠気が出てきた。「寝る前に、もう一度体温を測りましょう」机の上にある体温計をとり、彼女は僕のわきの下に挟む。体温計は引き出しにしまったので、机の上にあるという事は、僕が倒れている間にライアちゃんが熱を測ったのだろう。1分もたたない内に、ピーツと音が鳴る。ライアちゃんは体温計を取り出し、数字を見る。「38度9分、少し下がったけど全然ですね」確かに、倒れて意識がとぶまどとはいかないけど、それでも体はかなりきつかった。「タオル替えてきますね、ちゃんと寝るんですよ」そう言って、さっきまで僕のおでこ上につけていたタオル持って部屋を出て行った。容器に水を入れればいいんじゃない？まあ、自分のために一生懸命看病してくれるのは、すごく嬉しかった。母は仕事であまり家にいなかった。風邪をひいても大体一人だった。だから、胸が温まる、寂しくないから。ライアちゃんが部屋に戻ってくる。冷たくなったタオルを、僕のおでこの上に置く。「ライアちゃん…」「はい？」「ありがとうございます」「困ったときはお互い様ですよ。それに昨日のあれは、私のせいでもありませんし」あはは、と苦笑する。「それでも…ありがとうございます」彼女は照れる。「早く良くなってくださいねー」「うん…手、握っててくれない？」「何を子どもみたいな事を、って思われるかもしれないけど、病気のときは結構心細い。「いいですよー」握ってくれた彼女の手は、温かった。

「んー…？」本日三度目の起床と言葉を言い、僕は体を起こす。ライアちゃんが握ってくれていた手は、そのままだった。ライアちゃん

んは、僕の隣で手を握ったまま寝ていた。ずっと看病してくれていたのだろう…胸が熱くなった。僕は寝ている彼女の頬に、軽いキスをした。お礼の意味もあるし、何より僕がしたかった。寝ているところを、って部分は多少ひっかかったけど、仕方がない。僕は意気地なしなのだ。だけど、キスしたらライアちゃんの顔が赤くなった。…まさか？「もしかして…起きてる？」「…気のせいですよ」小さく彼女は言う。いや、何が気のせいなんだ？かなり恥ずかしくなる。「え、えーと…ごめん」とりあえず謝る。「だから、気のせいですよー」彼女は目を開けない。寝たふりで誤魔化したいんだろ…うか？僕も寝たふりで誤魔化したかった。というかなんで彼女は寝たふりをしていたのだろうか…？永遠の謎だった。

時間は午後11時、朝からほとんどぶっ続けて寝ていたため、眠くはなかった。体温を測ってみると、37度2分。まあ多少ふらふらするけど、散歩をする事にした。もちろんライアちゃんに止められただけど、粘ったところ最終的にオーケーが出た。

星空の下、虫たちの声を聞きながら僕らは夜道を歩く。「いやー、まさか風邪ひくとはね」寒いのが好きなせいかな、あんまり風邪をひく事がない僕にとって、風邪はほとんど無縁だ。「十夜は馬鹿じゃなかったんですねー」横を歩くライアちゃんは、結構ひどい事を言っている。「そういうライアちゃんは、風邪ひいたことあるの？」「えーっと…」頭に右手を当てる仕草、なんか久しぶりに見たような気がする。「…私、風邪ひいた事ないですね」「それは…」超馬鹿か超健康児が、今僕の前にいた。むしろ両方か…？「馬鹿が風邪ひかないなんて、嘘に決まってるじゃないですか！」うわ、逆ギレした。「むしろ、体調管理が出来ない馬鹿だから風邪ひくんですよ！」「いや、もっともなんだけどさ…そんなに僕を馬鹿扱いしたいのか!？」僕らはぎゃあぎゃああと言い合う。

こんな日常的な事でも、案外楽しいものだ。僕はライアちゃんと出

会うまでは、人生なんてつまらないものだと思っていた。退屈な勉強に、退屈な学校、社会に出たら否応なしに働いて、歳をくって死んでいく。そんな退屈な人生が僕はすごく嫌だった。ゲームの世界の様に冒険したり、悪者と戦ったり、現実ではまずありえない事をしたかった。でもそれは、僕の勘違いだと知った。確かにライアちゃんには悪魔だし、その時点で現実からは離れているかもしれない。でも、彼女送っているのは、冒険でも戦いの日々でもない。ただ普通の日常だ。どこにでもある、平凡にありふれた日常。だけど、彼女との日常は、とても楽しい。ただ話すだけ、ただ遊ぶだけ、ただそれだけの事なのに、僕はとても楽しい。要するに大切なのは…「自分の心次第か…」言い合いをしている最中、僕は言葉を区切る。「どうしましたー?」「ん、なんでもないよ。ただ、ライアちゃんといるのはすごく楽しいと思っただけさ」「私も、十夜といると楽しいですよ…。キスとかされちゃいましたし」照れながら、でもからかう様に彼女はそう言う。「いや…あれはその…」言葉が見つかからない。「次は、ちゃんと起きてるときじゃないとダメですよ」「いや、起きてたじゃん…。彼女はそんな僕の考えを察したのか」「十夜は私が寝ていると思うてたじゃないですかー」と言う。「次する時は…口で」なんて軽く言ってみる。「何を言ってるんですかー!」「お、赤くなってる。こういうところは(も)、かなりかわいい。「でも…十夜ならいいですよ?」「えっ!?!」今度はこっちが赤くなる番だ。「なんて、嘘ですよー。十夜つてば赤くなってるー」はめられた…。「あ、あれなんだー!?!」僕はわざとらしく、右上の方を指す。「えっ?なんですか…」ライアちゃんは予想通り、僕が指した方を見た。そして僕は、彼女の口にキスをした。柔らかい唇の感触が、伝わってくる。口を離すと、ライアちゃんはかなーり赤くなった。もちろん僕だって赤くなる。心臓はドキドキしっぱなしだ。「不意打ちは…卑怯ですよ」呟く様に言うが、嫌そうではない。「ん、ごめん」だから僕も、軽く謝った。それから僕らは何もしゃべらないまま、家に帰った。沈黙は、悪くはなかった。

部屋に戻り「いやー…今日は疲れましたよー」お決まりのセリフ。
「僕はいまいち寝れそうにないなあ…」「じゃあ一緒に寝ますかー？」
「聞いているわりには、もう僕の布団の中に入っている。」拒否権は？
「ありません」にっこりほほえむ彼女。あーもー！かわいいなおおい。
電気を消して、布団にもぐる。いきなり口にキスをされた。「…えっ？」
「さっきのお返しですよー。それではおやすみなさい」
「彼女はすばやく寝てしまう。鼓動が早くなり、余計寝れなくなつた僕の意識がとんだのは、かなり先の話だった。
今日も一日が終わる。」

その6〜ラブコメ?〜(後書き)

はて…?なんで僕はラブコメ書いたんだろう…。

いや元々恋愛話なんですけど(ファンタジーになってますけど)ここまでアレなのはなあ…。

その7 友達

「んー…あれ？朝か」寝る前にライアちゃんの不意打ちにあい、ドキドキしてなかなか寝付けなかったが、気づかないうちに寝ていたようだ。隣でまだ寝ているライアちゃんを起こさないように、体を起こす。「うん、全快」だるさはないし、頭もふらふらしない。熱を測らないでも平熱ということは分かった。時計を確認すると、8時を少しまわっていた。ライアちゃんもまだ寝てる事だし、僕も寝るか。一応トイレだけはすませ、また布団に戻る。今回は、案外簡単に意識がとんでいった。

「いて…」頭に軽い衝撃を受けて、僕は顔を上げる。「こら霧崎、授業中だぞ。寝るんじゃない」ははは、と周りにいるやつらは笑う。「あ、すいません…」そうだ、今は授業中だった。

右隣の席の女の子が、小声で話しかけてくる。「十夜君が授業中に寝るなんて珍しいね、疲れてるの？」「昨日寝るのが遅かったから苦笑しながら、小声で返す。

夢を見ていたようだ。どんな内容なのかは忘れたけど、現実よりは楽しい夢ではないだろう。高校に入って三ヶ月、勉強も部活もかなりいい調子で、かわいい彼女もいる（さっき話しかけてきた子だ）。僕の人生は順風満帆、最高の人生だった。不思議なことに、僕がやる事成す事、全てがうまくいった。まるで、自分が望む事全てがうまくいくようだった。

授業が終わり、休み時間になる。仲のいい男友達が近くにやってきて、僕を軽く殴った。遊びのつもりだったのだろうけど、結構痛かった。だから僕は…つい、死ぬ、なんて思った。そうしたら、それは消えてなくなった。教室にいたやつらは、「人殺し！」と叫んだ。僕には何の事か分からなかった。だって、僕は何もしていないのだから。それでも、彼・彼女らは騒ぐのをやめない。「うるさい

な…黙れよ！」教室にいたやつらは、みんな消えてなくなった。人だけじゃない、机が、教室が、学校が…全てなくなった。

「なんで…みんな消えたんだ？」僕のの前には、真っ白で何も無い世界が広がっている。誰かが耳元でささやく。「あなたが、そう望んだんじゃない」「違う…違う！僕はこんな事望んじやない！」「あなたは嫌なやつは消えてしまえと望んだ。それだけじゃない、退屈な世界すらいらないと望んだ」「…そんな事、ない」僕は震える体を抱きしめ、そう呟く。「最後に、あなたが消えれば、あなたの望んだ世界になる」「やめろ…！」「いきなり目の前に、小柄な女の子が現れた。「君は…」「さようなら」僕は女の子に、小さい鎌で首を切られた。意識が途絶えていく…。

「うわあっ！」がばつと体を起こす。「はあはあ…」嫌な汗が体中から噴き出して、パジャマを湿らせている。辺りを見回し、大きく息を吐く。「夢…か」しっかし…なんつう夢を見るかな。全てにおいて完璧な僕、消えていく人、物、そして世界…最後に僕が消えて終わる世界…。「望みか…」僕は本当にあれを望んでいないのだろうか？考えたところで、答えは出なかった。

隣には、ライアちゃんがまだぐっすりと寝ている。夢で見た彼女と比べると、全然怖くない。ぶにぶにと、頬を指でつついてみる。

「むー…」お、反応あり。ていうか、今何時だろ？時計を確認すると、10時半を過ぎたあたりだった。ライアちゃんが起きないのも珍しいなあ。僕は彼女の頬を指でぶにぶにし続ける。うーむ、柔らかいよなあ…。ぶにぶにし続けていると、さすがに起きた。「むー…おはようございます」「あい、おはよう」それでもまだ、頬をつついている僕。「…何してるんですか？」「いや、なんとなく」その後も特に何も言われなかったので、数分ぶにぶにしていた。僕がやめると、「ご飯にしましょうかー」と彼女は言った。

いつも通りおかずをチンして、ご飯を食べて、後片付けもさくさくすませ、部屋に戻る。

「さーて、何をするか」時間はまだ11時半少し前、一日の中盤にも達していなかった。「やまにはゲームでもー」「やるつか」ライアちゃんの意見を取り入れ、早速ゲームをやる。前回は主に対戦系だったので、今回は協力系にしてみる。二人で敵を倒していくアクションゲーやシューティングゲー。一人でやってもあまり面白く感じられなかったゲームが、かなり楽しく感じられる。僕がやられそうになったら彼女に助けられ、逆に彼女がやられそうになったら僕が助ける。なかなか息も合って、二人で熱中した。

そんな僕らを止めたのは、玄関の呼び鈴だった。「誰だろう？ 宅配便かな」ゲームをストップさせて、僕は玄関に行く。ライアちゃんは部屋で待っている。「はい、どちらさんで…」玄関のドアを開けると、そこには一人の少年が立っていた。「よう、元気か？」友達にでも話しかける様に、その少年は言う。はて、「…誰だっけ？」少年は盛大にこけた。漫画に出て来る様な、見事なこけっぷりだ。

「おいおい…同じクラスの山下だよ、山下誠」「んー…ああ」思い出した。窓の外を眺めていた時に話しかけてきた、あの時の少年だ。僕はたちまち気分が悪くなる。「で？何の用？」気分の悪さが顔に出ているのだろう、彼は顔の前で手を振る。「いや、特に用事があるわけじゃないんだ。ただ近くをよつただけで…」「そうか、今忙しいからじゃあな」僕は玄関のドアを閉めようとする。「待って待って」彼はドアに手をかけて止める。「なんだよ」自然と声が冷たくなってる感じがした。「家にあがってもいいか？」「断る」短くそう言つて、僕はドアを閉めようとする。「だから待って」山下は焦っている様に見える。「だから、なんだって言ってるんだよ」だんだんといライラしてきた。「だからなあ…」なかなか彼は続きを言わない。そんな事をしている内に、ライアちゃんが部屋から出てきてこつちに来た。「どうしたの？十夜」どうやら、少し長かったので心配になってきたみたいだった。「いや、ちよつとね…」ドアを閉めようとしている僕と、それを止めるためにドアの隙間から上半身を出している山下を見て、彼女は言う。「強盗ですかー？」

僕からしたら強盗よりもたちが悪い…。「違います！霧崎の友達です！」「誰が友達だうるあ！」友達という言葉に、少し…いやかなり苛立った僕は、ドアを無理やり閉めようとする。「痛い痛い！」体を半分はさまれている山下は、悲鳴をあげる。「なんかよく分からないんだけど…家にあげないのー？」「却下」僕はドアを閉めようとしながら、はさまってる山下を蹴って外に出そうとする。「ちよっ！まじ痛いって！」知ったもんか、何が友達だ？ふざけるなよ。それに、ライアちゃんとの時間を邪魔されてたまるか。「十夜ストッパー！」見かねて、ライアちゃんは僕を止める。「なんで止めるのさー？」「さすがにやりすぎだよー」彼女にパジャマの後ろを引っ張られ、僕は山下への攻撃をやめる。「今だー！」その隙に、ドアを開けて山下は中に入ってきた。「てめえ！誰が入っていいって…」「十夜！いい加減にしなさい」ライアちゃんから背中にとび蹴りをもらった。腰より少し下、びてい骨辺りにクリーンヒットして僕は玄関のドアに頭をぶつける。さりげなく、飛んできた僕を山下はよけていた。蹴られたところと頭をさすりながら、僕は振り返る。「ライアちゃん…すっごく痛い」僕の顔を見て、二人は青くなる。「霧崎…血出てる」「十夜！止血しないと…」「はい…？」「ぶつけた頭…と言つてもおでこより少し上ぐらいだけど、そこから血が垂れてきていた。嫌な血の感触が、顔の上を流れていく。「おおっ、まじだ」特に焦りもせずに、僕は声をあげる。そこから先は忙しなかつたライアちゃんに手を引かれ、リビングで治療を受けた。さりげなく、山下もあがってきていた。二人とも焦っていたけど、僕はいたって普通だった。痛いのはあんまり好きじゃないけど、自分の血なんて、結構見慣れてるから…ね。治療を終えて部屋に戻る。僕の頭には包帯が巻かれている。「ごめんねごめんね…」と涙目になりながら、ライアちゃんは謝り続けている。「大丈夫か霧崎？」うーむ…こういうライアちゃんは（も）かわいいよなあ…。「気にしないでいいよ…それより、なんているんだ？」僕は矛先を山下に向ける。大体、全部こいつのせいじゃな

いか…。「まあ落ち着けよ…学校来ないでなにやってんのかなーって思ったんだよ」正直僕はキレそうになった。それを察したのか、ライアちゃんは僕をなだめる。「十夜、だめだよ」「だってこいつらは…！」僕は何とか怒りを抑える。逃げた自分だって悪い事を、少しは自覚してるからさ…。「霧崎って、結構明るいんだな」「明るくちゃ悪いかよ？」それでもイライラしながら、布団の上に腰をおろす。ライアちゃんも僕の隣に座る。そして、立ったままの山下は言う。「いや別に、学校じゃ暗そうに見えたんでな」学校だから暗いんじゃないかと、僕は元々暗かった。ライアちゃんが来てから、だいぶ明るくなったような気はするけど。というか、ただ単にストリートに気持ちを出すようになっただけか…。「うるせえ、お前には関係ないだろ」少し前の僕なら、絶対にこんな事は言えなかっただろう。「しかも結構、饒舌じょうじつで毒舌どくじつだよな、なんか安心したわ」はあ？こいつは何を言ってるんだ？そんな事を考えていると、ライアちゃんが耳打ちをしてきた。「きつと彼なりに、心配してくれてるんですよ」心配？こいつが？「陰口をたたくようなやつが、何を安心するってんだ？」「は？」「山下は？を浮かべる。なかなか器用なやつだ…。「陰口なんて言っていないぞ、俺はな」俺はな、の部分を強調して言う。「何言ってるんだよ、僕は聞いたぞ？」「ああ、もしかしてあの時か…？俺は言っていないぞ、場が盛り下がる云々とか言ったのは、飯田だ」「一緒に話してたのはお前だろ？」「山下は苦い顔をする。「うーん…お前どこまで聞いてたんだ？」「その、場が盛り下がる云々の辺りまで」「その後俺がなんて言ったか聞いたか？」「聞いてない」僕は走って逃げたからな。「なんだったかな…ああ、でも話してみないと分からない、だったかな。だから俺は陰口なんざ言っていないぞ」「…本当かよ？」「いまいち信じられない。「…つーかな、俺は陰口言うぐらいなら、本人に直接言うぞ」確かに、本人が目の前にも言いそうなやつだ。「だから…どうしたって言うんだ？」それが分かったところで、僕は何も出来ない。「いや別に、どうしろってもんでもないけどよ。学校こねーの？」「だる

い」思つてもいない事を口にする。「ははは、俺だつてだりいよ。まあでも、つまねえ事だけでもないしな」笑った顔が、やけに輝いて見えた。いや、僕だけがそう感じたんだろうけどさ。僕はこんなに、人生楽しく生きてないから、ね。「そうか…まあ気が向いたら、行くよ」山下のような馬鹿とつるんで遊ぶのも、いいかもしれないな、となんとなく思った。「そーいや、妹さんか？」山下はライアちゃんを指差して聞く。ずっと黙つてたライアちゃんが、やつと口を開く、「違いますよー、私はあく…」だけど、僕はその口をとつさにふさいだ。「んんー！」ライアちゃんは暴れる。「親戚の子どもなんだ、夏休みだから遊びにきてんだよ」山下にそう言つてから、僕はライアちゃんに耳打ちする。「あんまりそれは言わないで」ふさいでいた手を放す。「そ、そうなんですー。十夜のいとこのライアって言います」なんとか口裏を合わせてくれる。「来亜ちゃん？珍しい名前だね、よろしく。俺は山下誠っていうんだ、気軽にマコツチと呼んでくれ」「うるさいぞマコツチ」「霧崎…お前が言うときもいぞ」「だまれマコツチ」「ちょ…」「死んでしまえマコツチ」「ひでえ…」「これで当分はからかえるな。」「よろしくですよー、マコツチヨさん」「もう好きにしてください…」二人は握手をする。やれやれ…。

「じゃあ急に悪かったな。学校こいよー」「お前はもううちにくんなよ」からかう様に、言つてやる。「は、断るぜ」笑いながら返してくる。「んじゃな」手をあげて、外に止めてあつた自転車にまたがって帰つていった。

部屋に戻ると、ライアちゃんがゲーム機の前で待っていた。「良い友達が出来て、良かったね」僕はライアちゃんの隣に腰をおろす。「馬鹿、だけどね」僕は笑つていたと思う、友達が出来て嬉しかったのかもしれない。本当のところは、僕自身にも分からなかった。「さて続きやるっか」「はいー」僕らはずつとつけっぱなしだった

ゲームを再開した。山下がきてから、一時間ほどゲームはつけっぱなしだった。

「ふー…疲れたなあ」「私ですよー」ゲームを終える頃には、時間は11時を過ぎていた。「ゲームで過ごす一日も悪くはないなあ、ライアちゃんがいるからだけどね」「一人でやってもつまらないですからねー」変な来客もあつたけどね。「ご飯にする?」「そうしましょー」

いつも通りおかずをチンして、ご飯を食べて、後片付けをさささと済ませる。

「散歩行こうか?」「はい」僕らはいつも通り散歩に出かける。

夜空には星が瞬き、地上では虫たちが合唱していた。「しっかし、今日は散々な一日だったなあ…」包帯を触りながら、隣を歩くライアちゃんを見る。「むー…謝ったじゃないですかー」ライアちゃんは困った顔をする。僕はつい、頬をぷにぷにとつつく。「何をするんですかー」少し顔を赤くするけど、ライアちゃんは逃げたり止めたりはしない。「何て言うか…癒され?」まあなんでもいいのだ、ただ触りたいだけなのだから。「癒してますよー」「こっちは治らないけどね」自分の頭を指差し、笑いながら言う。「もー、いじわるですよ」ぷんぷんと怒った仕草をする彼女。ほんとかわいいなあ…。

「十夜…」少しまじめな彼女の声。「ん?」「学校行く?」僕は「んー…」と考える。「行つてもいいかな、とは思えるようになったよ」「良かった…ね」彼女は、すごい笑顔でそう言ってくれた。だけど、ほんの少し…ほんの少しだけ、どこか寂しそうだった。「ありがとね…」僕は、聞くことが出来なかった。だから、そんな言葉を言うしかなかった。「私も…がんばらないとねー」「がんばるかあ」進級する為に僕を殺すと言った彼女、僕を殺したら泣くと言った彼女。彼女は、何をがんばるのだろうか?僕はやっぱり、詳しい事を聞くこと出来なかった。意気地なしだから…しょうがない。

散歩から戻り、部屋に戻る。「今日も一日疲れましたよー」「僕もすっごく疲れた…」電気を消して、布団にもぐる。「それじゃおやすみ」「はい、おやすみなさい」ライアちゃんとは、今日は別の布団だった。隣に彼女がいなくて寂しかったけど、人間気がつかない内に寝ているものである。

今日も一日が終わる。

その7 友達 (後書き)

友達って、良いもんですよ。十夜にも、良い友達ができみたい
で、良かった良かった

その8〜生死〜

「あーさーですよー」「んー…アーサー？」人名か何かですか？「アーサーじゃなくて、朝ですよー！」かけている布団をはぎとられる。「きゃーエッチー」いや、僕は何をやってるんだろうな…最近なんか性格がおかしいような気が…。「馬鹿な事言ってるんで、起きるんですよー」「ペシペシと頬をたたかれる。「痛い痛い！わかった、起きるって」別に痛くもないけど、わざとらしく大げさに言うてみた。起き上がって時計を確認、10時だ。まあ起きるには適した時間だ。しつかし…「もう少し優しく起こせない？」毎日起こされるたびに、こづかれたりはたかれたりされるのは、正直勘弁してほしいもんだ。「十夜って結構、寝起きが悪いんですよー」「え？そうなの？」今まで誰かに起こされた事はあまりなかったから、自分では気づいていなかった。ライアちゃんは困った様な顔をしながら続ける。「言葉だけじゃ起きないんですよー、だから実力行使ではて？困ってる様な顔をしながら、微妙に笑ってる気が…。「実力行使にしても、はたくのはやめてほしいなあ…」「一応これでも怪我人である。病院に行くほどでもなかったから、ガーゼと包帯だけはあるけどね。「キスとかすれば起きますかー？」「朝からは勘弁してください…。」「さすがにそれはまずい。「十夜はわがままですなー！」怒るライアちゃんは、相変わらず怖くなかった。「まあ、僕も気をつけるよ」あんまり血流すと、倒れそうだしね…。「ご飯にしようか」「はい」僕は部屋を出る。

キッチンにて、いつも通りおかずをレンジでチンしてご飯を食べる。そしていつも通り後片付け。説明するのもだるいぐらい、当たり前前の日常だった。

部屋に戻る、時間は11時だ。「今日は何しようか？」僕はそう言いながら、部屋のカーテンを開ける。たまには換気と、布団に日光を当てないかね。が、太陽は出ていなかった、むしろ雨が降ってい

た。僕は何も言わずカーテンを閉めた。「さて、何をしようか？」
「開けたのに、なんでいきなり閉めちゃうんですか？」うーん、
やっぱりつつこまれるか。「雨は嫌いでね、見るのも好きじゃない
んだ」「へー、何かあったんですか？」ライアちゃんは興味津々に
聞いてくる。「ちよつと、ね…」僕は自分の表情がどうなつてたの
か分からない、でも「言いたくないなら、いいですよー」なんてラ
イアちゃんが焦りながら言うぐらいだ、多分ひどい顔をしていたん
だろう。「いや、別に大した事じゃないし。話してもいいよ」極力
明るく言つたつもりだった。「はい…」まあ逆効果だつたつぽいけ
どね。

「どこから話そうか…」って言つても、そんなに長い話でもないんだ
けどね」机の前のいすに腰かけて、机の上に座っているライアちゃ
んに話しかける。「僕の父さん、死んでる事は言つたっけ？」彼女
は首を横に振る。「十夜からは直接聞いてないよ。でも、なんと
なく分かつてはいましたけどね」ライアちゃんの口調はいつもと違つ
て、大人モードの時のものだった。「父さんが死んだのも、こんな
雨の日だつたんだ…」少しの沈黙…僕は口を開く。「あれは、僕が
10歳の時だつたかな。夜中…」って言つても9時頃だつただけだ。
僕が遊んでるときに、ちよつとしたはずみで火傷をしちゃつてね。
沸騰したヤカンからお湯こぼしちゃつたのが原因なんだけど…」少
し間をあける。別に演出でもなんでもない、ただ単に喋り続けるの
が疲れるだけだ。その間も、ライアちゃんは口を開かなかつた。「
田舎だから、当然夜遅くまでやつてる病院は近くにないし、遅くま
でやつてる薬屋が一番近くて、歩いて30分ぐらいの場所だつた。
父さんはバイクで、その薬屋まで火傷の薬を買いに行つたんだ…。
今思えばさ、火傷なんて冷やすだけで、薬なんていらないうんじゃな
いかつて思うんだ」また少し間をあける。ちなみに、その火傷の跡
は右足のふとももにまだ残っている。「雨が降つてる中、スピード
出して行つたんだらうね…」トラックと事故起こして、簡単に帰らな
い人になつたよ」胸がざわつく、口から出る言葉はこんなに単調な

ものなのに、胸は切なかつた。「まあ、そういうわけ」話し終えて、僕は目を閉じる。今でも思い出せる、父さんが僕のために焦って外へ飛び出した事。父さんの死を知って泣いた母さんの顔…。ひどい事故だったらしいので、僕は父さんの遺体を見た記憶はない。

目を開ける。ライアちゃんが机の上で、何か言おうとしていた。でも、言葉が出てこない様だ。「気にしなくてもいいよ」僕はライアちゃんの頭をなでる。誰かに何かを言われたところで、それは所詮慰めにしか過ぎない。慰めでも、欲しい人は欲しいんだろうけど、ね。「だから、ライアちゃんが泣く必要は…全然ないんだ」言葉は出てなくても、涙は出ていた。本当に…優しい子だよな。でも前にも言つたら？僕は女の子の涙は苦手なんだ。

数分してようやく落ち着いたので、ライアちゃんは口を開く。もちろん涙も止まっている。「良いお父さんだったんだね」「馬鹿だったけどね」僕は照れ隠しのためにそんな事を言いながら、苦笑する。まあ実際、父さんが誰かにほめられるのは悪い気はしないんだけどね。「そのお父さんの分も、十夜は生きないとね」「任せて、後200年は生きるから」僕は笑いながら言う。いつもの僕はこんなもんでいいのだ、シリアスなんて似合わないからさ。

「そつえば話変わるけどさ」「はい？」「ライアちゃん服替えてるの？」純粹に疑問だった。何を今更的雰囲気もあるにはあるけどね。「ちゃんと替えてますよー」「そうなんだ…」毎日同じの着てる気がするんだよなあ…黒のシャツに黒のスカート。「同じ服いっぱい持つてるの？」「基本は同じ黒黒ですけど、細かいところが微妙に違ってるんですよー」なるほど、どこに持つてるの？とかは聞かなくていいか…どうせ背中から出てくるんだろうし。「微妙な違いねえ…そんな、ウーリ」を探せシリーズじゃないんだから」僕は溜め息を吐く。「そんなに分かり辛くはないですよー！これで、ファッションには気をつかっているんですよ！」「ファッション…？黒一色でか？悪魔と乙女心は全く分からないねえ…」「へええ、

そうなんだ」わざとらしく納得してみる。「そうですよー」胸を張って言うライアちゃん。なんだかなあ…。

「他にも色々聞きたいことあるんだけどいい?」「いいですよー」「ライアちゃんの羽って、飛べるの?」「この前見せてもらった小さな羽、ライアちゃんぐらいの大きさならあの羽でも飛べそうだ。」「

一応飛べるには飛べるんですけど…」「ライアちゃんは言い濁る。「見てもらったほうが早いですねー」ぴよこんと羽を出し、机の上立ってパタパタと羽を上下に動かす彼女。「おおっ!」「少しずつ机から足が離れていって…20センチぐらい飛んでから落ちた。」「はい?」「問の抜けた声が出てしまう。ライアちゃんは恥ずかしそうに、「私はこれが限界なんですよー」と言う。「なるほどねえ…」確かに言い濁る気持ちは分かるな。まあ実用的ってよりも、かわいく見せるためって感じの羽だから、飛べなくてもなんら違和感はない。

「まあ、かわいいからありだと思っよ」「そうですか?」「それでもライアちゃんはしょぼんとしている。「その内飛べるようになるんじゃない?焦る必要はないって」「むー…そうですね」笑顔になる彼女、やっぱりライアちゃんはこうじゃないとね。

「他にはー…」あれ?考えるとなかなか思い浮かばないものだ。だからとつさに、「ライアちゃんの家族は?」「なんて聞いてしまった。ライアちゃんの顔が、いきなり悲しそうになる。僕は少し焦る。「え、えっと確か、両親は生きてるんだよね?兄弟とかはいるの?」「ライアちゃんはうつむいてしまった。…失敗したなあ。「えーつと…ごめんね」ただ謝ることしか出来なかった。前に親の話をした時も、確か彼女は悲しそうな顔をしていたと思う。その時に、親はいるけど心配はしてくれてないよ、と言っていたのを思い出す。何かあるのだろうか?」

少ししてから、ライアちゃんは顔を上げる。「…厳しい両親と、二つ違いの兄がいました」いました?過去形って事は…。「お兄さん、亡くなったの?」「僕は言葉を選ぶ。「はい…私なんかよりはるかに優秀で、優しい兄でした」今にも泣きそうな顔と声だった。「そっ

か…」僕にとって、父さんが死んだ事はそこまでショックではなかった。まあ、そう思い込もうとしているだけなのかもしれないけど。だって、自分のせいで身内を死なせてしまったから…それにまともに向き合う事なんて…僕には出来ないから。だけど、彼女にとってその兄が死んだのは、かなりショックだったのだと思う。僕は何も言えなかった。ライアちゃんも、何も言わなかった。外からは、雨の音がザーザーと聞こえるだけだった。

「んー…」僕は立ち上がって、ライアちゃんを抱き上げる。「いきなり何を…」「ライアちゃん、軽いねー」僕は場の雰囲気流した、むしる壊した。だって、彼女の悲しそうな顔を見るのは嫌だからね。子どもを抱き上げる親の様に、たかいたかいを試みる。「ほら、たかいたかい」「もー、何をするんですかー！」じたばたと動きながら怒る彼女は、いつものライアちゃんだった。「ていうか、ほんとに軽いね」僕はライアちゃんを机の上におろす。持った感じ、10キロあるかないかぐらいじゃないかな？「いっぱい食べてるんですけどねー…」ライアちゃんは首をかしげる「なぜか身長も体重も増えなくて…」胸もないよなあ、なんて考えていると、ライアちゃんに怪我してる頭をこづかれる。「痛い！いきなり何を…」「何か考えなかった？」顔は笑っている、でも目は笑っていないかった。「アハハ、なんのことかな？」誤魔化しはするものの、ライアちゃんはかなり鋭いところがある。「まあ、いいですけどねー」普通に怒られるよりも、笑って怒られるほうが怖い…。

まあその後は、てきとーにゲームをやって時間をつぶした。

時間は流れて、現在6時。雨は止む気配が全くなかった。このままなら、きつと明日も雨だろう。「ご飯にしようか」「そうですねー」僕は部屋を出て、キッチンに行く。おかずをレンジでチンしてご飯を食べる。そして後片付けをする。後片付けをしている時に、母さんが帰ってきた。「おかえり」「ただいま、雨の日はいやねえ…」母さんも僕と同じで、あの日から雨の日が好きじゃない。まあ、僕

の比じゃないだろうけどね…。母さんはリビングのソファに腰をおろす。僕はキッチンから麦茶を持っていく。「おつかれさま、ご飯は？」コップに麦茶をそいで出す。「ありがと。食べてきたから、お風呂入って寝ちゃおう」麦茶を一気飲みし、コップを僕に返す。「分かった。今ライアちゃんがお風呂に入ってるよ」麦茶を冷蔵庫にしまい、コップと残りの食器を洗う。「ほんと…雨はいやね」母さんの声がリビングから聞こえてくる。「嫌でも、降るものはいやがないよ」とは言うものの、降らないに越したことはないんだけどね…。

部屋に戻ろうとしたら、母さんに呼び止められた。「十夜、最近変わった事ない？」「え？ん…ライアちゃんがきたぐらいだけど？」「そういうのじゃなくて…なんて言うのかしら」母さんは眉間に軽くしわを寄せている。「自分の体の変化、みたいなものはない？」「ん…？身長は伸びてないし、髪の毛が伸びただけ？？どうしたの？」「いや、なんでもないわ。呼びとめて悪かったわね」「別にいいけど…まあ部屋に戻るよ」

部屋に戻り、布団の上に横になる。「母さん、何が言いたかったんだろ？」「まあ、いいか。「そういうえば、今日散歩できないなあ…」カーテンを開けて、外を眺める。「さっぱりしましたよ」外を眺めていると、ライアちゃんが元気よく部屋にやってきた。「何を見てるんですか？」「ライアちゃんも、僕の布団の上に来る。「ん…、雨…かな。散歩できないなあと思ってさ」ほんつと、雨は嫌だなあ。「でも、止まない雨はないんですよ」彼女は、当たり前的事を当たり前前に言う。「確かにね」歌詞にありそうな言葉だと思う。「明けない夜はないんですよ」「そりゃね」まあこれも、歌詞にありそうだ。というかライアちゃんは何が言いたいんだろう？ライアちゃんは続ける。「ばれないツラはないんですよ」ブツ、と僕は吹いた。なんのこつちゃ…。「いきなり何を言い出すのさ」「なんとなくですよ、風呂はあってません？」「あってるけどね」僕は笑う。彼女も笑った。

「笑ってくれて良かった…十夜、なんか寂しそうな顔してましたよー」「えっ、そう?」自分では気づいてなかった。ライアちゃんがいきなり謎な事を言い出したのも、僕に気をきかせてくれたのだから。「ありがとね」「いえいえー」僕はカーテンを閉める。「さて、ねよっか?」時間はまだ8時、寝るには早すぎるかもしれないけど、たまには良いかもしれない。「今日は早いですねー」「散歩できないし、ゲームつて気分でもないし…ライアちゃんはまだ寝ない?」「ライアちゃんは「んー…」と右手を頭にあてて考え、「私も寝ますよー」と言った。

「じゃあおやすみー」電気を消す。「おやすみなさーい」ライアちゃんは、今日は自分の布団で寝ていた。

「眠れないなあ…」さすがに目が冴えている。僕は立ち上がって、机の引き出しからカッターを取り出す。中学生の時から愛用してる、特別なカッターだ。名前は十六夜。正直、カッターに名前つける僕もどうかと思う。こんな風に雨が降っている日は、よく嫌な衝動に駆られる。寝付けない日は、特にだ。僕は十六夜のさきつちよを出し、左手の甲側の腕に押し当てる。手首と肘の間ぐらいである。軽く十六夜を動かすと、軽い痛みが走る。少したつと、切ったところが赤く線になり、血が出てくる。「ふうー」そんなに深い傷ではない。そこまで痛いわけでもないし、血もどばどばでてるわけでもない。それでも、胸は痛かった。僕は度々、左腕を切る。自分が嫌になった時、雨で寝付けない時、イライラしている時など、気持ちを落ち着かせるためにやっている。「父さん…」切ったままの体勢で、僕のせいで死んだ父の事を考える。「十夜、何してるの?」ライアちゃんが立ち上がって、いきなり電気をつける。「ん…」僕はとっさに十六夜を持った右手を背中に回す。なんとなく、ライアちゃんには見られなくなかった。でも、切った左腕は隠されていなかった。「どうしたの!? 血が出てるよ!」ライアちゃんは僕の腕を見て、血相を変える。「別に、珍しいことじゃないよ」見られたからには、隠す必要もない…かな。世間ではリストカットなんて、日常茶飯事

だと思う。まあ僕の場合は、手首じゃなくて腕なんだけどね。「珍しい珍しくないじゃないよ!!」ライアちゃんは僕のそばに寄ってくる。「なんで自分でこんな事するの!？」ライアちゃんは、かなり怒っている。「んー…」僕は言葉に詰まる。気持ち落ち着かせるためではあるけど、実際のところ、自分でもなぜ切るのか分かってないからだ。「自分の体は、大切にしないと!」ライアちゃんは、ティッシュで僕の左腕を拭く。ティッシュの拭いた部分は、すぐに赤く染まる。「止血するほどでもないからさ」何回もやっているの、傷の深さは分かっている。一番深かったものは、1年前のものだ。今でも跡が残ってるし、これからも消える事はないだろう。「馬鹿!!」パチンと頬をはたかれる。はたかれた頬は熱を持つ。血が出てるわけでもないのに、腕を切るより痛かった。「なんで…自分でこんな事するの?」ライアちゃんは泣いていた。「僕にも…分らないよ」「うん、確かな理由なんて誰にも分からないんだ。「教えて言うなら、自分が嫌いだからかな」正解が一番近いのは、多分それだと思う。「だからって…」ライアちゃんは僕の左腕を抱きしめて、涙を流し続ける。「ごめんね…血がついちゃうよ?」「そんなの…かまわないよ!」「ほんと…ごめん」ライアちゃんが僕のために泣いてくれている。胸が、苦しかった。「もうしちゃだめだよ!!」「気をつけるよ、ごめんね…」自分の体はともかく、ライアちゃんを泣かすわけにはいかないから、ね。

その後、結局僕らは同じ布団で寝た。ライアちゃんがそばにいてなんとなく安心した僕は、すぐに夢の中へと誘われていった。今日も一日が終わる。

その8〜生死〜（後書き）

人が死ぬのは、悲しい事ですよ。僕はそう思いませんが、十夜はきつとそう思っています。それが自分のせいなら、尚更…

その9〜兄妹〜

「んー…朝、かな？」起き上がり、時計を確認する。針は9時を示していた。

「それにしても…そっか、そうだったんだね」まあ独り言はおいとおこう。眠たい目をこすり、昨日切った傷を見る。赤い線は、手首の少し下から肘のほうへとびていた。血は拭いたけど、結局包帯などはつけなかった。傷が少し痛む。「切るのはいいんだけど…かさぶたがかゆいんだよなあ」まあ、しょうがないことだ。

目線を隣に寝ている女の子に移す。なんとなく、申し訳ない気持ちになった。「心配させちゃったなあ…」僕はライアちゃんの頭をなでる。「むー…」と、うなっているが、僕はなでるのを止めない。

少しの間で続けていると、ライアちゃんは起き上がった。「おはよう」彼女は寝ぼけ眼で僕を見て、すぐにはつとし目を覚ます。「十夜、腕大丈夫？」ライアちゃんは僕の左腕の傷を見て、言った。

「うん、大丈夫だよ…慣れてるからさ」軽く笑ってみたが、ライアちゃんは悲しそうにしている。「自分で自分を傷つけるのは、だめだよ」「分かつてはいるんだけどね…」「次やったら、私が十夜を斬りますからね？」あれ？なんか矛盾してないか？それでも、真剣なライアちゃんを見て僕はうなずいた。「気をつけるよ」「分かってくればいいんですよ。…ご飯にしましょー」「うん」僕は部屋を出てキッチンに行った。

いつもの様に、おかずをチンしてご飯を食べる。そして後片付け。

「ほんと…毎回毎回説明するのも、僕はどうかと思うけどね」「なんの事ですかー？」「いや、ちょっと誰かさんの代わりに言っただけ」「むー？」まあどうでもいいのだ。

部屋に戻り、机の前のいすに座る。ライアちゃんはいつも通り、机の上に座る。「十夜はどうして、自分を傷つけるの？」昨日聞かれた事を、今も聞かれた。「自分が嫌いだから、かな」「私も自分が

嫌いだけど、私はしないなあ……」「人それぞれだと思っけど、さ」
僕はかなり自虐的タイプなんだと思う。「僕を心配してくれる人なんて、いなかっただからね」僕は嘘を吐いた。「私が心配しますよ」
僕は、きつと心配してくれる人がいても、切ってしまうだろう。それほどにダメ人間なんだ。でも……「ライアちゃんが心配してくれるなら、僕はきつと切らないよ」これは本心だ。「大切な人が傷つくのを見るのは、耐えられませんよ」大切な人が……まあ深い意味はないのだろうけど、それでも僕は嬉しかった。「僕も、ライアちゃんが自分で自分を傷つけてたら、止めるだろうなあ」全く、人間とは変な生き物だ。自分が良くても、他人はだめだと言っのだから。「十夜は、死んだりしないよね？」唐突に、ライアちゃんはそんな事を聞いてくる。しかも、雰囲気が普通じゃなかった。なんというか……深い哀しみみたいなものを感じた。「死んだりはしないよ、元々は自分を傷つける事に関して、かなり拒絶オーラを出しているような気がする。「それなら……いいんだけど」「ライアちゃん、何かあったの？」僕は興味1割、心配9割でそう聞いた。少しの沈黙……ライアちゃんは悲しそうにうつむいていた。「……その内ね」「え？」「その内、全部話すから」全部、か。その時にその理由も分かるだろうし、ライアちゃんが僕を殺しに来たのに殺さないわけもきつと分かるのだろう。なんとなく、そんな予感がした。「分かったよ、その内だね」「うん……言えない事ばかりで、ごめんね」「いやいや、気にしないでいいよ」正直、彼女に何があつたのか僕はすごく知りたい。彼女の力になりたいし、何より頼ってもらえてない気がして嫌なんだ。「……したくないから」ライアちゃんは小さく何かを呟いた。「え？」「んーん、なんでもないですよ」まあ、その内分かるだろう……。

「今日は、何して遊ぶんですかー？」いつものライアちゃんが、そこにいた。「そうだね……今11時かぁ」ゲームという手もあるが……そう言えば、今日は晴れてるのかな？僕はカーテンを開けて、確

認する。昨日の雨が嘘だったかのように、空は晴れわたっていた。
「いい天気だなあ、散歩でも行く？」僕はライアちゃんに聞く。「昨夜はいけませんでしたし、いきましょーかー」「なら、決まりだね」そう言っつて、僕は外着に着替える。着替えてる間、ライアちゃん僕をじーつと見ている。「えつと…そんなに見られると着替えづらいなあ…」「減るもんじゃないし、いいじゃないですかー」おいおい、あんたはこのオヤジだよ…。まあ気になりながらも着替えを済ませ、ライアちゃんと家を出る。母はもう仕事に出ているので、戸締りはしっかりとする。

いつもの散歩コースを歩きながら、僕は口を開く。「そう言えばライアちゃんつてさ、パジャマも外着も一緒なんだね」黒のシャツに黒のスカート、会った時から変化はない様に見えるけど、ライアちゃんいわくちゃんと着替えているらしい、しかも微妙に違うらしい。僕には分からないけどね。隣を歩くライアちゃんは、僕を見上げて聞き返してくる。「同じに見えますか？」「え？だつて、着替える時間なかったじゃん」「ふふふ、十夜もまだまだですねー。と、ライアはあや　い笑いを浮かべ、言った「いやいや…何言ってるの？」ライアちゃんは笑いながら、「ナレーション担当してみましたー」と言う。「怪しいがあや　いになつてる辺り、ライアちゃんつばいんだけどさ、聞いている人にはわからないんじゃない？」「十夜に分かれば、いいんじゃないですかー？」「いいんだろうか…「まあいいか」結局ライアちゃんの服の事はうやむやにされてしまった。「それにしても…暑いなあ」太陽はじりじりと僕らを照りつける。「私は平気ですけどねー」「そう言えば、暑いのが好きなんだっけ」と笑う彼女。「それは分かるけど、でも暑いのと暑苦しいのは違うんじゃないかと…」「どつちでもいいじゃないですかー！」「いやいいんだけどさ…ライアちゃんつてキレイカラだよね」まあそれも今更の様な気もするけど。「私の半分は、キレイで出来てるんです

よー」「バファ ンじゃないんだから…」「ライアちゃんって結構、ギヤグ好きだよな…」。

「暑い…」何回言っただかも分からないくらいに、僕は暑いと口にしてた。「もー、十夜は何回言えば気が済むんですかー？」隣を歩くライアちゃんは、少し怒り気味だった。「何回言っても、気が済むもんじゃないからなあ」「暑いのはしょうがない事だしね。」「でも、こう暑いと言わなきゃやってられないよ」「僕は服の襟元をつかんで、パタパタと風を送る。服は汗でびっしょりだ。「十夜は暑がりですねー」隣を歩くライアちゃんは、ほとんど汗をかいていない。「僕が暑がりなわけでもないと思うけど…ライアちゃんは汗すらかいてないね」「服の内側は少し汗かいてますよ？見ますかー？」嫌な笑いを浮かべながら、そう言う彼女。大抵そういう時はからかって言っている。だけど分かっている、僕はつい顔を赤くしてしまう。

「…いや、いいよ」「つい顔をライアちゃんの反対側にやってしまふ。くすくすと笑っているのが聞こえてくる。「冗談ですよ、十夜はからかうとほんと面白いんだからー」真剣の時でも冗談の時でも、僕はライアちゃんに勝てなさそうだ…」。

「ねえ十夜、お昼寝していかない？」「草原の近くを通っている時に、ライアちゃんはそう聞いてくる。「もしかして、また草原で？」「うん、気持ちいいですよー」「んー…」確かに、この前横になった時は気持ちよかった。だけど、昼寝なんてしたら干からびそうだなあ…。「まあ、いつか」「わーい」と喜ぶ彼女。僕らは道路から少し外れて、草原へと歩いた。相変わらず、草は青々と茂っている。「てやー」ライアちゃんは、草のベッドへと飛び込む。「石あったら危ないって…ていうか、地面濡れてないの？」「見た感じ、草の先端は濡れてないけど、下はどうだか分からない。「一応平気ですよー」一応？僕もライアちゃんの隣に横になる。「確かに…一応乾燥はしてるみたいだけど」家帰ったらお風呂かな、これは。「えへへー、やっぱりここは気持ちいいですよー」「だねー、暑いけどどうとんとする」「太陽は僕らを、じりじりと照らしている。あんまりにも

まぶしいので、直視は出来ない。だから、僕はライアちゃんの方を向いた。「…ぐーっ」「っつて、寝るの早いつて！」腕を伸ばして、頬をつつついてみる。反応なし、どうやら本当に寝ちゃったようだ。「なんだかなあ…」「まあ、いいか。僕も寝てしまおう…。とは思っけど、なかなか寝付けない。「暑いつて…」「気温は一体何度なんだろう？少なくとも、30はこえていそうだった。「しっかし…」「隣ではライアちゃんがやすやすと寝ている。「暑くないつてのもすごいよなあ」とても良い寝顔をしながら、ライアちゃんは寝ている。少しの間見ていると、いきなりその寝顔が悲しそうにゆがんだ。よく見せる、ライアちゃんの本当に悲しそうな顔。少し、胸が痛くなる。悲しそうな顔をしたまま、ライアちゃんは呟いた。「…兄さま」死んでしまったお兄さんの夢を見ているのかな？その割には、悲しそうだけど…。「死んじゃ…やだよ」「ライアちゃん…」「僕は目をつぶり、意識を交代する。「ライア…」俺はライアの手を握り締めて、耳元で優しく呟く。「俺はここにいるよ、だから泣くな」ライアの顔は、悲しそうな顔からいつきに笑顔になった。「兄…さま」ふう…俺にはこれぐらいしかしてやれないからな。「悪かったな十夜、ありがとう」俺は自分に礼を言う。俺は目をつぶり、意識を交代する。「気にしないでください、僕じゃ何も出来ませんから」僕も自分に話しかける。端から見たら、たたの変な人だろう。

誰にも言っていないし、言ったところで信じてもらえないだろうけど、僕の中にはライアちゃんのお兄さんがいる。僕だつて、お兄さんだと知ったのは今朝の夢の中なんだ。元々、ライアちゃんのお兄さんは僕の中にいたんだ。中学3年生の時だっただろうか、気づくと僕の中に違う誰かがいた。その誰かは何かを言うわけじゃないし、何かをするわけじゃなかった。僕も最初は気味が悪かったけど、いてもないのとなんら変わらない彼は、気づけば僕の中の住人になっていた。そんな彼が、今朝夢の中で初めて話しかけてきた。

「初めまして、でいいのかな？」「初めまして、結構前からいるけ

ど、あなたは誰なんですか？」「俺は…ライアの兄だよ」「は？」この人はいきなり何を言ってるんだ？「まあ変に思うだろうけど、本当だ」「はあ…で、いきなり話しかけてくるなんて、どうしたんですか？」「今更だが、ライアのことをよろしく頼みたくてな」「ええ？」「いまいち意味が分からない。「ライアのこと、好きなんだろう？」「うっ…そうですね」だから、どうしたと言っのたろう？」「ライアも、お前のことが好きだろうな」僕は顔を赤くする。「は、純な少年だな。まあ、そういう事だ、ライアを頼むよ。あの子は強く見えるが、本当は弱いからな」「ライアちゃんは強いと思いますけど…」よく見せる悲しそうな顔を思い出して、僕は止まる。「分かっただろ？ライアは弱い」「じゃあ、あなたがライアちゃんに言ってあげればいいんじゃないですか？兄はここにいてるって」多分、体を貸す事は可能だと思う。それを決める権利は僕にあるって、なんとなく分かるからだ。「…すまん少年、俺はライアを見守る事しか出来ないんだ」つらそうに、ライアちゃんのお兄さんは言う。「…分かりましたよ、ライアちゃんの悲しそうな顔は、僕も見たくないですからね」「ふ、助かるよ。さてもう朝だ、また会おう」これが今朝の夢の内容だ。まあ夢の中じゃなくても、会話はできるみたいなんだけどね。「さって、僕も寝るかな」ライアちゃんの手を握りながら、僕は彼女の横で目を閉じた。暑い中、ゆっくりと意識は飛んでいった。

「朝ですよー」「ん…？」「目を開けると、ライアちゃんが顔を覗き込んでいます。「おはようございますー」「うん、おはよう…あれ？」体を起こして辺りを見回すが、そこは自分の部屋じゃなかった。「どうしたんですかー？」「ああ、そっか。草原で昼寝をしていたんだ。」「いや、なんでもないよ」僕は誤魔化した。何寝ぼけてるんですか？とか言われたくないからね。「むー？」「ライアちゃんは、なんとなく機嫌が良さそうだった。「なんか、良い夢でも見たの？」「えっ？何で分かるんですかー！？」ライアちゃんはびっくりして

いる。そりゃーね…ま、本当の事は言えないけどさ。「なんか、機嫌が良さそうだからさ」だから、一番適当な理由を言ってみる。「やっぱり、十夜には分かっちゃいますかー」あはは、と楽しそうに笑う彼女。「良い夢でしたよ…」ライアちゃんは余韻に浸り、目を閉じる。なんとなく、神秘的な感じがするのは、僕だけなのかな？「夢が、現実になればいいんですけど…ね」一転して、急に悲しそうになる彼女。僕にはその夢が、現実になる事はないと分かっているから、なんとも言えない感じになってしまう。だって、死んでしまった人とはもう会えないんだから…。「きつと、現実になるよ」心にもない事を言う。でも、ライアちゃんが喜ぶなら現実にしてあげたいな…。

「そう言えば、どんな夢だったの？」一応聞いてみる。笑顔に戻り、弾んだ声でライアちゃんは答える。「私の大好きなシュークリームを、たくさん食べる夢ですよー」え？何それ、そんな事の為に悲しそうな顔したんですか？君は…。

予想外の言葉に、僕が何も言えないしていると、「なーんて冗談ですよ」ひっかかった、と言う様に笑う彼女。「だまされたなあーんー、僕もまだまだなあ…ライアちゃんなら、ほんとにありそうな感じがあるから、ついひっかかってしまった。今度、シュークリームを買ってあげるか…。本当はですねー…パパとママと兄さまと私、みんなで楽しく笑いあってる夢を見ました。楽しかったですよー、なぜか十夜もいましたし」「僕もいたんだ？一家団欒の中に、なんで混じってるんだろうねえ」謎ではあるけど、夢だしね。まあ、僕がライアちゃんを喜ばせているようで、嬉しいからいいかな。「…十夜」「ん？」ライアちゃんの雰囲気、がらりと変わる。「十夜は、ずっと一緒にいてくれるよね？死んだりしないよね？」朝と同じ質問を、ライアちゃんは繰り返す。「死んだり…しないよね？」空気が張り詰めている。彼女の悲しさが、違う世界を作り出しているみたいだった。「死なないよ…ライアちゃんと、一緒にいたいから」僕は小さく、でも強くそう言った。「十夜ー…」ライアちゃんはポ

口ポロと涙をこぼしている。ほんとに、喜怒哀楽の激しい子だなあ……。立ち上がって、ライアちゃんを抱っこする。「帰ろうか」ライアちゃんは僕の胸で泣き続けている。夕日が僕らを照らす中、僕は家に帰った。

部屋に戻り、自分の布団に座る。なぜかライアちゃんは、僕に抱っこされたままだ。家に着いた辺りで泣き止んだので、おろそうとしたら駄々をこねられた。だから、今でも抱っこしてるわけなんだけど……。ライアちゃん、離れない？」「いやです」んー、僕としちゃ嬉しいところなんだけど、チキンハートがずっと高鳴りっぱなしなのが少しつらかった。早くなってる鼓動を、ライアちゃんに聞かれているのはなんか恥ずかしい。「ちよつと僕お風呂入らないと……」「いやです」即答されてしまう。「いやでも、布団汚れちゃうし……」結構手遅れっぽいんだけどさ……。「じゃあ、一緒に入ります」マジですか？さすがに困る。「えーっと……」「いやです」「その……」「だめです」何かを言う前に、即答されてしまう。ライアちゃんは一体どうしたんだろうなあ……。

結局、そのまま30分ほど時間がたってから、ライアちゃんが僕から離れた。「あの……ごめんね」しずしずと頭を下げられる。さすがに、そこまで申し訳なさそうに謝られると、怒る気は起きない。ていうかそんなもんは、元々起きないんだけどさ。「いいよ、僕だって嫌じゃないし、ただ……」ライアちゃんは身を縮める。怒られると思ったのだろう。「お風呂行って来るね……」さすがに汚れたまんまはまずいしね。

身を縮めてるライアちゃんを部屋に残し、僕はお風呂に行く。ついで……でもないけど、僕は体の中……正確にはどこにいるのか分からないけど。まあライアちゃんのお兄さんに話しかける。「ライアちゃん様がおかしいんですけど、何かあるんですか？」「話しかけると言っても、昼みたいに声を出してるわけじゃない、心で話しかけてるみたいなものかな。「さつきから、えらく説明的だな」「人

の説明を勝手に聞かないでくださいよ…それより、ライアちゃんの事ですよ」「ああ、ライアがああなったのは…俺含める家族のせいだな」「家族？俺って…えらく普通に言いますね？」「軽い苛立ちを覚える。「そうカリカリするな、本当の事を本当と言って何が悪い？」「ごもつともなんですけどね。自分のせいだ、なんて普通に言われたらライラしません？」「ま、こんな性格なんだ、少しは大目に見てくれ。ライアには悪いことしたと思ってるしな」「一体、何があったんです？」「…ライアから聞きな」「その内って、言われましたよ」「ライアがその内って言うなら、その内だろ。理由が分からないと不安か？」「不安に決まってるじゃないか。彼女に何があったのか、僕は知りたい」心の声は、ついとげとげしいものへと変わる。「知りたいなら尚更だ、ライアから聞け。あいつを少しは信用してやれ」「僕に信用しろだって…？僕は他人を信用する事なんて出来ない。あんただって分かってるだろ？僕がどんな人間か…」「汚い自分が、次々とあふれでてる。「そうだったな、自分が傷つくのを恐れて逃げた、馬鹿野郎だったな。しかもそうやって思い込んで、自分自身からも逃げようとしてる」「ついカツとなる。「うるさい！あんたに何がわかるんだよ！」「わからんし、わかりたくもない。だが、ライアへの想いは本物なんだろ？」「ああ、そうだよ！僕はライアちゃんを、守りたい」「それで十分だろ？誰かを好きになれるなら、信用することも出来るはずだ」「何を…」「さっさと行ってやれ、また悲しむぞ」「…その内、殴られせてもらうからな」「続きは夢でな」

僕はすばやくお風呂を出て、部屋に戻る。身を縮めてうつむいていたライアちゃんが、顔を上げて僕を見る。どことなく、安心した表情だった。「遅くなってごめんね…」「気にしないでいいですよー」なんか、無理してる感じだ。僕はライアちゃんの隣に座り、彼女に聞く。「ライアちゃんさ、僕のところに来るまでに、何かあったの？」「…」「ライアちゃんはうつむいて黙る。「ライアちゃんの過去を知りたい。僕自身の為に、ライアちゃんの為に」彼女の力になっ

てあげたいんだ…。

それでも、ライアちゃんは黙ったままだった。胸が痛くて切なくて、たまらなかった。ただそばにいることが彼女のためだとしても、好きな人に頼ってもらえないのは、あまりにも苦しい。「ごめんね、僕空回りしてるみたいだ。…今日は、父さんの部屋で寝るよ」居づらくて、僕は部屋を出た。振り返りはしなかったけど、ライアちゃんが何か言おうとしたのは分かった。それでも僕は…逃げ出した。過去のこともなんか分からなくなつて、彼女にしてあげれることはたくさんあるだろう。でも、僕は…僕は…！

…つまらない意地なのかもしれない、もっと頼って欲しいと…。お腹は減っている。でもそれ以上に胸がつまっていて、食べる気が全く起きなかった。だからそのまま父さんの部屋で寝ようとした。だけど、色々な考えが交錯して、僕の意識がとんだのはかなり先の事だった。最後に思ったのは、明日ライアちゃんに謝ろう、だった。今日も一日が終わる。

その9〜兄妹〜(後書き)

未だに謎なライアの過去。この先この二人はどうなっていくんでしようかね。

展開の早さに作者もついていけません・・・

その10〜愛〜

「ん…頭、痛い」ズキズキと、頭が痛む。「今何時だ…？」重い頭を持ち上げて、時計を見る。9時30分、大体いつも起きる時間だけど、体がだるくて起きる気になれない。「昨日考えすぎたからなあ…また風邪ひいたかな？」そんなわけはないと思う。きつと、知恵熱かなんかだろう。前に風邪をひいた時に、ライアちゃんが看病してくれたのを思い出す。そうしたら、急に一人でいるのが寂しくなった。「謝らないと…起きよう」頭に震動がいかないように、ゆっくりと体を起こす。「んー」立って体を伸ばすと、少しだけ元気になった気がした。

父さんの部屋を出て、自分の部屋に戻る。自分の部屋に入る前に、一度だけ深呼吸をした。「ふー…」さて行こう。部屋のドアを開けると、中は暗かった。電気をつけて中を見渡すと、そこには誰もいなかった。「あれ？」なんとなく、嫌な予感がした。

家の中を探し回っても、ライアちゃんはいなかった。「一体どこに…？」今日は雨が強く降っているから、散歩になんて出ないはず…。予想とは裏腹に、玄関にライアちゃんの靴はなかった。「こんな雨の中、どこに…？」なんだろう、すごく胸騒ぎがする。

僕は捜しに行くことにした。ここで行かなかつたら、もう二度と彼女が帰ってこない気がしたんだ…。

「雨が…」左腕の傷が疼く。傘を差して、どしゃぶりの外へと飛び出す。さっきまでズキズキと痛んでいた頭は、もう気にならなかつた。

「ライアちゃん…」僕は走っていた。自分でも分からないけど、焦っている。捜しているのはいつもの散歩コースだ。それでも見つからなかつたら、見つけるまで捜すまでだ。だって彼女は、大切な人なんだから…！

「いない…」いつもの散歩コースには、彼女はいなかった。いそうな気がした草原にも、彼女はいなかった。雨はこちらの都合など考えずに、ザアザアと強く降り続けている。「ちくしょう…」もう傘を差す意味がないほど、僕はずぶぬれになっていた。だから傘を投げ捨てて、再度走り出す。「どこに…どこに行つたんだよ」「あてもないまま、視界の悪いどしゃぶりの中を捜し続ける。

近隣の主だった場所はあらかじめ捜し終えた。だけど、彼女はどこにもいなかった。

「僕は、何やってるんだろうな…」8月の割には、今日は気温が低く少し肌寒い。どしゃぶりの雨がそれに輪をかけ、僕の体温は下がりきっていた。いくら寒いのに強いとはいえ、そんな中二時間以上も走り回っていればさすがに死にそうになってくる。「これで家に帰ってたら…笑っちゃうな」それでも、僕は家に帰らない。ライアちゃんが家にいる気が、全くしないからだ。「雨宿りでもしてたら見つかるわけもないなあ」それもなしと思うけど…さ。「ほんと…僕は馬鹿野郎だな」自分の勘だけで、ただただ彼女を捜しているのだから…。

「あ、川の方向行ってないや」家からそう遠くない場所に、川がある。近場では、そこだけ捜していなかった。「いなかったら、諦めるかもなあ」心にもない言葉を吐く。なんかしゃべってないと、孤独でやってられないんだ。こんな気持ちの時は、さ。

川につき、川沿いに彼女を捜す。川の水面はだいぶ高い位置にあり、落ちたらいい感じに死ねそうだ。「いい感じって、なにがだよ…」自分自身にツツコミをいれながら、それでも心中穏やかじゃないまま、彼女を捜す。

10分ぐらい走ると、橋が見えてきた。「橋の名前は、なんだったかなあ」確か川と同じ名前だったのは覚えている。「君は、知らない

いかな?」橋の下手前、雨宿り出来ない位置に、ライアちゃんが仰向けに倒れて目を閉じている。「ねえ…答えてほしい」近づいて、顔に手を当てる。「こんなに…冷たくなつてさ…」彼女は喋らない。「ねえ…帰ろうよ」彼女は…喋らない。顔をはたいてみる、だけど反応はない。「ライアちゃん…悪ふざけはやめるよ?」抱き上げて、橋の下へと連れて行く。雨に濡れて冷たい彼女…冷たいのは雨のせいだけじゃないかもしれない。「せつかく迎えに来たんだからさ…帰ろう」僕は話しかけるのを止めない。「風邪、ひいちゃうよ…」返事はない。「ずっとそばにいるって、言ったじゃないか!」認めたくない。「起きろつて!!」頬を雨が流れていく、橋の下なのに不思議だ。「ライアちゃん!!!」涙なんかじゃない、だって彼女は生きているんだから。

それから、幾度話しかけたのかは覚えてない。でも彼女は、一度たりとも反応を示さなかった。ほんとは、見つけた時からなんとなくだけど分かってた…ライアちゃんはもう…。頭痛がする…寒い…寒い…寒いよ。彼女はもう、この世界にはいない。

「よ、十夜」「あんたか…って事は、僕は夢を見ているのか」ライアちゃんを抱きしめたまま、疲れて気づかない内に寝てしまったのだろう。夢の中のせいか、やけに僕は落ち着いていた。「今更、何の用ですか?ライアちゃんを守れなかった僕に、文句でもありますか?」「そんなんじゃない、別れを言いに来ただけだ」「別れ…?」「ああ、そうだ。じゃあな、また会えたらいいな」「何を言ってるんだ?あんたは…」不意に、僕は殴られる。そして、胸倉をつかまれる。「ライアをまたこんな風にしたら、死んでもお前を殺すぞ!」「そんな顔も…できるんですね…グツ」もう一発殴られる。夢の中のはずなのに、なぜかひどく痛かった。「分かったか!?」「…今更だよ、ライアちゃんはもう…」僕は地面に落とされる。「お前は今、誰を抱きしめている?その腕に感じる温もりが、分らないのか?」「何を…」あれ…?温…かい?「さっさと起きて、行け。最

後だから言つが、お前みたいな馬鹿は大嫌いだ。俺と、同じだからな」「えっ？うわっ！」目の前にいた男：ライアちゃんのお兄さんは強い光に包まれたかと思うと、光ごと弾けとんだ。辺りには、キラキラと光の雨が降り注ぐ。「じゃあな」そう聞こえた気がした。

「…あれ？」気がつくのと、橋の下にいた。腕の中にいたライアちゃんは、なぜかいない。「十夜…」後ろから声がする。後ろを向くとそこにはライアちゃんがいた。ずぶぬれで少し震えている。「…ライアちゃん？」「私のこと、まだ怒って…きやつ」「僕はライアちゃんを抱きしめた。「十夜？いきなり何を…」「良かった…本当に良かった…」ライアちゃんの服は冷たい、でも体は温かった。心が熱くなる。涙が、こぼれてしまう。「ごめんなさい…」ライアちゃんは謝る。僕はぼろぼろと、思いつきり泣いた。理由とか過去と関係ない。ただ彼女が生きていることが、嬉しかった。どうしようもなく嬉しかった。少しの間泣き続けて、ようやく僕は落ち着いた。「まずは帰ろう、話はそれからだよ」「…はい」僕ライアちゃんを抱っこして、雨の中家に帰った。

「まずはお風呂入らないと…一緒に入る？」僕は玄関で濡れた服を脱ぐ。「冗談、ですか？」「いや、本気」僕は玄関でトランクスのみになり、家の中にタオルを取りに行く。今は、恥ずかしいとか全く思わなかった。タオルをライアちゃんに渡そうとして、手を止める。「どうしたの？」「こっちのほうが早いや」僕はライアちゃんを抱っこして、お風呂場にもって行く。「ぱぱっと服脱いじゃって風邪ひくよ？」「僕も濡れているトランクスを脱いだ。「でも…」ライアちゃんは少し戸惑っている。冗談で、お風呂一緒に、とは言わないから！」少し強めにおすと、ライアちゃんは黙って服を脱いだ。僕はそれを洗濯機に放り込む。僕はもう、色々ふっきていた。後でライアちゃんに文句言われても、気にしない。彼女が風邪をひく

のは、嫌だからね。

「うわー…すつごくお湯が熱く感じるよ」それほどに体が冷えていたのだろう。僕は適温に調整して、ライアちゃんにお湯をかける。

「熱くない？」「大丈夫ですよ」「風邪ひいたらまずいからね、早く体を温めない」としっかし…落ち着いて考えるとこの状況はまずいな…どこに目線をやればいいのか。えーと、まずは頭洗って体流して…」いつも通りの順序で洗っていいこうとする。だけど、「十夜、それはシャンプーじゃなくてボディソープですよ」「えっ？」なかなかいい感じに混乱してる僕…。「あれ、おかしいなあ…この洗顔フォーム泡立たない…」「十夜、それはリンスですよ…十夜つてば」くすつ、と笑うライアちゃん。「ごめん…なんかちよつと焦ってる」まあ、暗い顔していたライアちゃんが笑ってくれたから結果オーライかな？「一緒に入ろうつて言ったのは、十夜ですよ…？」「だつてさ、ライアちゃんが風邪ひくのは…嫌だし」「ありがとね…本当にごめんね」「いや、まあ…」「うーん、返す言葉がないなあ…焦ってるからか？」「話は、お風呂出たらにしようか」「はい」まあ色々混乱してたけど、なんとか洗い終えて、体も温めて、僕らはお風呂を出た。

部屋に戻り、タンスから服を出して着る。裸のまま廊下を歩くつてのも、なんか変な感じだったなあ…。「そう言えば、ライアちゃん着るものある？」「あ…ないですね」「じゃあこれ着てなよ」僕は自分のパジャマを渡す。「大きいだろうけど、服乾くまで我慢してね」そういや、ライアちゃんの不思議背中倉庫はどうなつたんだろうか？洗濯しちゃつてたり…？まあいいか。ライアちゃんは渡したパジャマを着る。でかすぎるけど、暖かいならなんでもおーけーだ。「十夜の匂いがします…」「えつと…変な匂いする？」「ううん…とつても温かい匂い」「なんか恥ずかしいなあ…」「やっぱり、色々ふつきれても恥ずかしいものは恥ずかしいんだなあ…」。

「さてと…」まあそんな事はおいといて、ライアちゃんから話を聞かないと。僕は自分の布団に横になる。ライアちゃんも、僕の隣で

横になる。「で、何があつたの?」「…十夜は、私のこと嫌いになつた?」ライアちゃんはすごく寂しそうにそう聞いてくる。「嫌いになんかならないよ…大好きだから」少し恥ずかしいけど、僕は本音を言う。「でも…」「ライアちゃんが何をしても、僕は君が好きだ。この気持ちは変わらない」ただまっすぐに、僕は気持ちを伝える。「ライアちゃんの事が心配なんだ、だから…」そこで、僕は口を止める。だから…何だつて言うんだろう?だから僕は彼女が家を出た理由が知りたいのだろうか?そんなの…昨日と何も変わってないじゃないか。僕はまたライアちゃんに、無理強いさせてしまうところだった。「心配だけど…ライアちゃんが言いたくない理由があるなら、言わなくてもいいよ」何が正しい答えなんだろう。心配すぎるあまりに、言いたくないことを言わせるのが正しいのか?心配していても、無理に追及しないのが正しいのか?どちらも相手を想っていることだけど、全然違う形の愛なんだ。僕には…分からない。少しの沈黙の後、ライアちゃんが口を開く。「…十夜に嫌われたと思ったの。そう思ったら、悲しくて…」「うん…」僕は静かに、彼女の声に耳を傾ける。「私も、自分で何がしたいのか分からなかった。死にたかつたのかもしれない…」「だから、あんな場所に?」「最初は草原にしようと思つたんだけど…あそこは良い思い出があるから」なるほどね…。「十夜にまで嫌われたら…私は居場所をなくしてしまうから…それが怖くて逃げたのかもしれない」僕に、まるで?それに居場所って…?「さつきも言つたけど、絶対に嫌いになんかならないよ。ライアちゃんの居場所は、僕のそばだよ」魔界に帰る事なんて、知つた事じゃない。彼女は魔界にすら、居場所がないのかもしれないね。「十夜のそばにいても、いいの?」「当たり前だよ。むしろ、僕がライアちゃんにいて欲しいと思つてる」「…嬉しいよ」彼女は涙を流しながら、笑っている。僕はそんな彼女を抱きしめる。過去なんて知らない、理由なんて知らない。彼女を守るのに、そんなのは必要ない。それが…分かつた気がした。大切なのは、彼女を愛する心。恥ずかしい事言つてるとか、クサイとか、

言いたきや言えばいい、僕はそれでも変わらない。ライアちゃんが大好きだから。

「ライアちゃん、大好きだよ」抱きしめながらそう言う。「私も十夜が好き…大好き…」

まあそんな感じで、長々と二人で愛を語り合ってたわけなんだけど…。僕にはまだ、疑問が残っている。ライアちゃんのお兄さんが、僕の中にもういないということだ。「ライアちゃん、倒れている時になんか夢を見なかった?」「うーん…見た様な見てない様な…」僕の腕の中で、ライアちゃんは考えている。「よく覚えてないけど、死ぬかな?って思った時に、何か暖かいものに包まれた気がしましたよ」「そっか…」死ぬかな?ではなく、実際にライアちゃんは死んでいた。そんなライアちゃんを助けたのは、彼女のお兄さんだろう。ライアちゃんの代わりに、死んでしまったのだから…元々死んでるんだけどさ。結局彼は、ライアちゃんに会う事なく消滅してしまった。ライアちゃんを悲しませた、罪滅ぼしなのかな?今じゃ、分かる人はいないだろうけど…。「それがどうかしましたか?」「いや、なんでもないよ。今日は疲れたし、もう寝ようか」「そうですわー…風邪ひいてないといいですね」「ライアちゃんが風邪ひいたら、僕にうつして治せばいいよ」「だめですよー、そんな事出来ません」ライアちゃんはプンプンと怒ったふりをする。「はは、寝ようか」僕は電気を消して、布団に戻る。「おやすみ」「おやすみなさい」ライアちゃんを抱きしめたまま、僕は寝る。何回かキスをしたのは、一応秘密だ。

人を好きになるってことは…本当に難しいな。

今日も一日が終わる。

その10〜愛〜(後書き)

展開はえええ…なんて思っても、この二人は幸せそうですね。
十夜も色々考えてるようです。

その11〜初々(ういづい)デート〜

「んー…？モーニング？」ちよつとおしゃれっぽく起きてみた。「今何時かしら？」うわ、上品っぽく喋ってみたら気持ち悪い…。時計を見ると、まだ5時だった。「まだ早いなあ…もつかい寝よう」隣で寝てるライアちゃんを起こさないように、僕は部屋を出てトイレに行く。「起きたらまずは、トイレだよねえ…」ぼへーっとしながら、用を足す。「そういえば最近、してないなあ…」トイレの中で一人呟く。ライアちゃんが家に来るからは、全くしていない。健全な男子としては、少し辛いところである。「さすがに、ライアちゃんに頼むわけにはいかないしなあ…」何をですか？「うわっ！」首だけ後ろに向けて、といつても180度回るわけじゃないけど…とにかく後ろを見ると、そこにライアちゃんがいた。って、えええっ！？「ちよつとライアちゃん！なんでいるの！？」ライアちゃんに叫ぶ。ここはトイレである。鍵は閉めてないから、入ろうと思えば簡単に入れるんだけど…。って、大切なところ出したままじゃん僕！幸い後ろにいるライアちゃんには見えていないので、早々とズボンに隠す。朝だから、ほら…な？大変なんだ。説明しないでも分かってください…。

僕はライアちゃんに向き直る。「何を頼むんですかー？」彼女はのほほんと聞いてくる。ほんの一日ぶりなのに、いつものライアちゃんが懐かしく思えた。「いやいや…それはいいから。なんで入ってきてるのさ！？」びっくりしたよ、どこから聞いてたんだ？「だって…起きたら十夜がないんだもんー」ライアちゃんは抱きついて甘えてくる。「分かった、分かったから！トイレの中はだめ」僕はドギマギしながら、ライアちゃんを引き離す。ライアちゃんも最初に比べると、大分変わったよなあ…そういや来た次の日に、僕の布団の中に入ってきたんだっけか。何も変わってないのかな…？「ぶーぶー」「ブーイングしてもだめ！とりあえず、布団に戻ろう？

まだ朝早いし」ライアちゃんをトイレから出して、僕もその後が続く。僕は大分変わったなあ…強くなれた、彼女のおかげで。

自分の部屋に戻り、布団の中にもぐる。もちろんライアちゃんも一緒だ。「おやすみ」「おやすみなさーい」今日も一日が終わ…はえーって！まだ始まってもないってば！！…最近僕ツッコミ過ぎだな…説明的過ぎだし…。

心の中で愚痴をこぼしながら、僕の意識はとんでいった。

「こけこっこー」ああ、ニワトリが鳴いてるなあ…。ってあれ？ニワトリが鳴くのは5時ぐらいじゃないのか？という事は、さつきから全然時間がたつてないんじゃない？「こけこっこー」目を開けないでいると、おでこをつつかれる。「痛い痛い！何！？ニワトリの来襲か！？」起き上がると、ライアちゃんがいた。ていうか僕のおでこをつついていた。「こけー」「何やってるの、ライアちゃん？」「違いますよ、ニワトリですよー」いやニワトリは喋らないだろ…ツッコミどころが多すぎて、どこからいけばいいのやら。「こけー」もうめんどくさいでの、そう返してみた。「こけーこけー」「こけこけー」「こけこけこけ？」「こけこけこけ？」「こけこけこっこー」「何言ってるんですか？」「いきなり素に戻り、そう言うライアちゃん。すつごく嫌な笑顔だ。僕をからかうのに成功した時は、大抵こういう笑顔になる。「ライアちゃん、人によく悪魔だって言われぬい？」「だって悪魔ですしー」あははー、と笑う彼女。まあ、楽しそうだしいいか。

時計を見ると、もう10時だ。「ご飯にしようか」「はい」僕らは部屋を出て、キッチンへ行く。

「はい、この空白の時間にご飯を食べ終わりました」「何言ってるんですかー？」「いや…そうならいいなあって、こつちの話だから気にしないで」僕はおかずをレンジでチンする。「むー？それにしても、おばさまって本当に家にいませんねー」「まあしょうが

ないよ、働かないと生きていけないし。ほぼ毎日おかずを作ってくれるだけでも、感謝しないと」「なんて言いながら、本当は寂しい十夜だった」「そこ、変なナレーションいれるなって……」まあ、寂しいのは本当だけどさ。

ご飯を食べて、いつも通り後片付け。そして自分の部屋に戻り、机の前のいすに座る。

「暇だねえ」昨日は忙しかったからなあ。「十夜も暇人ですねー」ライアちゃんはいつも通り、机の上に座っている。「あつ、そうだ今日何日だろう」「今日は8月14日ですよー。どうしましたー？」「ライアちゃん良く覚えてるね。いやさあ……二学期から学校復帰しようと思つて」「留年しなきゃいいなあ……。」「おー！十夜がついに、ひきこもり卒業ですねー」嬉しそうにライアちゃんは笑う。「山下の馬鹿とつるむのもの、楽しそうだしね」やれやれ……本当に僕は変わったな。「大変でも、遅れを取り戻してがんばりたいなあ、つてね」今の僕じゃ、ライアちゃんの隣にいる資格はないからね。こんなんじゃ、養つてあげること出来ないから……。「その意気ですよー、大丈夫、十夜なら出来ますよ」「ありがと、ライアちゃんがそう言うつてくれると、自信が湧くよ」「……私も、十夜みたいになりたいな」「うん？僕みたいって……？」伏せ目がちにライアちゃんは言う。「十夜みたいに、辛い現状を受け入れてがんばれる人になりたい」「ライアちゃん……この子は何を言っているんだ？僕を変えたのは、ほかでもない彼女自身だ。僕はライアちゃんを抱き寄せて、顔を近づける。「ライアちゃんに何があつて、今何から逃げているのか僕は知らない。でも、こんな僕を変えたのは、紛れもなくライアちゃん、君だよ？君のおかげで、僕は強くなれたんだ」心からそう思っている。感謝しても、感謝しきれないほどだ。「私は……私は何もしてないよ。十夜が変われたのは、十夜自身の力ですよ」「ライアちゃん、母さんから逃げてた僕を助けてくれたのは誰？山下が来たとき、僕を止めてくれたのは誰？僕が寂しいとき……いつもそばにいてくれたのは、誰？」「……私は弱いから……だめなの、変わることなん

て出来ない！」ライアちゃんは小さい体を震わせている。僕は諭す様に、そんな彼女に優しく言う。「少しずつでいいんじゃないかな？ライアちゃんは一人じゃないよ。僕がいる、僕がいるから……」一呼吸おいて、僕は続ける。「寂しいときはそばにいるよ。不安なときは手をつなごう。悲しいときは僕が慰める。楽しいときは一緒に笑おう、僕はずっとそばにいるよ。少しずつ、強くなればいいんじゃないかな？」でも……僕はライアちゃんの両頬つまみ、左右に伸ばす。「いひやいいひやい……なにひゆるんでふかー」僕は手を放す。「もー！のびちゃったらどうするんですか！？」「ごめんごめん。でも、ライアちゃんは笑っている顔のほうが、かわいいよ」「む……唇を尖らせて、赤くなるライアちゃん。ほんっと、かわいいなあ……」

「まあ、ライアちゃんが弱くても強くても、僕はいいよ。ライアちゃんはライアちゃんだし。そばにいてくれるなら、さ。僕わがままだから」さつきから色々と、照れくさいなあ……。十夜……私だつてわがままですよ。十夜のそばにいないと、不安で死んじゃいます」うわっ！恥ずかしい言葉つて、言われるほうもすっごく恥ずかしい！きつと耳まで赤くなっているだろう。「今後とも、よろしくね」「私も、よろしくですよー」まあ難しい話なんて、しててもきりがないしね。僕は僕に出来ることを、彼女にしてあげればいいや。

「さーて、じゃあ何しよつか？」「そうだな、俺は遊園地に行きたいな」「いやさ……なんでお前が当たり前のように僕の部屋にいるんだよ！どこから入ってきた！？」「もちろん玄関からだ、鍵は閉めないと危ないぞ」「そういう問題じゃねー！」僕はいつといるとマイペースが乱される。誰かって？山下だよ山下……。マコツチさんこんにちはー」「お、来亜ちゃんこんにちは。おじやましてるよ」「ここは僕の部屋だぼけー」ああ、誰かこいつを何とかしてくれ……。で、何の用だよ？」「遊園地行こうぜ」「はあ？寝言は寝てから言えよ」「もう十夜つてば……私は遊園地行つてみたいな」「ほ

ら、ライアちゃんもそう言ってるぞ」「うぐ…」「ライアちゃんに頼まれるのには、弱い。「ねえ十夜、行こうよー」「…分かったよ」僕はしぶしぶと承諾する。時計を見ると、11時30分だ。まあ今からいつても、結構遊べるだろう。「じゃあ私もついていこうかしら」「ドアを開けて入ってきたのは、母さんだった。「え？ていうか仕事は？ていうか立ち聞きしてたのかよ！？」ああ…何これ？オールスター夢の共演？なんでいきなりみんな集まってきたの…？」「お、お姉さんきれいですね。良ければ俺とデートを…」「あら、お姉さんだなんて。私これでも 歳なのよ？」「ちよつとちよつと、ピーって何？なんでそこ伏せられてんのさ！」「おばさまそうだったんですかー？私はずきり三十いてないものだ…」「三十いてないって、僕今年で十六だよ！って母さんも喜んでんじゃねー！」「何！？十夜のお母様だったのか！初めまして、俺山下誠って言います」「こいついつの間にか十夜って呼ぶように…ていうか誰か助けて…ツッコミが足りないよ…」。

「あらあら、私は稲子っていうの。十夜がお世話になってるわね」お世話されてねーよ！「ええ、十夜にはよく手を焼かされますよ」「十夜はそんなことないですよー、ね、十夜？」「どうなの、十夜？」「…ははは。「お前ら！少し黙れ！！」さすがにキレた。ツッコミ足りないし、話進まないし。「十夜…やっぱり私が邪魔なのね」「泣かないでくださいよ稲子さん…十夜！お前って奴は！」「十夜ー、やっぱり私のこと嫌いなのね…」「え？何これ？僕が悪いの？ちよつと誰か…誰か助けて…。「お前にライアを任せたのは失敗だったな」「なんであんたまでいるんだ！？」「十夜、父さんはお前をそんな子に育てた覚えはないぞ！」「父さんまで！？」ああ…もう何がなにやら…ここまで引っ張って、今日の出来事が夢才チだったら…あいつ殺す。絶対に殺してやるからな、！って伏字にしかならねー！

「うわああっ！」「はっ？…夢？」「十夜？どうしたんですかー？」「机

の上に、ライアちゃんが座っていた。「いや…かなり嫌な夢を」「大丈夫ですか？すごい汗かいてますけど…」「うん、ありがと。大丈夫だから…」どうやら僕は、いすに座ったまま寝ていたらしい。ライアちゃんが言うには、30分ぐらい寝ていたらしいのだけど…。「びつくりしましたよー。話し終えて、何しよつか？って言った途端に寝ちゃうんですから」彼女は少し怒り気味だ。というか、すねてる…？僕が寝てる間、一人で暇だったのだろう。「起こしてくればよかったのに」「だって…昨日のことで疲れてるんだと思ったから…」ライアちゃんは、落ち込んでしまう。「ごめんごめん。そうだ、遊園地行かない？」時間はまだ12時、自転車で30分ぐらの場所にあるから、まだ余裕で遊べる。山下もたまには役に立つじゃないか、夢の中だけどね。「いいですねー」ライアちゃんは一転して笑顔になった。「私、遊園地なんて小さい頃以来ですよー」はしゃいでいるのが、目に見えて分かる。今でも小さいけどね…。「じゃあ行こうか」僕はパジャマから外着に着替える。ライアちゃんの服は昨日のうちに部屋に干してあるので、もう乾いてるはずだ。「デートデート、十夜とデート」はしゃぎながらライアちゃんも着替える。ていうか、デート？周りから見たら、中の良い兄妹だろうな…。まあ、お互い好きあつてるなら、これは間違いなくデートだろう。僕は引き出しからお金を取り出す。あんまり無駄遣いをしてないので、お年玉やらなんやら結構たまつてたりする。自分で稼いだお金じゃないから、少し嫌だけど。まあしょうがない。「さーて、行こうか」僕だつてはしゃいでるさ。初めてのデートだから、ね！家を出てしつかりと戸締りをする。財布があるかちゃんと確認。「忘れ物なし、行こうかー」「はい」僕らは元気良く自転車に乗った。ライアちゃんを後ろに乗せて、太陽がじりじりと照らす中、僕は自転車をこぎ出した。

「暑いねえ…」自転車をこぎながら、僕はそうぼやく。「十夜、何十回同じこと言ってるんですかー」「いや、そんなには言っていない

んじゃないかな…」まあ、家を出てからもう30分になる。その間に何回言ったのかなんて、覚えてないからなあ。「そんな事より、もう着くよ」今走ってる坂を登れば、見えてくるはずだ。「十夜ー、ラストスパートですよー。がんばって!」「おっし、任せて!」今までの道のりで結構足が疲れてるけど、ライアちゃんに応援されたらがんばるしかない!僕は立ちこぎで、一気に坂を登りきる。「あ、見えましたよー」見えたといっても、坂を登りきってしまったらもう目の前にある。「ぜえーぜえー…」さすがに…後ろが軽いいえ、二人乗りダッシュはきついなあ。「十夜、おつかれさまー」「ありがと。ライアちゃんこそ、大丈夫?」僕の自転車の後ろは、カゴなどがついていないので、長時間座っていると尻が痛くなるのだ。「私は平気ですよー、早く行きましょー」とつてもはしゃいでるライアちゃん。元気そうで良かった良かった。

僕は自転車を駐輪場に止めて、ライアちゃんと入場口に向かう。「たくさん遊びますよー」「僕も久しぶりに、はっちゃけるかなー」入場口で子ども用のフリーパス(600円)と大人用のフリーパス(1200円)を買って、僕らは中に走っていった。

「ううう…」「あー、そりゃそうだよねえ」少し遊園地内をまわると、ライアちゃんは落ち込んでいた。「絶叫系に乗れないなんて…あんまりですよー」「身長制限あるの、忘れてたなあ」「この絶叫系は130センチからである。ライアちゃんは80センチしかないのです、到底無理な話だった。」「80センチじゃないですよー…83センチありますよー」「勝手に人の説明をよまないの…まあ諦めて、違うの乗ろうよ」ライアちゃんの語尾が、「よー」から「よう」になってる辺り切実だった。

ライアちゃんは肩を落としながら呟く。「絶叫系のない遊園地なんて…カスタードの入ってないシュークリームと一緒にですよ!」むしろ後半は叫んでる。「それは単なる…なんだろう?シュー?」実際に中身入ってないシュークリームってなんて言うんだろう…ってどう

でもいいか。「むしろライアちゃんさ、絶叫系乗ったことあるの？」普通に考えれば、ないだろう。まあでも魔界はどうだか分からないからなあ…。「ありますよー。縦に一周するジェットコースターとか、上がって落ちるやつとか…」「へー、魔界って身長制限ないんだね」「いえ、ありますよー」さらっと言っライアちゃん。「えっ？じゃあどうやって…？」「もちろん隠れて乗ってたに決まってるじゃないですかー」なんか目輝かせてとんでもない事言ってないか？「魔界の遊園地って、どれだけ管理ずばらなんだ」「死人、いや死悪魔が出そうだな…」。

「うー…絶叫系…」少したつとすぐに肩を落としてしまうライアちゃん。とりあえず空気を変えないと…。「遊園地といえば、回るコーヒーカップだよ！」そんなことはないか思いながら、近くにあるコーヒーカップを指差す。「乗ってみましょうかー」おお、なんとかなった。

数分後、僕はベンチでぐったりとしていた。「十夜、大丈夫？」ライアちゃんは隣に座り、僕の背中をさすってくれる。「大丈夫…うつ…」吐き気を我慢して、なんとか胃を落ち着かせる。「ごめんね、回しすぎちゃった…」さっきの光景が頭に戻ってくる。「さすがに…あれは無理」周りの風景がぐにやりと歪むぐらいに、ライアちゃんもコーヒーカップを回した。みんな知ってると思うけど、真ん中にある皿みたいな物を回すと、自分が乗ってるカップの回転速度が上がるんだ。回しすぎると、僕みたいに…「うつ…」ライアちゃんも心配そうに顔を覗き込み、背中をさすってくれる。「ライアちゃん…よく平気だね？」「私は、慣れてますからー」何に？なんて聞く余裕も、今の僕にはない…。

結局、回復したのはそれから数分後の事だった。「次は何に乗る？メリーゴーランドとか観覧車とか、お化け屋敷もあるね」「お化け屋敷は嫌ですよー、怖いのは苦手です…」そういえばそうだった。なら尚更…「お化け屋敷にしようか」僕はライアちゃんの手を引いて、お化け屋敷の前に行こうとする。「十夜！お願いだからやめて

「そんなに怖がらないでも…作り物だから平気だよ」「ほんとに…ほんとに怖いのが苦手なんですよー！」目の端に涙を浮かべ、首を横に振るライアちゃん。「うーん…」もう少しいじめたいけど、さすがに怒りそうだからやめとくか。「しょうがないなあ…メリーゴーランドでも乗ろうか」「それなら、いいですよー」ほっとして、一転元気になる彼女。そんなにお化けが苦手なのか…悪魔なのになあ。

僕らはメリーゴーランド…名前長いからメリゴでいいや。メリゴに乗った。一つの馬に、二人で乗るといふ僕的に恥ずかしいことをやった…。ライアちゃんはすごく喜んでたけどね。だからって…「五回も乗らなくても…」「フリーパスなんだから、乗らないと損ですよー」「そうだけどさー…少し恥ずかしいって」周りから見たら兄妹に見えるだろうけど、僕からしたらライアちゃんは恋人みたいなもんだし…なんか気恥ずかしい。「楽しければいいですよー」「まあ、そうだね」少し恥ずかしいけど、彼女との時間は楽しい。「次は観覧車乗る？」メリゴも飽きたので、僕らは次の乗り物を探した。「観覧車は、夕方に乗るのがいいですよー」「ドラマチックだねえ」時間はまだ3時、夏なので陽はまだ落ちない。「といっても、他に何かあるかな?」「乗るだけが、デートじゃないですよ」「ライアちゃんは僕の手を握って、体を寄せてくる。「えっ?」「こっやって歩くだけでも、デートっぽくなりますよ」「え、えーと…」手をつなぐのは初めてじゃないし、体を寄せ合うのも初めてじゃない。むしろ裸すら見たことのある仲だけど…なんだかすごくドキドキした。顔が赤くなるのが分かる。「十夜、照れてます?」それを察したのか、ライアちゃんはそう聞いてくる。彼女の顔はすごくにこやかだった。「なんか、照れくさい…今更なのにね」「私だって、ちよつと照れてますよー」あはは、と笑う彼女。なんだろう、ほんとにドキドキが止まらない。「こっやって二人で歩いてると、バカッブルに見えるかな?」「見えないとは思いますがねー。でも、私たちはラブラブですよー」「ラブラブかー」自然と顔はに

やけてしまふ。だって、幸せだからさ。

そんな風に寄り添って、遊園地を歩いていた。気づけば、時間は4時をまわっていた。「時間たつの早いなあ」「ほんとですねー」何かをするわけでもなく、ただ遊園地内を二人で歩いているだけ。それでも、デートという意識を持つだけで、全然何かが違っていた。楽しそうに笑っている家族がいた。楽しそうに笑っている恋人がいた。そして今、楽しく笑っている、僕たちがいる。

「もうそろそろ、観覧車乗ろうか?」「そうですねー、帰りが遅くなっちゃいますし」陽は少しずつ傾いている、でもまだ夕方というほどではない。「行こっか」「はい」僕は観覧車に乗り込んだ。少しづつ高度が上がっていく。「今日は人が少なくて、順番待ちとかなくて良かったね」隣に座っているライアちゃんに話しかける。

「そうですねー、お昼からだったから、混んでたら時間危なかったですね」「だねー」少しづつ少しづつ、観覧車は高くなっていく。

「ライアちゃんは、高いところ平気なの?」「高いところは好きですよー、見晴らしがいいですからー。十夜?」「僕も好きだよ。ほら、煙となんとやらは高いところが好きってね」「なるほどー」「いや…そこは納得しないでツツコンですよ」そんな話をしている間に、僕らが一番高いところに来た。「うわー…きれいですよー」ライアちゃんは喜びの声をあげている。ドラマとか漫画ならここで、「君のほづがきれいだよ」とか言うんだらうけど、さすがに恥ずかしくて僕には言えない。「もー…十夜っては何言ってるんですか」ライアちゃんが赤くなっていた。ああ…つい口に出してみたんだ…まじ恥ずかしい…。でも、ほんとだから「後にはひけないので、開き直ってみた。」「馬鹿…」ライアちゃんは赤くなって、僕を見ている。「ライアちゃん…」「十夜…」ドキドキする胸を抑えて、僕は彼女にキスをする。何回もキスをしてきたけど、こんなにドキドキしたのは今日が初めてだらう。ライアちゃんも多分、僕と同じ気持ちだらう。僕は寄り添って、下に降りるのを待った。観覧車から出るまで、僕の胸はずっと高鳴りっぱなしだった。

「帰ろつか」「うん」名残惜しいけど、まあいつでもこれるしね。僕らは自転車に乗って、来た道を帰っていく。夕日が僕らを赤く照らしていた。

「疲れましたー」ライアちゃんは相変わらず、部屋に戻ってくるとお決まりのセリフを言う。「僕も回りすぎで疲れたよ……」思い出すと、頭がくらくらする。「ごめんねー」ライアちゃんは笑いながら謝る。「楽しかったからおーけーだね」「ですねー」「さて、もう寝る？」夕食は、実は帰り道に済ませてあつたりするんだ。時間は7時、寝るにはまだかなり早い時間だ。「んー…最近夜の散歩に出てませんねー」「行く？」「行きましようかー。でもその前に、お風呂に入ってきてますね」「うん、じゃあ部屋で待ってるよ」「ライアちゃんは部屋を出て、ドアの間隙から顔を出して言う。「覗いちゃだめですよー？」「今更じゃない？まあ覗いたりはしないよ、覗くぐらいなら一緒に入るし」「それもそうですねー」あははー、笑いながら彼女はお風呂場に行った。「さて、本でも読むか」てきとーに小説を引っ張り出して、僕は布団の上に寝っ転がって本を読み始めた。

ライアちゃんが部屋に来たのは、30分ぐらいたってからだった。「行きましょー」「うん」僕は本を閉じて、元の場所に戻す。家を出て、戸締りをしっかりしてから、僕らはいつもの散歩コースを歩く。「これも、デートって言うのかな？」「手をつなぎながら、僕らはのんびりと歩いている。夜空ではきれいな星たちが語り合い、地上では虫たちが話し合っている。「デートって感じじゃないですよー、楽しいですけどね」「僕もそう思う、違いはなさそうなのね」「難しく考えることもないと思いますよー、楽しいならいいんですよ」「まあね、難しいことは学者にでも任せればいいさ」なんて学者なんだろう？まあなんとなく言っただけなんだけどね。それから僕らは、少しの間話さないうちを歩いた。なんでかは、わから

ない。「十夜…」不意に、ライアちゃんが僕の名前を呼ぶ。「ん？」
「明日、私のこと話してもいい？十夜には聞いてほしいの」「もち
ろんいいよ、今でもかまわないけど…」「んーん、明日ね。怒らな
いで、ね？」ライアちゃんは僕を見上げている。彼女の強いまなざ
しが、彼女の強さを表していた。「怒らないよ、どんな事でもね」
むしろ嬉しい、ライアちゃんがやっと自分のことを話してくれるの
だから。「きつと、怒って火を吹いたりしますよー」「僕は怪獣か
…目からビームぐらいは出るかもよ？」「その時はその時ですよー」
いや、そんな時はこないだろうけどさ。
まあそんな風に面白おかしく話しながら、僕らは家に着いた。部屋
に戻り、パジャマに着替えて布団にもぐる。もちろんライアちゃん
も一緒だ。「それじゃ、おやすみ」「おやすみなさーい」僕は電気
を消す。

長い一日が、やっと終わる。

その111〜初々(ういづい)デート〜(後書き)

実は大っぴらにデートするのは初めての二人。
すっごく初々しい感じがするんですねえ

真実

「十夜ー朝ですよー」ペチペチと頬をはたかれる。「んー…？」ライアちゃんが

、僕を起こしてる様だ。「もう少し…」「うーん…もう少し寝たい。「早く起き

ないと…十夜のエツチな本音読しますよ？」「起きます起きます」僕は勢いよく

起き上がる。聞いてみたいけど、さすがに…ね。時計を見ると、1時だった。結

構遅く起きたなあ…。「おはようございますー」「おはよう。朝から、起こし方

がすさまじいね」「十夜を朝起こすのは、楽しいですからねー」からかって楽し

い、っていう意味だろうなあ。「ライアちゃんも、今起きたの？」「そうですよ

ー、少し寝過ぎました」まあ、昨日は遊び疲れたからしょうがないか…。

僕は立ち上がり、机の前のいすに座る。もちろんライアちゃんは、机の上に座る

。「昨日言ったよね？ライアちゃんの事話してくれるって」少しだけマジな顔を

してみる。「はい…怒らないでくださいね」ライアちゃんも少しマジな顔をして

いた。「まあ、気楽にいこうか…シリアス顔は疲れるからさ」別に顔がシリアス

になるわけでもないけど…僕は笑顔で言う。「何があっても怒らないから、さ」

顔は笑っていても、これは本音。「うん、朝から張り詰めてると、

大変ですから

ね」少しだけ顔はゆるんだけど、話し方はあんまりゆるんではない。」「えと…

どこから話せばいいかな？」ライアちゃんは、右手を頭に当てて考える。「時間

はあるから、ゆっくりと焦らないでいこうよ」「まあ実際のところ、彼女の話を早

く聞きたくてウズウズしてるんだけど…。ライアちゃんは一度だけ深呼吸して、

話し始める。「実はですね…課題なんて、嘘です」「ああ、やつぱりそうなんだ

」なんとなくそれは分かっていた。殺すと言ったり、殺さないと言ったり、結構

矛盾な点が多かったからね。でも分からないのは…「じゃあ、なんで僕のところ

に来たの？」ライア

ちゃんのお兄さんがいるからって線も考えたけど、彼女はそれを知ってなかった

から、僕には来た理由が分からなかった。」「…家出してきたんです」「家出？」

「うん…家にいたくなかったから」そりゃ、家にいたくなかったら家出をすれば

いいだけなんだけど…「家出をした理由は？」「私はね…いらん子だから」ラ

イアちゃんはうつむいている。声が少し震えているから、泣きそうなんだろう。

それでも彼女は、言葉を続ける。「兄がいるって話は、しましたよね？」「うん

…」死んでしまった事も、聞いた。「兄はとても優秀でした…。私のパパとママ

はね、どちらも公務員で仕事人間なんですよ」「へえ…」仕事人間か…うちの母
さんもだけど、きっとライアちゃんも寂しい思いをしたんだろうな
あ…。「パパ
とママは、兄にすごく期待していました。やっぱり自分の子どもに
は、自分と同
じ道に行ってほしいんですよ…」そういえば、中学生の時の友達
に、親が公務
員のやつがいたけど、親がすごく厳しいってよく愚痴ってってけ、
ライアちゃん
たちもそうだったのだろう。「兄は優秀でしたけど、私はおちこぼ
れですから…
パパとママは私には
期待なんてしてませんでした」「そうなんだ…」子どもにとって、
それはとても
辛い事だろう。僕は期待されるのは嫌いだけど、さ。「兄が生きて
いた時は良か
ったんです…私にもパパとママは優しくかったから…でも」顔は見え
ない、でもす
ごく辛そうなのは分かる。「兄が死んでからは、パパとママは私を
兄の代わりに
しようとなりました」「辛いね…」言葉では言えても、彼女の辛さを
僕は理解して
あげる事は出来ないだろう。彼女の辛さは、僕の想像の域を超えて
いるのだろう
から…。「兄が死んでから、パパとママが私に笑いかけてくれた事
は、一回もあ
りません…」「…」僕には、何も言えなかった。「辛かったですよ
…でも何より
も辛かったのは…」僕はこの後の言葉に、自分の耳を疑った。「パ

パとママは、
兄が死んでも涙一つ見せませんでした。悲しみを我慢してるわけじゃないんです
…本当に悲しんでいなかったんですよ」そんな…馬鹿な事があっていいの？」
パパとママは言っていました…兄が、あんなにくだらない悪魔だとは思わなかった
、期待して損した、あんな出来損ない…もういらなくて…」ライアちゃんは、
泣いていた。机の上
に涙が落ちる。「私は…優しい兄が好きでした…だから…死んで悲しかったのに
…パパとママは…顔色一つ変えずに…私を代わりに…しようと」「
ライアちゃん
…辛かったね」僕は、震えて泣いている彼女を抱き締めた。「十夜
…私は、いら
ない子なの？パパとママにとって…私たちは…なんだったの!？」
泣きながら、
叫ぶ様にライアちゃんは言う。「もういいよ…もう何も言わないで
…ライアちゃ
んも、お兄さんも、いらない子なんかじゃないよ」こんな…こんな
事があってい
いのだろうか？悪魔だから？違う…人間にだってきつとそういう奴
等はいらる
う。なんで彼女が、こんなに悲しまないといけないんだ？ライアち
ゃんが、何を
したって言うんだよ？誰か答えてくれよ…答えるよ！

ライアちゃんが落ち着いたのは、十数分してからだった。

「ごめんね…気持ちが高ぶっちゃって」落ち着いても、僕は彼女を

抱き締めたま

まだだった。「んーん、怒りたかったら怒ればいい、悲しかったら泣けばいい。僕

がそばにいるから、さ」正直、僕だってかなりイライラする話だった。「もしか

してさ、ライアちゃんのお兄さんって自殺？」話を聞いてる中で、そこが気にな

った。「うん…手首を切って」ああ…だからライアちゃんは、自傷行為をあんな

にも嫌がるのか。「兄が何回も手首を切ってるのを、私は知ってたの…でも止め

る事が出来なかった…だから、兄が死んだのは私の…」「ライアちゃんのせいな

んかじゃないよ！」僕は彼女の言葉を遮って、続ける。「悪いのは、そこまで追

い込んだ奴等でしょ？ライアちゃんは、悪くない」ああ、彼女は悪くなんかない

。「十夜：怒った？嘘ついてた事」抱き締めているので、表情は見えない。でも、

きつとライアちゃんは怯えた顔をしているだろうな。「怒ったかな」…「ごめん

なさい」「嘘ついた事に対して、僕が怒ると思ってたライアちゃんに怒ったよ」

僕はライアちゃんを机の上に座らせ、顔を近付ける。「もっと信頼してほしい」

少し前に顔を動かすだけで、唇が触れてしまいそうな位置で僕は続ける。「ライ

アちゃんが好きだから、ね」「うん…私も十夜が好きだから、がんばるね」そこ

まで顔を近付けてキスをしないまま、僕は立ち上がる。「ご飯にしようか」「十夜：キスしないんですね」「してほしかった?」「いや、僕もしたかったんだけどさ。たまには、予想外の行動もありかなってね。「してほしいですよ」「ライアちゃん：そこまでストレートに言われると、すっごく恥ずかしい」「私だって…」

恥ずかしいに決まってるじゃないですか」「あーあ、二人してこんなに真っ赤になつて、僕らは何やってるんだろうっね?」

僕らは部屋を出て、キッチンにご飯を食べに行く。キス?もちろんしたよ、ていうかそんな事聞くなよ、恥ずかしいだろ!? えっ? 聞いてないって… そりゃ失礼しました。

なんて一人内部コントをやりながら、おかずをレンジでチンする。「いい加減、

このご飯の説明シーンやめない?」「誰に聞いてるんですか?」

「うーん… 分かりますよ」と、天の人かな」「全然分からないですよー!」「ごめんごめん

、ちよつとシリアスが長かったから、ふざけてるだけ」「もー!」そんなやり取りをしながら、ご飯を食べて後片付け。

部屋に戻り、布団の上に横になる。ライアちゃんも、僕の隣に横になる。「そう

いえばさ、僕のところに来たのは、偶然なのかな?」「偶然… なんですかねー?」

「偶然のわりには、なんか出来過ぎてる気がする。ライアちゃんのお兄さんが、

彼女を呼んだのかな？」「だったら…それは必然か」「必然ですか？」「ならない

なって、ね。運命の出会いって言うと、なんか良くない？」「運命ですか…少

し恥ずかしいですね」「少し赤くなる彼女。」「まあ運命でも偶然でも、ライアちゃ

んに出会えて良かったよ」「最近、恥ずかしいセリフ言いまくりの様な気がする…

。「私も、十夜に出会えて良かったですよ」「恥ずかしいやり取りの中、ツツコミ
がないまま僕らは見つめ合っていた。

「そうでした…今まで、偉そうな事言っでごめんね」「いきなりライアちゃんが口
を開く。「私には…十夜をしかる権利なんてないのに」「ライアちゃん

が言ったから、僕は変わったんだけどね…何より、僕の事心配して言
ってくれたの

が嬉しいよ」「そう言ってもらえると、すごく助かりますよ」「ライアちゃん

は、笑顔になる。「そういえばさ、家出てきたって事は、もう家には
帰らないの？

」「僕としては、ずっと家にいてほしい。」「いつか、帰りますよ。決心
ががついたら

ですけどね…」「なんとなく、その決心がつくのは近い未来の様な気が
した。」「い

つまでも、逃げてられませんか」「ライアちゃんは、強いなあ」「
強くなんて

、ないですよ」「強いよ、僕がライアちゃんの立場だったら。きつ

とお兄さんみ
たいに、自殺に追い込まれてたと思う」「間違いなく、そうなるだろ
う。ライアち
ゃん比べたら、僕は小さい悩みで逃げ出したのだから…。」「ほんと
は、帰る気な
んてなかったんですよ…。でも、十夜ががんばるなら、私もがんばら
ないと思って思
って…。」「なんだ、結局僕らは支え合っていたのだ。「ライアちゃん
と離れるのは
、辛いなあ」「私だ
って辛いですよ…。？でも悲しい別れがあるから、楽しい出会いがあ
るんですよ」
「詩人みたいだね」「もう、茶かさないてくださいよ」「…分かつ
てるよ、でも
分かっていたって、どうにも出来ない気持ちはあるさ」「ほんとにさ
…ほんとに…
辛いから。「十夜…悲しい話はやめにして、遊びませんか？話して
いても、どう
にも出来ないんですから」「そうだね、何する？」「しりとりでも
しますかー？
」「えっ？二人で？」「楽しいのか…？」「じゃあ、馬鹿から始めまし
よう。十夜、
か、ですよ」「あー…かば」「馬鹿」「かば」「ああ…何がやりたい
のか大体分か
った。「馬鹿」「かば」「馬鹿」「かば」「ドジ」「ってなんか変
なの混じって
るし！」「あ、十夜の負けですよー」「えっ？僕負けてるの？ライア
ちゃん仕様？
そりゃ勝てないわ…。」「負けた方は、一日サンドバッグに…」「い
やいやいや！

死ぬって！絶対死ぬって！」「優しくしますよ？」「そんな笑顔で言ってもだめ

！っていうかなんか言葉がエロいって！」「あー…日常って感じだよなあ…こんな日

常いやだあ…。「もう十夜ってば！わがままはだめですよー」「相変わらず逆ギレ

なライアちゃん。」「

はあ…楽しい？」「すっごく」「まあ、僕も楽しいし、これはこれでありか。

まあそんな風に二人で漫才(?)やっていると、時間はすごいスピードで流れていった。

「うわ…もう12時過ぎてんじゃん」前も言ったけど、僕の部屋は濃い色のカーテ

ンかかっているから、外が見えないんだよね。「ええ！？もうそんな時間なんです

か…」「さすがに、僕もびっくりしたよ」恐るべしライアちゃん空気が、全てを流

せるな…。「お腹、すいてる？」「私は、すいてないですよー」「じゃあ、散歩

行こうか」「はい」

僕らは家を出た。もちろん戸締まりはおーけーだ。

僕らはいつもの散歩コースを歩いている。今日は雲が出ているので、星は見えない

い。「そういえばさ」「はい？」「ライアちゃんは、隣を歩く僕を見上げる。」「ラ

イアちゃん卵から出て来たよね？あれ割ったらどうなったの？」「気になっ

いたんだけど、ついつい聞くのを忘れてたんだよなあ…。「んーと
ですねー…あ
れ？なんでしたっけ…」むー、とうなりながら真剣に考え始める彼
女。もちろん
右手は頭に当てている。「相変わらずだね…」最近はこの天然つぶ
りもなかった
気がするなあ…気が抜けたのかな？「そうでした！」ライアちゃん
はポンと手を
打つ。「卵から出て来るわけじゃないので、割れても平気なんです
よー」「え？
「確か卵から出て来たと思うんだけど…。「正確に言うんですけど、
あの卵が孵
化した時点で、魔界にいる私があそこに空間移動するんですよ」「
はい？」「ライ
アちゃんが難しい事を…。「要するに、卵を壊しても私が死ぬわけ
じゃないって
事ですよー」「なるほどねえ」細かい説明は分からなかったけど、
簡単に言うと
そういう事か。「卵が壊されても、また魔界から送ればいいんです
し」「ふーん
…」何回でも出来る
って事か。「実は、卵使わないでもこっちに来れるんですけどねー」
「あれ？そ
うなんだ…」じゃあなんで、彼女は卵を使ったのだろうか？「そう
ですよー。卵
を使った理由は、どうせなら優しい人のところに行きたいじゃない
ですか」「優
しい人？」「卵を拾って孵化させる人は、きっと優しいんですよー」
そうかなあ
？少なくとも僕は…「十夜は優しいよー」相変わらず、鋭い子だな。

「優しいっ

ていうか、好奇心旺盛なだけさ」そりゃ誰だって、ダチヨウの卵み
たいなの落ち

てたら孵化させたくなるよね？「そうですかー？十夜は優しいと思
うけど…」

ライアちゃんにだけ、ね」山下には優しいどころか、口調まで厳し
いしね。まあ

悪友みたいなものだからなあ…。「そう言われると、なんだか照れ
ちやいますね

「少し顔を赤くする彼女。ほんつつと、かわいいんだよね。」「ま
あ人間の優し

さなんて、下心重視だと思っけどね」少なくとも僕はそう思う、ど
うも人間不信

の気持ちは消えないんだよなあ…。「たとえ下心重視の優しさでも、
誰かを喜ば

せられるなら、それでいいんじゃないですか？「はあ…ライアちゃ
んが僕にはま

ぶしく見えるよ。」「
ほら、よく言っじゃないですか。しない善より、する偽善って」「

いや、僕それ
聞いた事ない…」僕が知らないだけなのかな？「まあでも確かに、

そうかもね」
どこからどこまでが善で、どこからどこまでが偽善なのか僕には分

からないけど
、行動する方が良いつて事かなあ。

「十夜ー」20分ぐらい歩いた時に、ライアちゃんがいきなり「お
んぶ！」とか叫

んだ。「はい？いや別にいいけどさ…なんで？」「理由がなきゃ…
だめ？」「この

ね…大人っぽくなったライアちゃんがさ、甘えて来るのは反則だと

思う。「だめじゃない、うん、全然だめじゃないよ」「良かったー」僕はしゃがんで、ライアちゃんを背中に乗せる。ライアちゃんの無い胸が僕の背中に当たるが、無いので感覚が分からない。ただ、鼓動が背中に伝わって来るから、かなり僕もドキドキした。「行こっか」ライアちゃんから返事はなかった。「ぐー…」つて寝てんのかよ!？「おーい」小さく呼んでみるが、やっぱり返事はなかった。「そんなに眠かったのか…」家まであんまりないとはいえ、久しぶりに一人の散歩を味わいながら、僕は家に帰った。

「いや実際さ…話し相手がないのが、まさか結構きついなんて…」最近ライアちゃんがいるのに慣れてるからなあ…まあそれでも一人言は減らないんだけど。

僕はライアちゃんを布団におろし、部屋の電気を消して僕も布団の中に入った。暗闇の中、僕はいろいろ考えていた。ライアちゃんの事、お兄さんの事、ライアちゃんの両親の事。ライアちゃんには悪いけど、彼女の両親の事を考えた時は胸くそ悪かった。「自分の子どもは、道具みたいなもん…か」都合のいい様に育てて、だめならすぐに切り捨てる。ライアちゃんのお兄さんの性格が悪かったのは

、そこら辺に理由があるのかもなあ…まあそれでもライアちゃんに優しい辺り、

僕に似ているけどね。

ふと、ライアちゃんの名前について考えた。「ライア…英語で嘘って意味だった

かな？」今までの彼女は、名前通り嘘をついて生きて来たのかもしれない。親の

期待にこたえるために…。「なんて、僕は何を勝手につじつま合わせをしてるん

だろ…」彼女の名前と人生が一緒なのは、きっと偶然だろう。「でも…偶然でも

なんでも、ライアちゃんは苦しんで生きて来たんだ…だから僕が、守りたい。嘘

を、本当出来る様に」彼女が自分に嘘をつかなくてもいい様に…。僕の一人言

は、全て暗闇に飲み込まれていった。そして僕の意識も、自然と夢に飲み込まれ

ていった。

今日も一日が終わる。

真実（後書き）

いつまで凍結させてんだ・・・という罵倒の気持ちを抱いたら、容赦なく文句言っただけでくださいorz

とりあえず続きを全部あげるか、という主旨の元、これまでの悪魔来は、携帯で書く PCに飛ばして推敲（誤字脱字直し） 投稿、という手順を踏んでいましたが、これ以降は携帯で書いたものをそのままPCから投稿します。

要するにおそろしいことになってます。でもまあ、一応最後まで書いてあるんで、読んでいただければ幸いです。

悪魔と天使と

久しぶりに、夢を見ている。久しぶりって言っても、最近忙しかつたからそう思

うだけなんだろう。これが夢の中なんだ、って自分で分かっている夢だった。

その夢の中には、母さんと…死んだ父さんがいた。母さんが若かいから、きつと

何年も前なのだろう。「ていうか、夢の中なんだから月日なんて関係ないのかな

？」おお、一人言も言える。

母さんと父さんが、何かを話している。僕は近くに寄って、耳を傾けた。二人に

は、僕の姿は見てない様だ。「当たり前か」まあ今は、話を聞こう。

「稲子、こんな俺でいいのか？」「あなたなら、私はかまわない」そう言っ

て、母さんが父さんに抱き付く。うわー…なんで僕が二人のラブシーンを夢に見なき

やならないんだ？そんな事を考えていたら、次の言葉を聞き逃すところだった。

「俺は…人間じゃないんだぞ？」えっ？「あなたが悪魔でも…私はあなたじゃな

いとだめなの！」悪魔？二人は何を言ってるんだ？それから二人は何も言わないまま、ただ抱き合っていた。

これは夢だ、自分でも分かっている。なのに…なんでこんなに気になるんだろうか

？

「うーん…変な夢見たなあ」「起き上がり、目をシパシパさせる。」「夢のわりには

、鮮明に覚えてるし…」「まあしょせんは夢なんだろうけど…ていうかもしあれが

現実にあつた事なら、僕はさすがに笑っちゃうな。

軽く気持ちを切り替え、時計を見る。時間は9時だ。「まあ、起きるか」ていうか

、寝る気が起きなかった。変な夢恐るべし…。

隣で寝ているライアちゃんの顔をつつく。「朝だよ」「むー…」相変わらず

ライアちゃんの頬は柔らかい。だからつい、つつきたくなる。「おーい」「に

むー…」「んー、なかなか起きないなあ。「まあ、無理やり起こすのもかわいそう

かな」「僕はつつくのをやめて、立ち上がる。聞きたい事あったんだけど…まあ

起きたらでいつか。

部屋を出て、まずはトイレに行く。トイレを済ませて、母さんの部屋へ。「いる

かな?」「ドアをノック、返事はない。更に五回ぐらいノックしても、返事はなか

った。「帰って来てないか…」「しょうがないか…部屋に戻って時間つぶすかな。

部屋に戻ると、ライアちゃんが起きていた。「あ、十夜おはようございますー」

「おはよう」「僕が机の前のいすに座ると、ライアちゃんは机の上に座った。まあ

、いつも通りだね。「どうしたんですかー?何か釈然としない顔してますけど」

ライアちゃんが顔を覗き込んで聞いて来る。相変わらず、鋭い子だ

よなあ…。」

少し、変な夢を見たからねえ…。そうだ、ライアちゃんさ」「はいー？」「人間と悪魔の違いって、簡単に見分けつく？」「えーと…。外見で？それとも内面で？」

「どつちでもかわまないよ」「そうですねー…。」「ライアちゃんは右手を頭に当てて、考える。「羽は隠してれば分からないですしー…。尻尾も隠せるんですよねー」

…。」「外見じゃ分からないかなあ？」「ちょっと難しいですねー…。でも悪魔は人間と違って、傷の治りや病気の治りが早いですよー」「へえ…。」「僕は前に、ライアちゃんからもらった蹴りでついた頭の傷に触れる。結構血が出ていたのに、僕は次の日にはもう包帯をとっていた。治りが早いつて…。まさかなあ。他にも思い当たる節があるんだよなあ…。」「どうしましたー？」「ああ…。なんでもないよ。他には何かない？」

「そうですねー…。個性が強いつてもありますし」「ああ、それは前にも聞いたね」「僕はどつだろう？個性強いのかなあ…。一人言は多いんだけど。」「むー…。こうやって考えると、あんまり違いがないですねー」「悪魔と人間の決定的な違いがないなら、なんで悪魔と人間は種族が分かれてるんだらうね？」「あ、それは勉強しましたよー」「やっぱり何かあるの？」「ライアちゃんは無い胸を張って、偉

そうに言う。だけど全然似合ってなかった。「人類が生まれた時に
ですね、悪魔

や天使も一緒に生まれたんですよ」「えっ？天使もいるの？」「悪
魔がいれば天

使もいるのが当たり前だろうけど、なんだかなあ……。」「天使もいま
すよー。悪魔

と天使は敵同士って人間は思ってますけど、そうでもないですよ」

「ふーん…難

しいねえ」「えーとですねー…人間は、羽が生えてる悪魔や天使を
迫害したんで

すよ」「人間ってやつは、いつの時代も変わってないって事か。」「そ
れですね、

悪魔は人間に対抗して、人間を倒そうとしました。天使は、人間に
迫害を受けた

のに、悪魔を止めようと思いました」「ふむふむ…」まるで、神話み
たいだなあ。

「全面戦争になりそ

うになった時、全てを作った偉い神様がそれを止めました。そして、
魔界・人間

界・天界と別々に、悪魔や人間や天使を分けたんですよ」「なる
ほどねえ」「

だから、種族が分かれる事になったんですよー。更に言うんですね
と、ライア

ちゃんは続ける。「迫害をした人間が一番悪いという事になって、
神様は人間だ

け、悪魔や天使が実在する事を忘れさせました」「だから、僕ら人
間は何も知ら

ないわけか…」まあでも、悪魔や天使は人間からしたら架空の生物
として生きて

いる事にはなっている。本当に全てを忘れていたら、架空の生物と

しても悪魔や

天使はいない事になるだろうね。「難しいなあ……」自分で考えて、頭が混乱して

しまった。「そういうわけなんですよー」「分かりやすく長々とありがたいよね

。でもさ、悪魔は人間を恨んでないの?」「すつごく昔の話ですからね、ほとん

どの悪魔は人間を恨んでなんかいませんよ」「ほとんどって事は、いる事にはい

るんだね」「人間として、申し訳ない気持ちになった。「しょうがないですよー」。

過去ばかり見てたって、良い事なんてないと私は思いますけどね……人それぞれで

すし」「うーん……確かに、過ぎた事はしょうがないのかな」「人間の僕が言うと、開き直ってるみたい

で嫌だなあ……。あれ?なんの話してたんだっけ?」「最初に比べると、結構違う

方に話がいった様な……。」「悪魔と人間の違い、ですよー」「そうだったそうだった。決定的な違いがないんじゃないやねえ……」「ですなー

……それにしても、いきなりどうしたんですか?そんな事聞いて」「んー……」「正直

に言おうか?でもしよせんは夢の事なんだよなあ……。」「ライアちゃん、僕は悪魔

に見える?」「え?十夜は悪魔だったんですか?」「この答えを聞けば、十分だ。

「いや、人間だよ」「僕は何を悩んでたんだかなあ……。」「むー……十夜が何をしたい

のか、さっばりですよー!」「はは、気にしないで」「なんか、心の靄が晴れた気

分だ。「もー

…十夜が人間でも悪魔でも、十夜は十夜だよ?」「うん…ありがとう」「私にと

って、大切な…人」「ライアちゃんは、顔を赤くして言う。なんか、すっごくうれ

しい。「ライアちゃんも、僕にしたら大切な人だよ」悪魔でも人間でも、僕は僕

、彼女は彼女、何も変わりはない。

「さて、難しい事言ったら、お腹減ったなあ…ご飯にしようか?」「はい…

ね、十夜」ちゅっ、と頬にキスをされる。「えへへ」とライアちゃんも笑って

いる。もちろん顔は、赤い。「いきなり、だね」僕も、ちゅっ、と頬にキスを返

す。「バカツプルみたいだねー」「ほんとだねえ…」僕は笑いながら、部屋を

出てキッチンに行った。

いつも通り、おかずをレンジでチンしてご飯を食べる。そして後片付けも手早く

済ませて、部屋に戻る。

「さて、午後は何しようか?」「言いながら僕は自分の布団の上に座る。ライアち

ゃんももちろん僕の隣に座る。時間は1時、太陽はまだまだ沈まない。「んー…ど

うしましよーか」「ゲームをするか、昼寝するか…どこかに出かけるってのもあ

りかな?」「ライアちゃんと話しているだけでも、僕的には結構な時間潰しにはな

るんだけどね。「出かけるとしたら、どこに行くんですか?」「そっちなあ…

「遊園地は行ったし…プールはもうちょい早い時間の方がいいし…」
「うーん…」

映画とかカラオケとか？」「むー…私歌はうまいですよー」「お、じゃあカラオ

ケ行こうか？」「正直僕は歌うの苦手だけど、ライアちゃんが行きた
いって言うな

ら、かまわないか。「行きましょー」「あい、じゃあ準備するね」
僕は外着に着

替えて、引きだしの中からお金を取り出す。ちなみに、ライアちゃん
は僕が着替

えてるのをのんびりと眺めていた。少し恥ずかしかった。

「あつー…」外に一步出るだけで、太陽はサンサンと僕らを照り付
ける。「夏だ

からしょうがないですよー」「まあね」戸締まりをしっかりとして、
自転車にま

たがる。ライアちゃんを後ろに乗せて、いざカラオケ屋に！

自転車で10分程の駅前にあるカラオケ屋に着いた。この10分の
間に、僕は何回暑

いって言ったんだろうなあ…。自転車を駐車場に置いて、ライアち
やんと中に入

る。中は冷房がかかっている、涼しい。フロントで早々と受付を済
ませて、僕ら

は部屋に移動する。「ライアちゃんって、どんな歌を歌うの？」個
室も冷房がか

かっている、なかなか涼しい。「私はですねー、なんでも歌えます
よ」「なんで

も…？」「僕の頭の中には、演歌を歌っているライアちゃんが出て来
た。はつきり

言って、似合ってた…。「十夜は、どんなのを歌うんですか

「？」「僕は

…」そう言えば、僕も一貫性がないなあ。「まあ、いろいろ歌えるよ。高いのは

無理だけどね。それよりも、歌わないと時間がもつたないよ」カラオケ屋に来

てまで、雑談してるのもねえ…。「じゃあ私からー」ライアちゃんは本から番号

を見つけて、リモコンでそれをいれる。「いきますよー！」マイクを握って、い

すに立ちながら歌うライアちゃん。なんていうか、すつごく楽しそうだなあ。彼

女が最初にくれたのはさーらんば、まあ出だしとしては普通かな？ライアちゃんが歌い終わる。「いやあ…びっくりした、まさかこん

なにうまいとはなあ」「久しぶりなので、まだまだ上げていきますよー！」ハイテンションな

ライアちゃん。彼女の新しい一面が見れて、僕としてもうれしいもんだ。「次は

十夜ですよー」「僕の最初は、これなんだよね」ガガSPの業を、叫ぶのが僕

の始まりだ。マイク片手に叫ぶのはちょっと恥ずかしいけど、かなり気持ちいい

。

歌い終わる頃には、少し喉が痛かった。「十夜…そんなにおつきい声出るんです

ね…」ライアちゃんは、少しびっくりしている様だ。「普段は結構、抑えて話し

てるからね」僕の声は素で大きい、だからいつもはかなり抑えてしゃべってる。

だけど、カラオケ屋なら誰にも迷惑かからないから、ね。「でも、

大きいだけじ

やなくてうまかったですよー」「ありがと、どんどん行くっかー」

僕らは変わり

ばんこに歌い続ける。

歌い始めてから2時間、さすがに僕は喉がかすれてきた。けれどラ

イアちゃんは、

まだまだ元気だった。「ライアちゃん、すごいねえ」変わりばんこ

とは言え、休

みなしで歌い続けるのはかなりきついはずなんだけど…。「歌うの

好きですから

」「なるほどね、僕は少し休憩かな」

それから30分程ライアちゃんが一人で歌い続けて、最後の30分

は二人で一緒に歌

った。デュエット曲じゃないけど、一緒にマイクを持って歌うのは、

かなり楽し

かった。

「さすがに疲れたー！帰ろうか」大体3時間、まあ二人ならこんな

もんだろ。「で

すねー、私はまだまだ歌えますけど」「ほんと、すごいなあ」「歌も

うまいし、ラ

イアちゃんが歌手になったらなんか良いよなあ。「行くっか」「名残

惜しそうなラ

イアちゃんを連れて、部屋を出る。フロントでお金を払って、外に

出る。

「んー、すっきりしましたよー」ライアちゃんは大きく伸びをする。

「また来よ

うね、僕もまだ歌ってない歌あるし」これでも、レパトリーは広

い方なんだ。

えっ？歌うの苦手なんじゃないかって？苦手だけど、嫌いじゃない

からね、たま

にはいいさ。「帰ろうか」「はい」僕は自転車にまたがり、ライアちゃんを後

ろに乗せる。「そうだ、シュークリーム買って帰ろうか？」駅前に、おいしい菓

子屋があるんだよね。「えっ！？いいんですかー！」後ろから、すつごく嬉しそ

うな声が聞こえて来る。「駅前に店があるからね、ライアちゃん大好きでしょ？

」「はい！十夜ありがとー」僕の腰につかまりながら、ライアちゃんは背中に顔

をすりつけてくる。「恥ずかしいって…」「いやまあ…嬉しいんだけどね。自転車

こいでるから少し危ないんだけどなあ…。

まあそんなわけで、僕はシュークリームを買って、ついでにご飯も食べて家に

帰った。

部屋に戻り、布団の上に座る。もちろん、ライアちゃんも横に座る。「疲れたー

…」久しぶりに叫んだから、結構体力を消耗したなあ。「シュークリーム、食べ

てもいいですかー？」布団の上で、箱を開けるライアちゃん。止めても食べるん

だろうなあ…。「いいよ、でも布団を汚さない様にね」さすがに、シュークリー

ムこぼしたら洒落にならないからね。ライアちゃんは幸せそうに、シュークリー

ムを食べている。「それにしても…ライアちゃんよく食べるねえ」体は小さいの

に、僕の二倍は食べてるんじゃないかな？「そんな事ないですよー、

十夜が食べ

なさ過ぎなんですよ」「まあ、確かに僕は少食だからね」「マクスのハンバーガー

二個でお腹いっぱいになるぐらいだからね。」「そんなんじゃ、大きくなれません

よー」「それは…」「ライアちゃんが言えるかなあ、とか口に出しそうになつたけ

ど、なんとかこらえる。こらえたところで、ライアちゃんは鋭いから僕が何を言

いたいのか分かるのだろう。」「むー…その内大きくなりますよー」と言いながら

、シュークリームを頬張っている。

「さてー、お風呂いってきますね」「シュークリームを食べ終えて、ライアちゃん

は立ち上がる。「いってらっしゃい」バスタオルを持って、部屋を出て行くライ

アちゃんを見送る。「僕もたまには入らないとなあ…」「三日ぐらい入っていないの

かな？まあ死にはしないからなあ。

本を読んでライアちゃんを待っていると、部屋に母さんがやって来た。最近

は、母さんからドアを開けて入って来る。「おかえり、今日は結構早いね」「時間はま

だ6時だ。」「ただいま。時間に不規則な仕事だからね、私も大変なのよ」「そ

ういえば母さん、なんの仕事してるの？」「秘密よ」「そうかい…」「まあ、なん

んでもいいんだけどね。」「そつだ、あのさ…変な事聞くけど」「どうしたの？」「父

ささ、人間的だね？」「え？」「僕は、一瞬だけ母さんの顔が変わ

つたのを見逃さなかつた。「どうしたの？いきなりそんな事を言つて」だけど、すぐに普通の顔に戻つた。「少し気になつただけさ」「変な事言わないでちょうだい、あの人
は人間よ」「人間、という部分が少しだけ強調されてる様に聞こえた。「そつか、
変な事聞いてごめんね」母さん、何か隠してるな…。「全く…それじゃ私は行く
わね」「うん、おやすみ、でいいのかな？」「おやすみなさい…」
ドアが閉められて、僕は部屋に一人残される。「父さんが悪魔…か」夢とは言え、
妙に気になるし、何より母さんのあの態度も気になる。「確かに、思い当たる節があるんだ
よなあ」「病気の治りも早いし、切つた傷の治りも早い。まあ、今更僕が悪魔でも
困る事なんてないか。「それでも…僕は僕なんだから」
「さつぱりしましたよー」とライアちゃんが部屋に戻つて来た。「おかえり、散
歩行く？」「んー…今日はやめませんか？」「やめよつか、僕もなんか行く気出な
いし」カラオケで歌いまくつて、体力を消耗したのが原因だろうなあ…。「もう
寝ちゃいます？」「ライアちゃんが僕の隣で横になる。「かなり早いねえ…」まだフ
時にすらなつてない。でも疲れたし、ご飯も食べたから、結構眠かつたりする。

「まあ、寝ちゃおうか」電気を消して、僕も横になる。隣で横にな

っているライ

アちゃんから、お風呂あがりの良いにおいがした。「ライアちゃん」
「はい？」

同じ布団の中で、僕はライアちゃんに聞く。「もし僕が悪魔だったら、どう思う？」

「むー…？今朝も言いましたよー、十夜は十夜ですよ、私の大切な人です」

「そっか…ありがとね」僕はライアちゃんを抱き寄せる。「十夜…」
「ライアち

ゃん、おやすみ」「おやすみなさい」ライアちゃんを抱き締めたま
ま、僕は眠り

につく。今だにキスマでなんて…僕らも進展しないなあ…。
今日も一日が終わる。

雨降って地かたまる

「まいったなあ…」僕は今、亡くなった父さんの部屋で悩んでいる。「どうしょ

つかなあ」僕が何を悩んでいるのかと言うとだ。まあ、少し前の話なんだけど…

。「んー…朝かな？」体を起こして、時計を見る。「7時か」昨日寝るの早かったか

らなあ…眠くないや。立ち上がって軽く伸びをすると、隣で寝ていたライアちゃ

んが目を覚ました。「むー…おはようございます」「おはよう、起こしちゃった

かな？」「そんな事ないですよー、昨日は寝るの早かったからねー」「やっぱり

寝るの早いと、早く起きちゃうねえ」朝早く起きてても、やる事ないからなあ…。

「まあ、ご飯食べる？」「食べましょー」

僕らは部屋を出て、キッチンに行く。今日はライアちゃんが目玉焼きを作ってく

れたから、それをおかずにご飯を食べた。「今日の黄身は潰れてなかったね」後

片付けをしながら、僕は笑いながら言う。「いつも潰れちゃうわけじゃないです

よー、私だつて学習しますから」「まあ、それもそうだな。

後片付けを終えて、部屋に戻り、僕は自分の布団に横になる。ライアちゃんは、

いつも通り僕の隣に横になる。「さーて、今日は何しようか？」「

十夜は、何を
したいんですかー？」「んー…」聞き返されたのは初めてで、少し
考える。「特
にしたい事もないんだよなあ」「忙しい時は暇が欲しいけど、暇な時
はやる事がな
くてつまらないもんだ。「若いのに、そんなんじゃないですよー」
「そうなんだ
けどねえ…」暇潰し…暇潰し…うーん。「何か二人でやりましょー
よ」ライアち
やんも、何も考えついてないみたいだなあ。「二人でやれる事…」
僕はつい顔を
赤くしてしまった。やべ…何考えてるんだ僕は…。「どうしたの？」
ライアちゃ
んは顔を覗き込んで来る。「いや…なんでもない」エッチな想像し
たなんて、本
人には口が裂けても言えなかった。やつぱりたまってるのかなあ…。
「むー？」
「ま、まあそれはおいといて…暇だねえ」「ですねー」「ご飯食べ
て、すぐに寝
てるなんて太りそうだなあ」「前も言いましたけど、十夜はもう少し
し脂肪つけた
方がいいですよー」「太りにくい体質なんだよね。そういうライア
ちゃんだつて
、小さいよね。胸な
んてまつたい…」あつ…やば。ライアちゃんは黙っている、それが
すつごく怖か
った。「いやほら、なくても僕はきにしな…」「十夜の馬鹿ー！！」
パチン、と
左頬を思いつきりはたかれた。「痛いって！」今回は冗談じゃなく、
本気で痛か

った。だからつい、僕もカツとなった。「ライアちゃん、手あげるの早いつて！」

「十夜が悪いんですよ!」「だからって、たたくなよ!」「そこから先は、口喧

嘩のイタチゴツコだった。

「もう…十夜なんて嫌い、出てけー!」「僕だつて嫌いだ!」「そう言い残して、

僕は部屋を出た。それから父さんの部屋に行つて、少し時間をおいた。時間がた

つにつれて、ライアちゃんに対する怒りはなくなって、罪悪感でいっぱいになつ

て来た。

まあそんなわけで、今に至るんだけど…。「どうしよう…」「売り言葉に買い言葉

で、つい嫌いなんで言っちゃったけど、今はすごく反省してる。」「どうすれば許

してくれるかな?」「僕だけが悪いわけでもないんだけど、謝らないと話にならな

い…。「はあ…」「ライアちゃん、ほんとに僕の事嫌いになっちゃったのかな…?」

そう考えると、自然と涙が出そうになってしまう。「嫌われたくないよ…」「胸が

痛い…切ない…。誰かに嫌われる事が、こんなに苦しいなんて思った事あつたか

な?」「はあ…」「謝りたくても、ライアちゃんが怒っていると思うと、謝る事が出

来なかった。「ほんとに…僕は弱虫だなあ」「寝っ転がって天井を見ても、良い解

策は見つからなかった。「そういえば…」「考えてよまれた事はあつたけど、胸

ないね、的発言をしたのは今回が初めてなんだ…だからライアちゃんの怒りは、尚更なのかなあ？

「んー…！」一時間ぐらい考えても、何も出て来なかった。

そこからさらに30分ぐらいたつてから、僕は立ち上がる。「謝ろう…」気にして

る事言つてごめん、つて。嫌いなんて言つてごめん、つて…。

父さんの部屋を出て、自分の部屋の前に来る。「すうー…はあ」何回か深呼吸。

あれ？デジャウ”かな？前もこんな事あつた様な…。「あつ…」ライアちゃんが家

を出て行つた日、彼女が死んでしまった日…あの時に似ている。僕は焦つて、部

屋のドアを開けた。部屋の中にライアちゃんは…いた。ていうか、寝てた。「ふ

う…」ほつと一息を吐く。良かった…。

僕はライアちゃんを起こさない様に、隣に座る。ライアちゃんが寝ているのは、

僕の布団だつた。「謝りに来たんだけどなあ…」「すーすー、と寝息をたてて寝て

いるライアちゃん。「ちよつと、肩の力が抜けたなあ」起こすわけにもいかない

し、どうするか…。「まあ…これはこれでありかな？」ライアちゃんの寝顔を見

る。すぐくほつとする顔だ。「幸せそうだね」ライアちゃんが幸せなら、僕だつ

て幸せなんだ。

ライアちゃんの寝顔を見ていたら、僕も眠くなつて来た。「隣で寝ても、平気か

な？」ライアちゃんの隣に横になる。「ごめんねライアちゃん…お

やすみ「起き
たら、もう一度謝ろう。許してくれるまで、何度でも…。僕は夢の
中へと誘われ
ていった。

「ん…?」目を開けると、ライアちゃんが僕の顔を見ていた。「…
起きた?」

うん…「いつから見てたのかな?寝顔見られるのは、なんか恥ずか
しいや。僕は

体を起こして、口を開く。「えっと…」僕らははもった。「あ、
ライアちゃ

んから」「あ、十夜から」またはもった。「…」少しの沈黙。「え
っとね」僕が

先に口を開く。「さっきは…ごめんね、ライアちゃんが気にしてる
事言っちゃっ

て…」ライアちゃんの目を見て、真剣に謝る。「ううん、もう気に
してないよ。

私も…ごめんね」僕らは少しの間、見つめ合う。「嫌いななんて思っ
てないから、

ライアちゃんの事…大好きだから」「十夜…」何回も好きってライ
アちゃんに言

ってきたけど、今回はいつもより本気だった。いつもが冗談、って
わけでもない

よ?だって、ライアちゃんに嫌われたくないからさ。「私も…十夜
の事大好きだ

よ」どちらからか分からないけど、僕らは顔を近付ける。「ライア
ちゃん…」

ん…」そしてキスをした。長い長いキスだったと思う。僕らは唇を
離して、はに

かむ様に笑い合う。「かわいいよ」「十夜も、かわいい」かわいい

と言われて、
僕は喜んでいいのか
悩みながら、ずっと二人でラブラブしていた。

「やっぱり、こうじゃないとね」「何が？」「僕らは夜の道を散歩している。「僕

がライアちゃんの隣にいて、ライアちゃんが僕の隣にいる。それが、すごい嬉し

い」「十夜ー、恥ずかしいですよ」「隣を歩きながら、顔を赤くするライアちゃん

。「ケンカして分かるものもあるんだねえ」「ですねー」「ほんと、僕は幸せだな

。好きな人が、いつでも隣にいてくれるんだから。でも…「いつか、魔界に帰っ

ちやうんだよね？」「それが、寂しい。「うん…」「ライアちゃんも、寂しそうにそ

う言う。「帰っちゃったら、もう会えなくなる？」「そんな事はな

いですよ。離
れてたつて、私の想いはいつも十夜のそばにいますから」「恥ずかし

い言葉を、な
んの臆面もなく言うライアちゃん。でもそれって…「やっぱり、会

えなくなっち
やうんだ…？」「うん…」「小さく頷く彼女。「簡単に、来れないの

？」「行き来
はそんなに大変じゃないですよ、でも…」「でも…？」「…」「ライ

アちゃんはそ
の先を言わない。「別れがあるのは、しょうがない…のかな？」「

うん、しょう
がないんですよ」「悲しい別れがあるから、嬉しい出会いがある。そ
んな事は分か

つていたって、どうにも出来ない気持ちは…あるんだよ。「私は、十夜に会えて良かった。これから悲しい別れがあっても、私は後悔しない」強く、しっかりとライアちゃんはそう言う。やっぱり、ライアちゃんは大人だな…。「僕は、悲しい別れがあるなら、嬉しい出会いもいらない…」僕は、そこまで割り切れる程大人じゃないんだ。「だから、嬉しい出会いを悲しい別れにする気はない。わがままだと思うけど、僕はそう思う」「十夜はまだまだ、子どもだね。でも、それが出来るなら、それが一番いいね」寂しそうに、ライアちゃんと言う。「二つしか選択肢は僕が選択肢を増やしてもわがままを貫き通す。ライアちゃんのおばにいたいから」ほんつと、僕はガキだなあ…。「十夜、諦めないひたむきさは大事だよ。でも諦めないといけない時も、あるんだよ?」「それが大人になるって事なら、僕は一生ガキでいいや」親の事とか、学校の事とか、友達の事とか、逃げてばかりいた僕だけど、諦めないで現実を見ようと思った。今をがんばってみようと思っただ。それが、私に迷惑をかけるとしても?」「うっ…それは…」僕は言葉につまる。「僕がわがまま言ったら、迷惑?」「迷惑だよ」「そっか…ごめん」涙が出そうだ…胸が

痛い。「迷惑だけど…すっごく嬉しいよ。私だって、離れたくないんだから」「
あ…」そっか、辛いのは僕だけじゃ…ないんだよね。「難しいね」「
ほんとにね
」「ほんと…難しいね。」

僕らは散歩を終えて、部屋に戻って来た。「あー…難しい事ばかり考えてたか

ら、頭がククラクラするよ」「あはは、そうやって大人になるんですよ」「僕は布

団に倒れ込む。するとライアちゃんが、僕の胸に飛び込んで来た。

「じほっ…痛

いって」「十夜、ぎゅーってして」「ん…」僕はライアちゃんをぎゅっと抱き締

める。「あつたかいね、十夜…」「僕は少し暑いかな…」まあでも、心地良い。

「電気消さないと…寝るでしょ？」「うん」僕はライアちゃんを抱き締めたまま

、立ち上がって電気を消す。「んじゃ、おやすみ」布団に戻る。「おやすみなさ

い」ライアちゃんの体温を肌を感じながら、僕は夢の中へと誘われ
ていく。二人

の時間を…もつと楽しみたい…なあ…。

今日も一日が終わる。

初めての看病

「…うや」「ん…」誰かが僕を呼んでいる。まあライアちゃんだろ
うな、ってこ

とはもう朝かな？「十夜、朝ですよー」「んー…おはよう」「だるい
体を起こして

ライアちゃんを見ると、少し顔が赤くなっていた。あれ？僕何かし
たっけ…？「

おはようございますー」というか、これは…「ライアちゃん、ちょ
つとごめんね

「僕はライアちゃんのおでこに手を当てる。」「十夜は鋭いですねー
…」熱かった

。「ライアちゃん程じゃないけどね。風邪かな？熱測った？」「ま
だ測ってない

ですよー」「じゃあ測らないと」「立ち上がって、机の引きだしから
体温計を取り

出して、ライアちゃんに渡す。「はい。咳とか頭痛はない？」「あ
りがとー。少

しくラクラするけど、大丈夫ですよー」と言われても、ライアちゃ
んの事になる

と僕はつい心配し過ぎてしまう。好きな人の事だから当然かな？
ライアちゃんは僕の布団の上に座って、体温計をわきにはさんでい

る。僕はその
隣に座って、そんな彼女を心配しながら見ている。「風邪ひいたの

なんて、初め
てなんですよー」「それはすごいね…」「そう言えば前にも言った

っけ…。一分
もたたない内に、体温計はピーツ、と鳴る。ライアちゃんはわきか

ら体温計を出

して、体温を見る。もちろん僕も、横からそれを覗いた。「38度2分、結構高いね

」。「だねえ。今日はちゃんと寝てないとだめだよ?」「うー、遊びたいですよ

」。「ライアちゃんは口をとがらせる。「だめ、元気になってからだよ」「むー…

私を置いて、一人で遊びに行っちゃだよ?」「そんな事しないよ、ちゃんとそ

ばで看病するから」「ほんと?」「うん」ライアちゃん、初めての風邪で不安な

のかな?まあ、昼間から一人で僕が外に行くわけないんだけどね…。「僕の布団

でいいから、横になりなよ」そういえば、僕の布団も何も、最近ずっと二人で寝

てるんだったな…。「はい…十夜も寝ましようよー」「トイレ行ってからね」

僕は立ち上がる。そういえば、今何時なんだろう?時計を見ると、まだ6時だった。

朝はやいなあとか思いながら、トイレに行って用を足す。部屋に戻ると、ライア

ちゃんがこっちを見ていた。僕が戻って来るまで、ずっとドアを見ていたのかな

?寂しがり屋だなあ…。

「ライアちゃんもしかして、不安だったの?」僕はライアちゃんの隣に横になっ

て、そう聞く。「何がですか?」「いやさ、僕を起こすの早かったし、もしかし

たらとか思っで」「自分で熱があると分かって、それが不安で僕を起こしたんじゃない

ないかって、僕は思うんだけどね…。「不安なんかじゃないですよ

「とか言い

ながら、ライアちゃんは僕にくつついている。「まあいいんだけどね…寝ようか

」6時なら、二度寝しても良い時間だしね。「…そばにいてね?」
やっぱり不安な

のか…元気なライアちゃんもいいけど、弱ってるライアちゃんもいいなあ…って

不謹慎かな?「そばにいるよ」僕はライアちゃんを抱き締めて、目を閉じる。「

おやすみ」「おやすみなさい」ライアちゃんの体温を肌を感じながら、僕の意識はとんでいった。

「んー…」目が覚めたので、体を起こす。僕の寝起きがいいなんて

…珍しいなあ
。二度寝したからかな?

「さてと」隣で寝ているライアちゃんを起こさないように、僕は立ち上がる。時

計を見ると、時間は10時を少しまわったところだった。「がんばるか…」僕は部

屋を出てキッチンに行く。まずは濡れタオルの準備だ。僕は容器に水をいれて、

タオルをそこに浸す。そして容器ごと部屋に持って行く。部屋でタオルを絞って

、寝ているライアちゃんのおでこの上にタオルを乗せる。「むー…」
ライアちゃ

んは少しうなっただけど、まだ寝ている。「こっからが、頑張りどころかな」僕は

部屋を出てキッチンに戻る。ライアちゃんのためにおかゆを作るからだ。作り方

は分からないし、料理自体苦手な僕だけど、ライアちゃんに何かしてあげたいんだ。

「とは言っても…どうすればいいんだ？」おかゆの作り方…さすがに知らない物

は作れないなあ。「まあ、やってみるか」まずは材料なんだけど…

ご飯と水があ

れば出来るかな？「確か、卵入ってるやつもあるんだよねえ」冷蔵庫を漁って卵

をゲット。「長ネギも風邪にいいんだったかな？」ついでに長ネギもゲット。ご

飯もあるから、材料はおーけーかな…。「えーと、まずは…」鍋で水を沸かすの

かな？鍋に水をいれて、コンロで火にかける。「水量分らないけど、こんなも

んかな？次は…」まな板と包丁を出して、長ネギを洗ってから切る。何回か指切

ったけど、一応細かくきざめた。「えーと、お湯が沸騰したら切ったネギをいれ

ればいいのかな？」知らない物を、予想だけで作るのがどれだけ困難か分かった

気がした…。沸騰したお湯の中に切ったネギをいれて、ネギがしんなりしたらご

飯を茶碗二杯分いれてみる。「本当にこれでいいのかな…？」「ご飯をいれて少し

してから、そこに卵を割って入れる。なんていうか変な物が出来そうだった。「

ふたをして、少し煮てみるか」どうなる事やら…。

結構な時間を置いて、鍋のふたとるといい感じにおかゆっぽくなっていたので

、それを鍋から二つの茶碗に移す。少し塩を振り掛けて、出来上がり(?)…。

「食べられるのか?これ…」一応見た目はおかゆで、細かくなってるネギや卵が

至るところに混じっている。「味見」一口食べてみると、食べられない物ではな

かった。「まあ、元々が食べ物なんだしね…」僕は茶碗を二つとスプーンを二つ

、コップ二つと麦茶が入っているペットボトルと風邪薬をお盆に乗せて、部屋に戻った。

部屋に戻ると、ライアちゃんが起き上がっていた。「十夜…どこに行ってたんで

すか?」寂しそうな目でこちらを見て来る。「おかゆを作りかね。今起きたとこ

?」僕はライアちゃんの隣に座る。お盆はライアちゃん側じゃない僕の隣に置い

た。「今起きたばかりですよ、起きたら十夜がいないから…」「ごめんね、寂

しい思いさせたかな?」「うん…」ここまで素直でしおらしいライアちゃんは、

見た事がないなあ…。「食欲ある?」「あんまり…でも十夜が作ってくれたなら

、食べますよ」「なんだか、照れるなあ…」ライアちゃんは僕の手をとって、指

先を優しくなでる。「だって…こんなに怪我して…」正直触られると痛いんだけ

ど、なでてもらうのは嬉しかった。「僕料理下手くそだから…」僕はライアちゃ

んから手を離し、茶碗とスプーンを持って、スプーンでおかゆをよ

そってライア
ちゃんに食べさせる。「どうかな?」「うん…おいしいよ」「につこ
りと微笑むラ
イアちゃん。「良かった…」「ありがとね、十夜」自分が作った物
を、おいしい
と言ってもらえるのは、すごく嬉しい事だった。

僕がライアちゃんに食べさせる形で、ライアちゃんは茶碗一つ分のおかゆを食べ
終えた。「まだあるけど、食べる?」「一応、もう一つの茶碗は僕のおかゆなんだ

けどね。「ううん、もう十分だよ」「ライアちゃんは首を横に振る。

「そっか、じ

ゃあ薬飲まないと」「お薬は苦手ですよ…」「子どもじゃないんだから…わが

まま言わないの」「薬と言っても、錠剤なので飲みやすい方だと思う。コップに麦

茶をいれて、薬と一緒に渡す。「飲まなきゃ、だめ?」「目をうるうるとさせて、

聞いて来るライアちゃん。「だめだよ」「危うく、いいよ、とか言いそうになる自

分を抑えて、僕はそう言う。「飲まないと、治りが遅くなっちゃうよ?」「むー

…」錠剤とにらめっこをする彼女。いきなり顔をこっちに向けて、ライアちゃん

は口を開く。「十夜が口移ししてくれるなら、飲みますよ?」「え?」「いきなり

の提案に、僕は焦る。キスするのは今さら焦る様な事じゃないんだけど…こっち、

なんて言うかな、しおらしいライアちゃんは兵器レベルなんだよね…。「そっじ

やないと、飲みません」まあこういうところは、いつものライアちゃんなわけな

んだけど…。「しょうがないなあ…」僕は薬と麦茶

を口にいれて、ライアちゃんに口移しで飲ませる。「ん…」「ちゃんと、飲めた

？」ライアちゃんはこくと頷く。やれやれ…僕は今どれだけ赤い顔してんだろ
うな。

「じゃあ僕片付けてくるから、ちゃんと寝るんだよ」「はい」タオルを容器に

いれて絞ってから、横になったライアちゃんのおでこの上に乗せる。「おやすみ

」「おやすみなさい…すぐに戻って来てね?」「うん」僕は使った物をお盆に乗

せて、部屋を出てキッチンに行く。「急ぐかな」使った物をさくさく洗い流す。

料理は苦手だけど、洗いものは結構得意なんだよなあ…慣れてるか
ら。

急いで片付けを終えて、部屋に戻る。やっぱりライアちゃんは、僕が戻って来る

までドアを見ていた様だ。「寝ないとだめだよ?」僕はライアちゃんの隣に腰を

おろす。「うん…そばにいてね?」「そばにいるよ、だから安心して寝てね」僕

はライアちゃんの手を握る。「うん…十夜…」ライアちゃんはすぐに、スースー

と寝息をたてて寝てしまった。「ほんとに、かわいいよなあ」「手から伝わる温も

りが、僕の心を温かくさせる。ふと、この前ライアちゃんに看病してもらった事

を思い出す。「やっぱり、病気の時是不安になるもんか…」「こつや
つて、二人で
支えあつて生きているのは、すごく幸せな気がした。

「ん…あれ?」「どうやら、看病してる間に気付かない内に寝てたの
か…。「最近
寝過ぎだよなあ…このままじゃだめ人間になつちゃうよ」「もう手遅
れっばいけど
ね。

ライアちゃんは、まだ寝ている。僕はライアちゃんを起こさない様
に、水の入つ
てる容器を持つて部屋を出る。キッチンで水を入れ換えて、トイレ
で用を足して
から部屋に戻る。「しっかし…ライアちゃんもやっぱり風邪ひくの
か」まあ生き
てるんだから当たり前なだけとき、なんか似合わないというかな
んというか…

僕はライアちゃんのおでこの上にあるタオルを水に浸し、絞つてま
た乗せる。「
早くよくなればいいなあ…」「ていうか暇だな…寝ているライアちゃ
んを見ている
のも別に飽きはしないけど、さすがに病人をつついたりするわけ
にもいかない
し…。「散歩行くのも、まずいか」自分で言うのもなんだけど、ラ
イアちゃんが
起きた時に、僕がいなかったら悲しむだろうからね。

僕はする事もないので、時計を見る。「時間は5時かあ…」「趣味の
一つや二つ、見
つけるべきかな?」「まあ、本でも読むか」「てきとーに本を一冊選ん

で、黙々と読
みふける。漫画じゃなくて、一応小説だ。ライトノベルなんだけど
ね。

7時頃に、ライアちゃんが目を覚ました。「むー…おはようござい
ます」「おはよ

う、熱測ろうか」「机の上に出しっ放しにしてある体温計を、ライア
ちゃんに渡す

。ライアちゃんはそれをわきに挟む。「寝過ぎで、なんか頭がクラ
クラしますよ

ー」「具合が悪い時ぐらいは、おとなしくしないとね」「わきに挟ん
だ体温計は、

すぐにピーツとなる。ライアちゃんはわきから取り出し、数字を見
る。もちろん

僕も横からそれを覗く。「36度8分、もう全然平気ですねー」「
熱の下がり早いね

え…悪魔は治癒力が高いんだっけ？」「そうですよー、漫画の
ギャグキャラ

ぐらい早いですよ」「早すぎじゃない…？」「ていうかどんな例えだ
よ…。

「これなら、夜の散歩は良いですよね？」「んー…」本当なら、完
全に治してか

らの方がいいけど…僕も人の事言えないからなあ。「しょうがない
か、少しは動

かないと、ライアちゃんも寝れないでしょ？」「まあ、僕もただけ
どぎ。」「じゃ

あ、行きましよー」「ライアちゃんは元気に立ち上がる。「ご飯は？」
「今はお腹

空いてないですよー」「まあ僕もだし、行こうか」「つくづく、不安
定な生活リズ

ムを送ってるよなあ…僕ら。

家を出て、玄関の戸締まりをしっかりとしてから、僕らは散歩に出る。

「はあ…それにしても平和だねえ」「いきなり、どうしたんですかー?」「なん

となくね。国や世界じゃ問題が多くても、僕のまわりは平和だなあ
と思ってる」そ

れはきつと、僕が恵まれてるだけなんだろうけどね…別に深い意味
はないさ。」

明日は我が身ですよー、何があるか分からない世の中ですし」「い
きなり悪魔が

家に来たりとか?」「僕は笑いながら言う。「もー、それは嬉しい出
来事じゃない

んですか?」「自分で言うか…。「時と場合と人によるんじゃない?
まあ、僕は嬉

しいけどさ」「いきなり殺されそうになった時はびっくりしたけどね
…。「私が来

てから、もう二週間ぐらいかな?」「まだ二週間ぐらいだね」「まだ、
なんて言え

る程、薄い二週間でもなかったけどね。「時間がたつのは、早いで
すよねー…」

「何年寄りくさい事言ってるの…」「もー、毎日が楽しいから、っ
て意味ですよ

」「ああ、なるほど」ってことは、僕にとっても時間の流れは早い
わけだ。「楽

しい人生を送ると、短い人生に感じるって事になるのかな?」「そ
れだけ充実し

てるって事じゃないですかー?」「長くてつまらない人生と、短くて
楽しい人生。

実は時間の差は全然ないけど、感じ方の差は大きい

。「不思議だねえ」「ほんとですねー」まあ、別に深い意図があつてこんな話を
してるわけでもないんだけどね。

「疲れましたよー」僕は部屋に戻って来た。「そりゃね…散歩なのになんで僕は走つたんだらう？」なぜか、歩きなら家に着く手前10分ぐらいの距離から、僕は走つた。「たまには、走るのも大切ですよー」僕は結構息を切らしてたのに、ライアちゃんは元気だった。「ライアちゃん、結構体力あるよね」あれか、子どもの体力がすさまじいのと同じ。。。「…十夜?」「はい、ごめんなさい」ほんつと鋭いなあ…笑顔でにらまれるのは怖いよ…。まあする事もないので、僕は寝る事にした。電気を消して、布団にもぐる。い

つも通り、一つの布団に二人である。

「おやすみ」「おやすみなさい」さて…寝れるかな?

予想とは裏腹に、案外簡単に意識はとんでいった。

今日も一日が終わる。

別れ

「んー…朝だなあ」ほんと…最近寝過ぎだな。体を起こして、時計を見る。10時

ちようどぐらい、まあ起きるには普通の時間か…。「もっと早く起きれる様にしないよ、学校行けそうにないなあ…」

隣で寝ているライアちゃんをつっついて起こす。「むー…何するんですかあ」「

朝だよ朝、起きないと時間もつたないよ?」「まあ、僕らの二人の時間って意味

なんだけどね。「むー…」ライアちゃんはだるそうに体を起こして、口を開く。

「時は金なりですよ」「おお、難しい言葉知ってるね」「いや、誰でも知ってる

かな?」「だからお金を出せば時間は買えるので…まだ寝ますよー…」と、布団に

倒れそうになる。「いや…全然意味違っただけど」「倒れそうになるライアちゃん

を抱き上げて、僕は彼女を振り回す。「きゃあー!」「目を覚ませ」「自分を中

心に回しているの、もちろん僕も目が回る。「うわっ…」頭がふらふらして足

がもつれて、僕らは倒れた。なんでこんな自爆技を使ったんだろうなあ…。「あ

いたたた…ライアちゃん大丈夫?」「下になる事にはなんとか成功したから、ライ

アちゃんはそこまでダメージを負ってないはずなんだけど…。「もー、何するん

ですかー！」むしろ元気だった。倒れたまま、僕は謝る。「ごめん
ごめん」「次

やったら、十夜が寝てる間に落書きしますよー！」「それは勘弁…
まあ、ご飯に

しようか」「額に肉って書きますよー」「ほんとに
勘弁…」

いつも通りの日常を送る僕ら、それは普通の事だけど、とても楽し
い。でもそんな日常は儚くて、すぐに終わってしまう事をこの時僕は知らなかつ
た。

それは、朝ご飯を食べてる時にいきなりやってきた。

「十夜、おいしいですかー？」「うん、おいしいよ」「ライアちゃん
が作ってくれ

たおかずは、ご飯に合って結構おいしかった。「これ、なんて言う
の？」「おいし

いけど、見たことがない物だったから、ライアちゃんに聞いてみる。
「ほれはで

ふねー」「ごめん、飲み込んでからでいいから」「口に物を詰めたま
ま喋る姿は、

ほんとにライアちゃんっぽい姿だ。ごくくんと飲み込んでから、ラ
イアちゃんは

口を開く。「それはですねー…えーと…」「どうしたの？」「まさか、
名前を忘れ

たのか？」「…オリジナルなので、名前がないんですよ」「オリジナ
ル？それはす

ごいなあ…」「まあぎざんだ野菜が色々入ってて、肉やらなんやらも
入っているの

もすごいけどね。おいしいんだけどさ。

話しながらご飯を食べていると、玄関の呼び鈴が鳴った。「誰だろ
う？ちょっと

行つて来るね」僕はキッチンを出て、玄関に行く。「はい、どちら様ですか？

「ドアを開けると、そこには見慣れない男性と女性がいた。男性も女性もスーツ

を身に纏い、厳格な雰囲気醸し出している。歳は、どちらも30後半に見える。

「えーと、どちら様で…」「こちらに、ライアと言う悪魔がいるだろうか？」「高圧

的な態度で、男性の方が話しかけて来る。「…あなたたちはなんなんですか？」

なんとなく、僕は嫌な気配を感じた。「いるかないかとこちらが聞いているの

だよ」「いませんよ、帰ってください」僕はプレッシャーに耐えながら、言葉を

返す。男性が吐き出す言葉は、一つ一つが重かった。「嘘は良くないわ、お仕置

ね」今まで黙っていた女性が口を挟む。「何を言って…うあ！」「いきなり、体が

地面に伏した。何もされていないはずなのに、体に何かが乗っているかの様に重

かった。「な、何を…？」僕は上がらない顔を下に向けたまま、目だけで相手を

にらみつける。「嘘は悪いことだって、学校で習わなかったのかしら？」「所詮

人間なんてそんなものだろう…邪魔するぞ」靴を脱ぎ、二人は僕をまたいで、家にあがっていく。「くそ…不法

侵入のほうが悪いくことだろ！」僕は叫ぶが、二人に無視された。ほとんどなくして、

キッチンの方からライアちゃんの声が聞こえた。「パパ！ママ！」

「ああ…やっぱりそうか。僕は苛立ちを感じるのと同時に、今何も出来ない自分を情けなく思った。

「いつまでもこんなところで何をしているんだ！学校が始まるんだぞ！」「…私

は、お兄ちゃんの代わりじゃない！」直後、パーン！と平手うちの様な音が聞こ

えた。「あなたがレイアの代わりですって？出来損ないがほざくんじゃないわよ

！」その言葉を聞いた瞬間、僕は頭の中で何かがぶちつと音を立てて切れた。気

がつくと、僕はキッチンに走り出していた。体を感じた重さは、もうなかった。

「ふざけたこと言ってんじゃないよ！！」僕は背を向けていた二人に、叫んだ。

「てめーらのせいでどれだけライアちゃんが傷ついたと思ってるんだ！？」「十

夜：「ライアちゃんがこちらを見た。二人は平然とした顔でこちらに向き直る。

「半魔か、珍しいな」「そうね、でもまだまだ力は弱いわね」「何関係ないこと

話してやがる！」とっさに僕は二人に飛び掛かっていた。「部外者が口を出すな

！」「スーツを纏った男が僕に向けて片手を上げた。「なっ…うわあ！」「何が起き

たか分からなかった。気がつくと玄関の天井が見え、背中と後頭部にひどい痛み

を感じ、体は指すら動かせない。「十夜あ！」「さあ、帰るぞ」「十夜！十…」

ライアちゃんの涙まじりの声が途切れ、キッチンからは人の気配が

消えた。「ラ
イア…ちゃん…」僕は彼女の名前を呼びながら、意識がどんどん闇
に引きずりこ
まれるのを感じていた。

「…とう…や…十夜…！」誰かが僕の名前を呼んでいる、まだ…眠
いんだよ…

「起きなさい！」仕方ないので目を開ける。「…母さん？」「良か
った…」母は

ポロポロと涙を流しながら、横になってる僕を抱き締めていた。「
どうして泣い

てるの…？」僕は体にひどい痛みを感じながら、体を起こす。「何
が…あつたの

？」母は僕にそう問い掛ける。「何って…何が…あつ！」思い出し
た、ライアち

やん！

「母さん、ライアちゃんは！？」「ライアちゃん…？私が帰って来
た時にはあな
たしかいなかったわよ…それよりどうしたの？体は平気？」「痛み
はあるけど、
平気だよ？…えっ！？」やっと今の状況に気付く。玄関が…血塗れ
になっていた

。「え？え？」僕はさっき打った自分の後頭部をなでる。カサカサ、
と髪からは血

が乾いた感触が伝わって来る。「…なんだよこれ」あの二人は、僕
を殺す気だっ
たのか…？

「傷口はふさがってるみたいね…良かったわ」母は僕の頭の傷を見
て、そう呟い

た。「母さん…やっぱり僕は…」 「続きは後にしましょう、まずは片付けないと

…ほら、お風呂に入ってらっしゃい」僕は痛む背中を気遣いながら立ち上がった

てお風呂に向かった。

「普通なら、死んでるよなあ…」 さつき見た惨事が脳裏に焼き付いている。人間

はどのくらい血を流したら死ぬかは分からないけど、あれは間違いなく死ぬ量だ

と思う。

「傷もふさがってるみたいだし…悪魔、か…」

分かってはいた、なんとなくだけど…ライアちゃんは前に、それでも僕は僕だと

言ってくれたが、やっぱり自分が自分じゃなくなるようで怖い。

お風呂から上がり、リビングのソファーに腰を降ろす。

今日はなんか…疲れたなあ…ライアちゃん…大丈夫かな？

体は疲れているものの、頭は思考することをやめない。

色々考えている内に、母がリビングにやってきた。

「血が多くて片付けるのに大変だったわ…まだ少し跡が残ってるし」

「…ごめん

」 「十夜が謝ることでいいでしょう？」

確かにそうだけど、ただ謝りたい気分だった。

「で、何があったのかしら？」母は向かいのソファーに腰を降ろす。

「…ライアちゃんのお母さんとお父さんが来て、ライアちゃん連れてかれたよ」

空っぽの言葉だけがただ宙にただよう、僕は何も出来なかったんだ…。

「それで、邪魔なあなたを殺そうとした…そういうことね？」 「うん…」

何も出来なかったことの苛立ちが、僕をずっと責め続けている。

母は怒りを露わに言う。「人の息子に全く…礼儀も何も無い親なのね」「うん…」

「
そう返すことしか、今の僕には出来なかった。

母は淡々と言う。「…彼女のこと、諦めたほうが楽なんじゃないかしら？」「…」

…」

僕は何も出来なかった、もしライアちゃんのところに行けたとしても何も出来な

いだろう…でも、だからといって諦められるか…？

「諦め…たくない、このまま別れるのは嫌だ」強くそう答える、ライアちゃんが

また辛い思いをするのは耐えられない。

「そう…」母は少し悲しそうな顔で話した。「十夜、あなたも気付いてると

思うけど…あなたは人間じゃないわ」「やっぱりそうなんだね」

分かってはいた。あの夢のことや、傷の治りの早さなど、普通の人間ならさつき

死んでるはずだから。

「とは言っても、半分は人間だから完全な悪魔じゃないわね」「父さんが悪魔だ

つたんでしょ？」「ええ…」

父の話をする時は、母は今でも悲しそうな顔をする、それが僕は嫌だった。

「ライアちゃんの家…魔界に行くことは出来るの？」「行き来すること自体は簡

単よ、全ての界は繋がってるから…ただ、それに気付かないだけで」

繋がっている…？ならなんで人間はそれを見つけれないんだろう。

「これを持って、彼女のことを強く思いなさい」母はポケットからネックレスを取り出し、僕に渡した。二本の細い鎖の先端に、赤い宝石がついている。

「何、これ？」「前にあの人からもらった物よ…私はもう使わないから、あなたが持ってなさい」「うん…」

母からもらったネックレスは、どこことなく懐かしいイメージを抱かせた。

「無事に…帰ってくるのよ？」母はそう言って立ち上がり、僕を抱き締めた。ほんの少しだけ、その体は震えていた…。

「大丈夫…絶対に」正直不安な気持ちはあったけど、大丈夫だと思えた。

「十夜までいなくなったら…」「大丈夫だって！これでも一応男なんだからさ…」

「…気をつけてね」
母が幼く見えた。いつもしっかりしている母…帰って来たら親孝行でもするか。

母は僕から離れて、ソファーに戻った。

「頑張りなさい」「うん…！」

ネックレスを両手で強く握り締める。ライアちゃん…心の中で強く彼女を思い描く。

く。いつも元気で、子どもっぽくて、甘えん坊で…でもずっと悩み続けて来た彼

女、そんな彼女を愛しく思う…いつも元気つけてもらった、だから今度は僕が彼

女を助ける番なんだ…！

徐々に視界が白くなっていく、体が浮いてるかの様に感じ、意識はもうろうとし

てくる。

「うっ…」そして僕の意識は、闇に包まれた。

それぞれの選択

「ん…」

目を開けて、痛む体を起こす。

「ここは…？」

気がつくくと、草原の様な場所にいた。周りを見渡すと、すね辺りに届きそうな緑

色の草が、一面に広がっている。

「ここが魔界？」

想像してたものと大分違い、軽く戸惑う。

「どこに行けばいいんだろう…」

見渡しても周りには草しかない、砂漠の様にただ広がり続けてるだけだ。

「まあ、動かなきゃ始まらないか」

立ち上がり、ただ宛もなく歩く。

歩いていると、突然頭上から声をかけられた。

「おいお前、人間か？」「うん？」

上を見上げると、黒い羽を生やした少年がいた。

「そうだけど…君は？」「俺はこの案内人、レーティだ。人間がなんの用でこ

こに来たんだけ？それとも迷って来ちゃったのかい？」

少年…レーティは僕の前に降り立ち、疑問を投げ掛けて来る。

「人…悪魔を捜してるんだ、ライアっていう子知らない？」

怪しさはあるけど、聞かないことには始まらないしね…。

「ライア…？まさかライア＝クローディアのことか？」「名字の方は知らないけど

さ…有名なの？」

少年の動揺ぶりに、なんとなく嫌な気持ちが始き立つ。

「有名どころか、クローディアって言ったら魔界じゃかなりの名家

だぜ」「そう

なんだ…」

名家か…だからあんなに厳しい親なんだな。

「送ってやつてもいいけど…後が怖いねえ」「なんとか出来ないかな？どうして

も会いたいんだ」

少年は腕を組んで考える、その時間すら僕には惜しく感じた。

「はあ…いつか、なんか兄ちゃん切羽詰まってる感じだしよ」「ありがとう！」

「んじゃ、さつさと送ってやるからさ」

少年はニパツと笑い、こちらに両手を向けて何かを呟き始める。

「* & amp ; % " @ # + / … ! 」

強い光りが迸り、何も見えなくなる。

「いて！」

気がつくくと、街の中の様な場所にしりもちをついていた。目の前には、大きな屋

敷が建っている。

「ここがライアちゃんの家…？」

それにしても、人間界と本当にあまり変わらないんだなあ…。立ち上がって周り

を見渡してそう思う。設備された道路や走る車、行き交う人々は羽やら角やら生

えてはいるが…。

「そんなことはいいんだった…さて、どうするか」

目の前には大きな門があつて、威圧感を十二分にはなっている。もちろん鍵もし

まっついていて、呼び鈴もついていない。まあ、呼び鈴なんかあつても僕相手じゃ出

てくれなさそうだが…

「強行突破…かな」

とは大袈裟に言っても、ただ門を登るだけなんだけど…

「門の意味ないよなあ」

門をよじ登って、向こう側に降りる。行き交う人々…って今思った
ら悪魔か、彼

らの視線は少し痛かったけど、登りやすい門だったなあ。

「不法侵入かあ…」

なんて言ってる場合じゃない、僕は玄関に向けて走り出した。さすがに名家とい

うのもあって、庭はやら広いし、門から玄関までも距離がある。

門から走ること20秒ほど、軽く息をつきながら玄関に手をかける。

「呼び鈴みたいなものもないし…いつか」

なんていうか、躊躇しなくなって来た自分が怖い…

「お邪魔します」

かなり小さい声でそう呟いて、僕は中に入る。もちろん靴は脱いで
手に持つ。

「どこにいるのかな…？あの二人に見つかったらまずいだろうし」

というか、本当に気付かれてないのだろうか？

「なるようになれ…だ」

なるべく足音を出さない様に歩き、一つ一つ部屋を確認していく。
ドアをそーっ

と開けて中を覗き込む様は、誰がどう見ても泥棒だな…うん、忘れ
よう。

「広すぎるよなあ…」

広間の至る箇所に部屋があり、一つ一つの部屋を捜すのは時間がか
かりそうだな

あ…。

一階にはいなさそうだったので、二階にいつてみることにした。も
ちろん一階全

ての部屋を見たわけじゃないんだけどね…広さで諦めたわけでもな

いよ！

二階に上がると、一階と同じ様にかなりの部屋があるのを見てとれた。ただし二

階は、通路ごとに部屋がいくつかに分かれているから、一階程時間はかからない

はず…だといいなあ

また部屋を一つずつ確認し、四つ目の部屋を確認した辺りで声が聞こえた。

「出来ないよ…！」

ビクツと身を竦め、声が聞こえた方へと向かってみる。

推測だけど、奥側から三番目の部屋から声が聞こえた気がした。一つの通路の片

方側だけで、30以上は部屋がありそうだから、結構離れている。

声が聞こえた部屋の前に来ると、また声が聞こえた。

「でも…がんばらないと…！」

ライアちゃんの声だ…！！

僕は部屋のドアをそっと開けて、中を窺う。広く豪華な部屋で、ライアちゃんが

机に向かい何かをしていた。

部屋には他に誰もいなさそうなので、そっと部屋に入り、ライアちゃんに近付く

。というか、声かければいいんじゃないか？これじゃ単なるヘンタイだろ…

「ライアちゃん」

近寄りながら、小さな声で呼び掛ける。

「え？…十夜！？」

こちらを振り向いたライアちゃんが大声をあげる。僕はとっさに、「しー」とひ

とさし指を口の前に立てる。

「十夜…どうして…どうして？」

涙を目の端に浮かべながら、立ち上がって僕に飛び付いて来る。

「良かった…無事で良かった！」「ライアちゃん…」

声は大きいままだったが、僕にすがりついて泣く彼女を膝をついて抱き締めた。

「パパが…ひつく…あんなに強くしたから…ひつく…十夜死んじやったかと…」

「うん…僕は大丈夫だから…」

僕のことを気にしてくれたんだ…。

「あんなお別れは僕は嫌だから…話がしたかった」「私も…嫌だった」

大分落ち着いた彼女を抱き締めたまま、僕は言った。

「帰らない？僕はライアちゃんと離れたくない」「…ごめんね」

その謝罪の言葉が、何を意味するのか僕には分からなかった。

「どうしたの？」「私は…帰らないよ…」

ライアちゃんの腕に力がこもり、僕の体を強く抱き締める。

「…どうして？」

予想外の言葉だった。その言葉がぐるぐると僕の脳内をかけめぐる。

「私は帰れない…」「僕のこと嫌いになった？」

ライアちゃんは強く抱き締めたまま、沈黙してしまふ。

「ライアちゃんが辛い思いをするのは嫌なんだ…だから、だからさ

！」「だめ…

なの！」

弱々しく、でも強くライアちゃんはそう言った。

「ライアちゃん…」「だめ…なの…だから…だから…！」

ライアちゃんは僕を振り払って、背を向けた。

「…帰って、お願いだから…」

涙まじりの声で、そう呟く。

「ライアちゃん…」「帰って…！」

出しかけた手が止まって、そのまま落ちる。

「帰ってよ…」「…分からないよ…」

頭が混乱する。何が起きてるのか分からない、ライアちゃんが何を言っているのか分からない。

「私のことを思うなら…今は帰って…」

胸に開いていた穴が、大きくなるのを感じた。

「……分かった…よ…ごめんね…帰る…から」

自分が何を言っているのか分からない、言葉になっただろうかどうかわからない。

頬を熱いものが通り過ぎて行く、フラフラと立ち上がり、部屋を出て行く。最後

に彼女を見る、彼女は背を向けたまま、小さな背中を震わせていた。

「よう兄ちゃん、お早いお帰りで」「…やあ」

屋敷を出た瞬間に、またここに戻された。どういった原理なのかは、今は知る気

も起きない。

「だめだった…っていう顔してるな」「…うるせえ」

八つ当たりしてもしょうがないことは分かっている、でもせずにはいられなかった。

。

「俺も色んな人間見てきたけどよ…少しは相手の気持ちも察してやれよ」「がき

が、知った口たたくんじゃねーよ!」

少年はケラケラと笑いながら、「一応今年で448歳なんだぜ」と言った。

「どうでもいいよ…」「失礼なやつだな、まあちつとは頭冷やせよ。

…そっぴや

前にもお前みたいなのやつがいたな」「へえ…」

脱力感が体から離れずに、そんな話を聞く気には到底なれない。

「何年前だったかなあ、兄ちゃんに似た女性だったな」「へえ…って!?!」

まさか…母さん?

「兄ちゃんと同じ風に来て、兄ちゃんと同じ風になって帰って行っただぜ」「で?

それどうなったの?」

母さんにも若い頃があっただな…って失礼か。

「そっから先は…まあ秘密だよ」「はあ!?!」

なんなんだこいつは…また脱力感が戻ってくる。

「まあまあ、この話でもしてやるからそう気を落とすなよ」

周りを見渡しながら少年はそう言うが、「聞きたくもねーよ」と僕はそっけなく言う。

「ここは主に人間が来る場所だな」

聞いちゃいねーし…。

「魔界と人間界の中間地点みたいなもんだな、で俺が来た人間を魔界の行きたい

場所にするってわけだ、簡単だろ?」「はいはい…」

もう聞き流してさっさと帰ろう…何回も帰ってって言われたしな。

「んで魔界での用事が終わるとここに戻るんだぜ、便利だろ?」「

はいはい…そ

うだね」「…いい加減にせんかいポケエ!」

少年はグーで僕の右頬を殴って来た。もちろん、かなり痛い…って
いうか頭クラ

クラする…。

「相手のこと信じれないで何勝手にいじけてんだくそがきが!」「
てめえ…!」

反射的に体を起こし、僕は少年に殴りかかる。何かかキレた気がし
た。

「んなもんだたるかよ!」

軽くかわされて、僕はカウンターで腹にパンチされぶっ飛ばされる。「お前は本当に相手を見て来たのか!? 自分の感情に流されてんじやねえぞ!」

とっさに、最後に見たライアちゃんを思い出す。小さな背中を震わせて、一人寂

しそくに立っている様子を…。

「でも…」でもも勝手もねえんだよ! お前が辛いなら、相手にとつても死ぬ程

辛いもんだったんじゃねえのかよ!？」

そう言われて、はっと気付いた。僕はライアちゃんのために来た、でもそれが的

外れだとしたら…僕が無事で良かったと泣いてくれたライアちゃん、ならあの決

断はライアちゃんにも辛いものだったのか…?

「好きな相手なら、信じてやれよ、何か考えがあるんだろ」

僕は何も考えてなかった…ただ、無理やり帰されてライアちゃんが辛い思いをし

ているものだと思っ付けていた。

「好きな相手を信じて、それで結果傷ついても、立派なことだと思っぜ」「いち

いち…セリフがくさいよ」

倒れたまま、僕はそう呟く。

「うっせえ、これは性質なんだよ…そんだけのつら出来るなら、もう大丈夫だろ

?」「ああ…お節介馬鹿のせいだね」

不安はある、でも…僕はライアちゃんを信じる。分からないことだらけだけど、

彼女も現実から逃げないで闘っているんだろう…そんな風に思う僕を馬鹿だと思

うなら勝手に思えばいいさ、それでも僕は…彼女を信じたい。

「んじゃ、さつさと帰ってお前も今やるべきことをやっていよう、
そいつに負け
ないぐらいによ」「言われなくてもな……!」
僕は清々しい気持ちで、視界が白く染まって行くのをその身に感じ
た。

再会、そして・・・

「それじゃ、行ってくるよ母さん」「気をつけてね、私も仕事だわあ」

僕は玄関を出て、晴れ渡った春の空を眺め目を細める。

「大分日差しも強くなってきたなあ……」「おう十夜、何してんだ？」「いつの間にか横にいた山下が、僕に声をかけてくる。

「いきなり湧いて出るなよ、ゴキブリだと思うだろ？」「ひでえなあ……まあ行こ

うぜ」

僕の毒舌に慣れてるこいつは、大抵のことは聞き流すようだ。歩きながら、山下に話し掛ける。

「しっかし……なんで大学に入ってもお前と一緒になのかねえ」「いいじゃん、俺ら

はマブだちだろ……ってお前何十回それ言ってたよ」「迷惑だな、ゴキブリの

ほうがたまにしか現われない分数倍はましだ……何回言っても言い切れないな」「

ゴキブリに大分こだわるな……ゴキブリ以下とかしまいには泣くぞ」「泣きたきゃ

泣けよ」

はは、と笑いながら僕は歩く。山下は目に手を当てて、「えーん」とかやってやがる。

「そういや、彼女どうしたんだ？あ……桜庭さんだっけか？」「もち、毎日ラブ

ラブに決まってるんだろ」

ニヤニヤと笑いながら言う山下、なんとなく頭を小突く。

「いってーな」「うっせえ」「そういうお前も、彼女でも作った

らどうなんだ

？大学にもバイト先にも、可愛い子いっぱいいるじゃねーか」

彼女が、「今のところ作る気はないさ」「とかなんとか言いながら、かなり告

白されてるくせによー」「断ってるよ」

未だに彼女を忘れられない僕は、女々しいのかねえ…。

「もったいないなー…お前が彼女作らないと、ダブルデート出来ないだろ！」

お前と一緒になんてお断りだつづの」「ひでえ」「はは」

そう、あれからもう四年近くの月日が流れていたんだ。

今じゃ大学二年生になり、バイトもしながら結構楽しくやっている。最初は不安でいっぱいだったが、案外なんとかなるもので、対人恐怖症だった頃

の自分が恥ずかしい。

それもこれも、彼女のおかげだった。彼女がいたから、僕は今ここに

いる。大変なことも色々あったけど、楽しくやれているんだ…でもやっぱり、彼女のこ

とが忘れられず、今でもたまに心に穴を感じる時がある。

たまに告白をオーケーしてしまいそうになるが、やっぱり好きでもない子と付き

合うのは相手に悪いし…ね？

「あー…今日も一日お疲れ僕」

大学で講義を受けた後にバイトをし、大体帰ってくるのはいつも十時頃の僕。

「ただいまー…って相変わらず母さんはいないな」

春は色々あって、母さんも仕事忙しいんだろなあ…今度飯にでも連れてくか。

玄関から上がって、自分の部屋に戻る。ドアを開けてもいつもの様にそこには誰

も…あれ？

「あ、おかえりなさい」

僕は絶句した。

「それとも、私がただいまなのかな？」

久し振りに見たその笑顔、大人っぽくはなっているものの、その面影は昔のままだ。

「誰だか忘れちゃった…？」

言葉が出る前に、体が動いていた。

「わっ！？十夜ってば…」

ただ彼女を強く抱き締める。

「もう…」

そう言いながらも、ライアちゃんも強く抱き締め返してくれる。

「おかえりライアちゃん…！」「うん…ただいま」

今はそれしか言えなかった。言いたいことはたくさんあったけど、顔を見たら全

て吹き飛んでしまった。

「夢じゃない…よね？」「夢じゃないよ、ほら」

軽く口付けをしてくるライアちゃん、その感触は、確かに本物だった。

「ずっと…待ってた、馬鹿かもしれないけど、ずっと信じて待ってた」「馬鹿な

んかじゃないよ…ありがとう、十夜…」

僕らは十分程抱き合ってから、少し離れた。

「話したいことがたくさんある…」「うん、私も」「ライアちゃん…大分成長し

たね」

身長が160センチぐらいになって、正直びっくりした…胸も大

きくなつたなあ…

黒のスーツが良く似合う。

「十夜も、大きくなつたねー」「そりゃ男だもん、今175ぐらいだつたかな?」「

むー…勝てなかつたね」

前の僕なら微妙に抜かされてるなあ…。

「ライアちゃんには負けないよ」「ぶーぶー、十夜より大きくなりたかつたなあ

」

100センチ以上も伸びたら十分じゃ…?

「でも…良かった…本当に」「うん…私頑張ったもん」「ライアちゃんに帰れっ

て言われて傷ついたなあ…」「うっ…」

なんか、人をからかうというかいじる癖がついてる自分がいるなあ。

「あれはその…十夜にまた迷惑かけたくなかつたし…私も逃げるの嫌だつたんだ

もん…」「それでも傷ついたなあ…」「うーうー…十夜に余計な心配させたくな

かつたの…ごめんなさい」

僕はライアちゃんの耳元で囁く。「ごによごによしてくれたら許してあげる」

ライアちゃんは真っ赤になって、「と、十夜のエッチー!」と叫んだ。

「あはは、冗談だよ。…でももう少し、信用して欲しかったなあ」

「うー…ごめ

んね…?ごによごによしてあげるから許して…」「えっ!?!」

今度は僕が赤くなる番だつた。

「えへへ、十夜のエッチー」「全く…ライアちゃんには敵わないなあ」

本当に、一生勝てそうにもない…

「そういえば、またこの家に住んだよね?」「うん、十夜と十夜のお母さんが良ければね」「僕はもちろん大歓迎だし…母さんも歓迎すると思うよ」「やった

ー、これからは…ずっと一緒にいられるね!」「うん…!」「僕は嬉しかった。涙出そうだったけど、男だから一応我慢した。

「私もこつちで働いて、がんばるから…」「そういえば…ライアちゃんのお母さ

んとかお父さんは…大丈夫?」

ライアちゃんがここにいるということは、大丈夫だということなのだろうけど…心配だった。

「二人は大丈夫だよ、ちゃんと大学も出たからねー…三年間で」「え!?!」

そういえばそうだよなあ…四年間だったらまだ大学だろうし…。

「本当は二年間で卒業出来ただけど、教授とかに止められちゃって…後半

一年間はずっと論文とかだったよ」「すごいなあ…ライアちゃんがばったね」「

えへへ、早く十夜に会いたかったんだもん」

あーもー!可愛いなああ!

「パパとママは、家名を貶めるようなことしなければ平気だから、首席で大学も

上がったから文句も言えないよー」「なるほどね…結婚する時ぐらいは挨拶に行

くけど…さ」

言っていてちよつと恥ずかしい、ライアちゃんも少し照れくさそうにしている。

「これからも…ずっと、ずっとよろしくね、十夜?」「もちろん、ずっとー

緒だよ」

僕はライアちゃんを抱き締めた。ライアちゃんも、抱き締め返してくれた。

この先何があるか分からないけど……二人なら平気な気がした。

再会、そして・・・（後書き）

止むことシリーズを書く前（三年ぐらい前）に書いたものなので、
へタレっぷりは尋常じゃないです。

最後はいまいち投げやりな感が拭えないのですが・・・あの時は一
生懸命書いたんですorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1487b/>

悪魔来

2010年10月10日20時26分発行